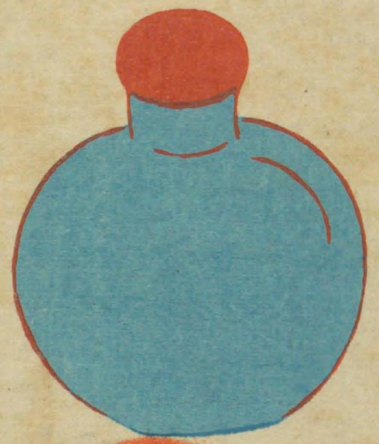
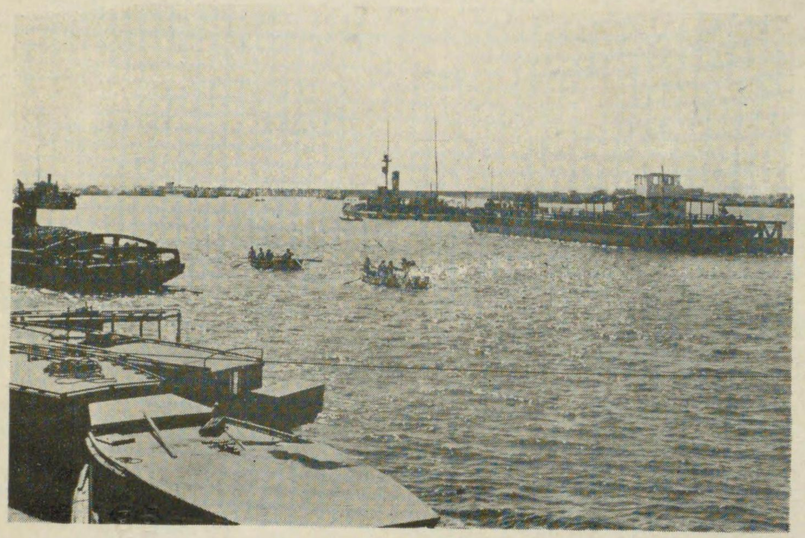
587-340
1200501524779
587
340
複写

318
納本
二2875

滿鮮



昭和七年一月二日 帝國圖書館藏



哈爾濱松花江の雄姿

新

387-340

目次

旅する心 三
五月の京城 七
鵲 一三
天香園の一夕 一七
京城大學訪問 二一
白遂堂と延禧黌 二五
京元線・咸鏡線 二九
土饅頭の墓 三七
圖們江附近 四一
會寧 四二
圖們鐵道 四六
國際鐵橋 五〇

間島　五二
鐘城から慶源　八五
天池への思慕　九一
雄基附近　一〇三
羅津　一〇九
羅津から清津へ　一二一
羅南の街　一二七
朱乙　一二九
興南での教訓　一三三
咸興　一三九
朝鮮の近狀を或友へ　一四五
京城から奉天へ　一五三
大連の三日　一五九
こほろぎ　一七一

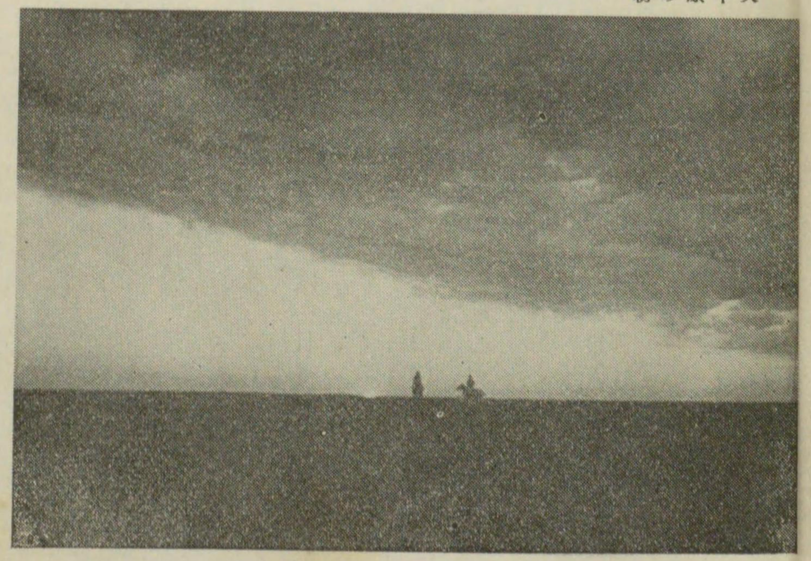
苦力の問題　一七七
北大營　一八九
奉天のクロスに立ちて　一九五
陣中夜話　二一一
兵工廠　二二七
石原中佐　二三三
吉敦鐵道　二四一
敦化の宿　二四九
日將軍　二五六
敦化の街　二五九
醉鮮旅館　二六九
吉林の散歩　二七三
多門將軍　二八三
新國都一瞥　二九三

新京 三〇九
鄭孝胥と駒井徳三 三一九
李杜と丁超 三二七
第二のモスコー 三三三
赤と白と日本 三四一
「われ等」の親指 三五三
李亮中佐 三六三
志士の碑 三七一
人間馬占山 三七七

裝幀 平福百穂

滿・鮮

旅する心



大平原の朝

旅する心

旅こそ私の生命から二番目の趣味であつたのであつたが、ここ十五年間、東京を離れがたい忙しさが、その興趣をころしころし、今日に至つたものであつた。

しかし、このごろは國に横はる憂鬱が、そしてそのひろがりが、一日は一日と重壓を加へて來、巷にはクー・デ・ターの書が繙かれ、ファッショの聲々さへどこからともなくおこつてきて、新興日本の前路に一抹の雲を漂はさしてきた。

或るものは、その起點が奉天にあるとした。私は謎の奉天に異常の興味をもつやうになつた。私は初夏の玄海を越えたのであつた。

だが、私の關心は必ずしも、一時的突風の潛在に向つて解剖の興味をそそられるものではなく、民族として恆久的に横はるであらう問題に向つて彫琢を深うしたきこころに燃えてゐたのであつた。

また、我國の行方、我等民衆の一大決意が、新滿洲國のそれと、どういふ相關的の立場を歩かなくてはならぬか。それには新國家成立に内在するいろいろのことを、新京や、奉天において、よく究明するの必要もあるし、なほ、その財政的基礎に向つて正確な知識を得たい念願もあつたのである。

そして朝鮮の思想的の動きを見るために、京城と、間島とに比較的永らく滯在して見たく思つた。ことに間島は、朝鮮民族隱謀の策源地と見られてをるので、それだけ私の興味も深かつたわけである。また、それより別の意味において、新たに民族的、經濟的に重要さを加へ來つた圖們江一帶及び羅津、雄基の諸地をも併せて視察するのがその任務とするところであつた。

それから、日、滿、蘇、支四國の一大暗躍地である哈爾濱の國際的動きを見るのも私の役割であり、次ぎに我軍兵火の最前線敦化、齊々哈爾をも豫定の旅行地として出發したのであつた。

それらのうち、どれだけの役割を遂げることができたか、顧みて、いささか、恥しいとは思ふけれども、切々の情念、ここにうちすておくこともできないで、雜駁であり、統制がないのにもかかはらず、ここに「滿・鮮」としてまとめて見た。

もとより、この一書に新滿洲國や、朝鮮の全貌を示現しようとするのではなく、また、私の經綸をこの書をかりて述べようとするのでもないけれど、しかしその片鱗のうちにも、自己のやみ

がたきものを打込んであることは事實である。

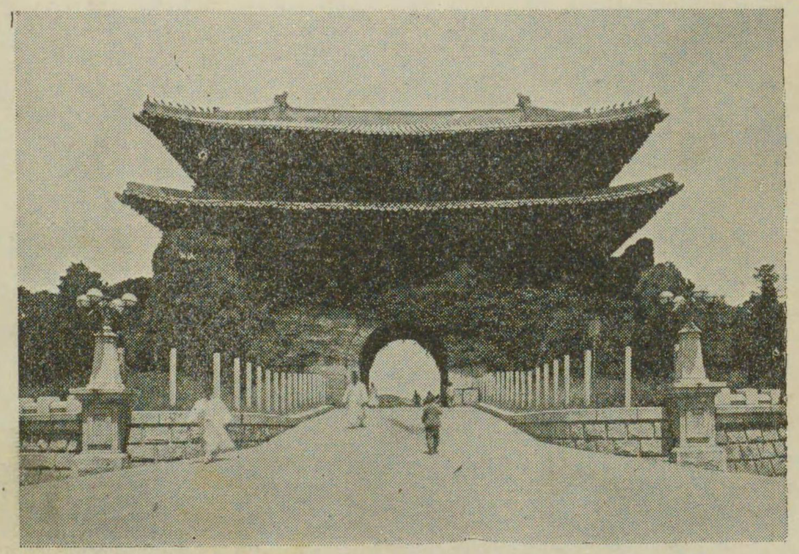
人生が一つの意義ある目標に向つてその全生涯を邁進せなければならないやうに、團體や國家にもハッキリした大きな目的、目標、卽ち八千萬の人々がこの道を歩いて行かなければ、その國家としての最後のところへ達成し得ないと云ふ意義ある國家の大きな道がなければならぬ筈だ。

その大きな道はどこにあるのだ？

だが、その巨道はこれから私の說くであらうところの、滿鮮のところどころの觀察で拾つてもらひたいものだと思つてをる。

五月の京城

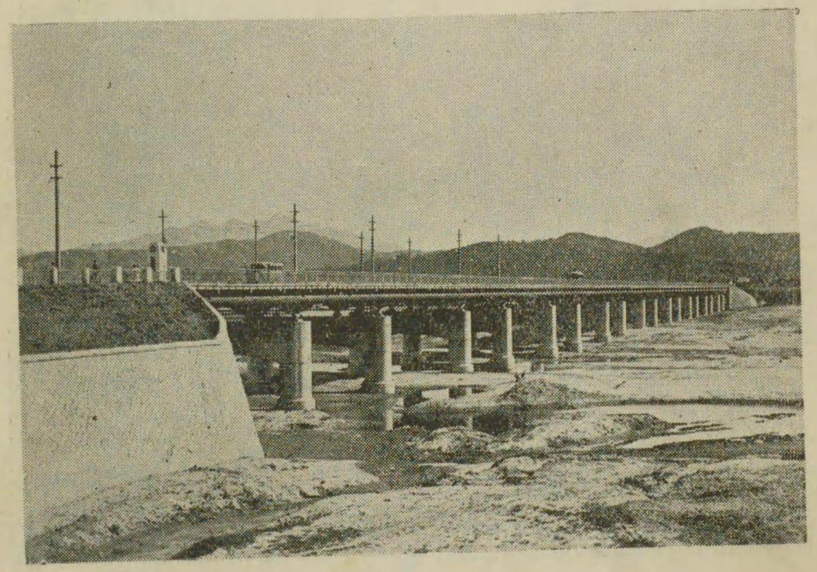
沈靜（南天門）



五月の京城

五月の朝、朝鮮の自然を味ふにとてもいいシーズンであるばかりでなく、人々もまた初夏の天地を最も愛好してをるがやうに見える。

私が京城についたのは、五月九日の夕がたであつた。釜山から京城までの眞晝がとてもあつくるしくて、これではとてもいい研究も出來ないし、しつくりして人々との話もできないであらうことを恐れてゐたのであつたが、朝鮮の夕ぐれは大陸のそれのごとく、晝間の熱氣とは截然と區別されて、冷々して、とてもいい氣持になれるのであつた。



絶勝の漢江橋附近

五月の朝

それに朝ぼらけのすがすがしさといつたら全く言葉にも出ぬほどのからだの輕さと、快感とが同時に全身にあふれみなぎつてくるのである。

ポプラや、アカシヤの綠で京城の家々を包圍し、柳さへ一面に青みわたつてをるところへ、紛紅、玉色、雪白の目もさめるばかりの色彩の衣をまとへる女人との配映が何とも云へぬいい調和をなすのであつた。

×

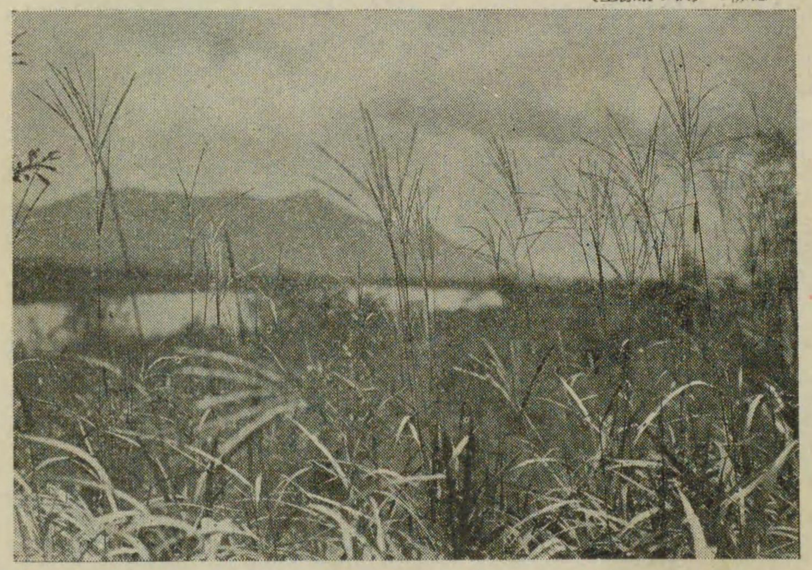
それから京城の夕ぐれの景色がまた油畫そつくりである。朝鮮女の美はしさは、その個々の姿にはない。その足どりにもない。その面貌にもないのである。半町か一町ぐらゐの間隔をおいたところから、あの綠色化した美しい自然のもとを歩く

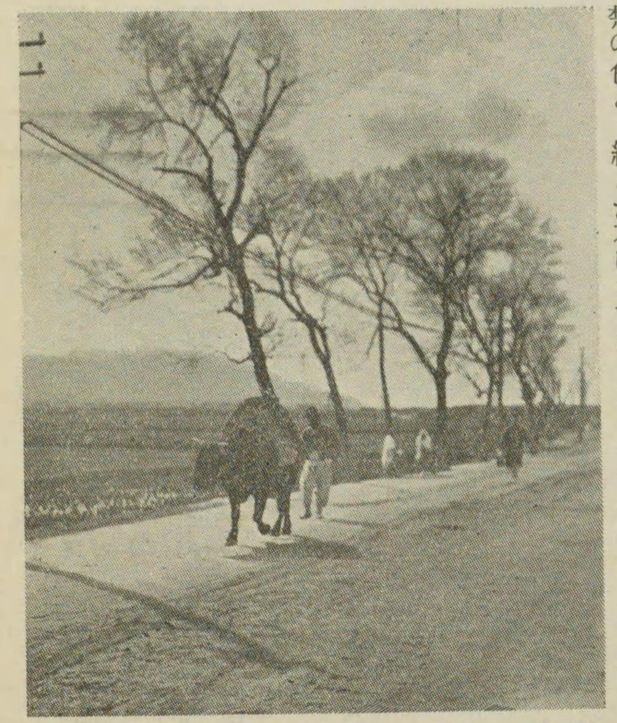
とりどりの衣裝の麗はしさにあるのである。そしてそのうへ京城の空のいろが、彼等の好みの色々とピッタリするところにあるのである。

×

京城の郊外は、秋の風色もすてがたいものがあるけれども、どことなく、さびしさが勝ちすぎてくる。それよりは五月の初めから半ばにかけてあの清涼里のプラタナス、ポプラ、欅、樅、アカシヤ、柳の新芽が勢よく伸びてくる綠の光を見たときの私の氣持ののびやかさだ。そして朝ぼらけ、その樹間を逍遙すれば、露の一しづく、二しづくが自分の浴衣に、自分の頰に落ちてくるときのあのすがすがしさは、私の一生のうちでも、たびたびはくりかへすことができな

穗靡く（秋の清涼里）



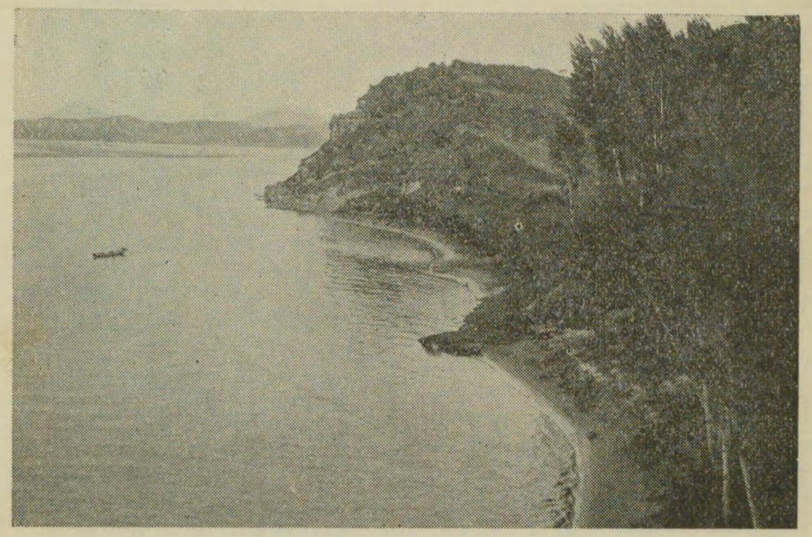


野路

いであらう愉快な思ひ出でだ。

私はそして歴史的に深い由緒をもつ貞陵里のあの明るい水石の自然美にひたつたとき、我が安藝の宮島の水色をおもひだしたのであつた。しかし石質の赤味をおびて朝鮮でなければ味へぬ清楚の色と、線とが石にまでにじみ入つてをるのであつた。彼等の民族的に求め、あこがれるところの色彩が自然にまで深くにじみ入り、喰ひ入つてをるのは實におもしろいことと思つたのである。

私は李太祖と非常の關係を有つ貞陵里の自然が、五百四十年以前から、やつぱり現在のやうにものしづかで、樹木の美も、水の清らかさも、岩や置石の明るさも兼ね備へてをつたであらうことなどを思ひつつ、いくたびも佛川（今は



漾々（漢江）

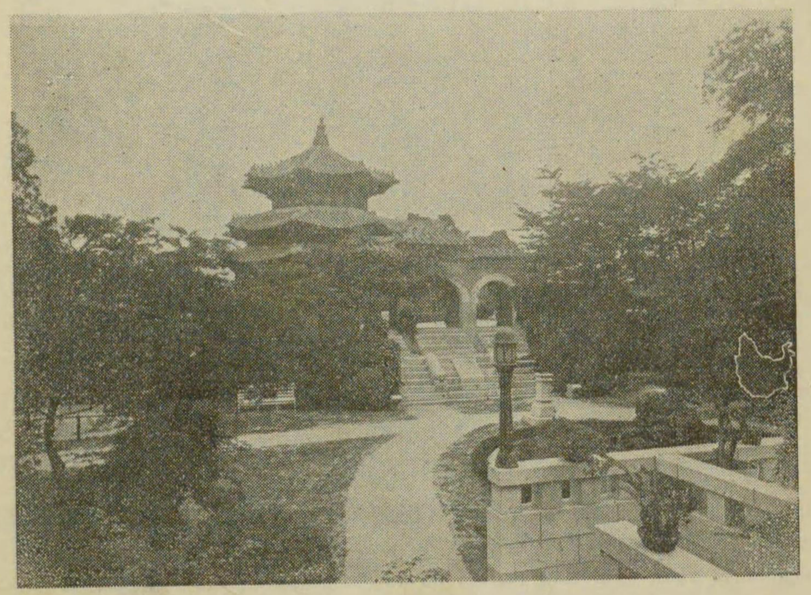
萬歳川といふ）の堤をうろつき歩くのであつた。

×

ときにまた、私の永年の交遊で弟の如くも思つてゐるHとKとを伴つて漢江橋を渡り、あの小高い明水臺から漢江一帶の絶勝を指呼しつつ李朝以來の社會史を語つたり、新羅の佛像藝術や、高麗の陶磁器藝術を中心として半島文化の推移を話したりしておもしろい初夏の半日をすごしたことなどは東京を出發するとき豫期はしなかつたところであつた。旅の印象はやつぱり愉快なものであり、そして京城の初夏で味うた清明、瀟洒の印象は、私の生き行くかぎりにおいて、私にいつでもすがすがしい氣持をよびおこしてくれるのである。

鵲

りどみの庭後

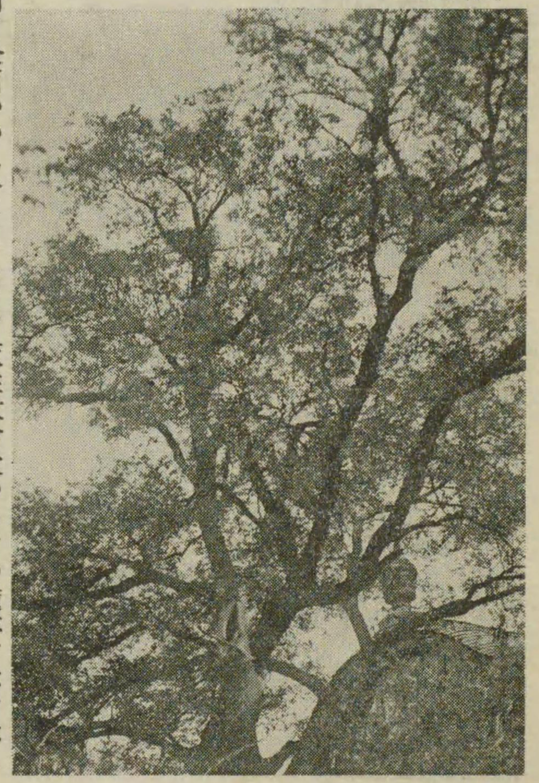


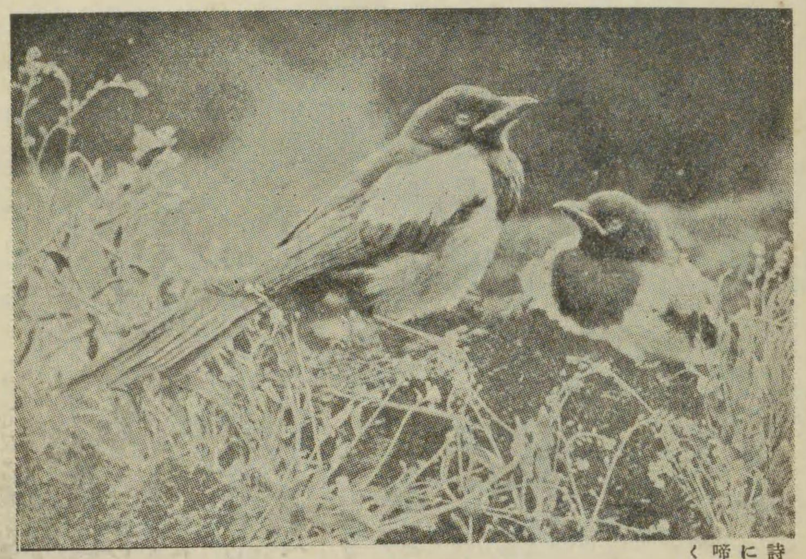
鵲

私は京城滯在中、一ばん愉快であつたのは、朝の散歩であつた。空が白むのを待ちかねてよく、ホテルの中庭におりたちて、いつものごとく槐樹の花降る下で瞑想にふけるのであつた。そして朝もやが樹梢を全面つつんでをるとき、天主教會堂のあけの鐘がすがすがしくなりひびいてくるのであつた。

私は宗教心はないやうでも、私のどこかに巣喰つてをるであらう或る解きがたきXに向つて、いつも解剖のメスをむけてはゐるが、そのたびごとに、くたびれて、XはXをダブラせてゆくばかりであるのだ。

槐樹に巣くふ





詩に啼く

槐樹の梢に二つの鵲の巣が殘されてあつた。もう今年の雛は立春と共に巣立ちした跡なのであつた。私が、いくとせか前の冬に京城を訪れたときは、彼等は草葉とか、藁なぞを一生懸命に銜んできて、とても巧妙に巣をこしらへてをる最中であつた。私は、七夕の歌において、そして鵲そのものを歌つた二、三の記憶せる和歌において、彼にたいする愛著を深くしてをるのであつた。

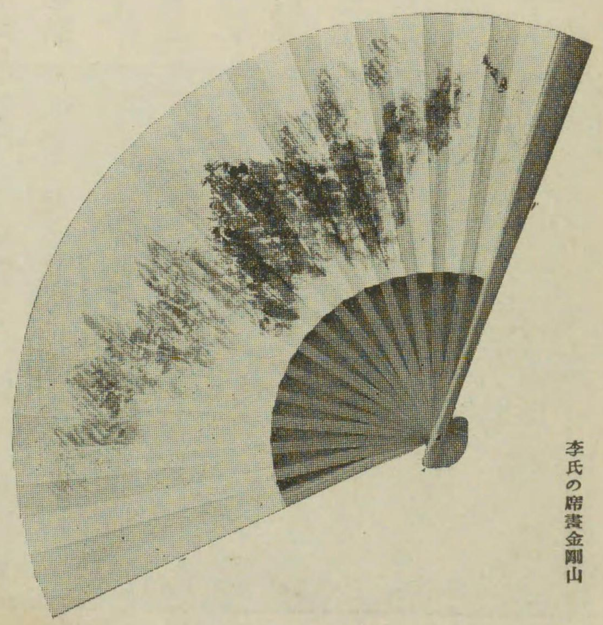
鵲は、朝鮮においても、支那においても吉鳥として民族的に鴉は凶事、病氣を好まれてゐる。豫報する不吉の鳥として彼國でも、我國でも嫌はれものになつてをるが、鵲が朝方、庭先きあたりに鳴けば「今日は誰かいい便りをもつて訪ねてくる」と喜び信ぜられてゐるのである。殊に清國の始祖を

生んだ佛古倫姫に朱果を銜へてきて受胎させた鳥は鵲であつたので、滿洲にては神鳥と思はれてゐるのである。

鵲は詩の鳥である。牽牛と織女とが一年のうちに、たつた一回出逢ふために銀河を渡らねばならぬ。彼等は、幾つもの羽を連ねて天の河に橋を架ける。この役割を果したため、鵲の頭毛はことごとく剝落したと、朝鮮の俚俗では傳へられてをるのである。ともかく、鵲は巣をつくることが天才であり、そして禁中の御階にもたとへらるる瑞鳥でもあるのである。

私は、さうした意味より他にも、彼を好もしく思ふことがある。それは、彼が人なつこく、常に人家の周圍にある樹木を選んで巣くふことである。そのうへ、槐樹でも、楊柳でも、雅致ある佳木を選んで巣くふことである。柳の絮が細く降りしくとき、槐樹の花の白黄に咲くとき、鵲は槐樹から楊柳へ、楊柳から槐樹へと移り啼く。このときたれか一片の詩を思はないものがあらうか。

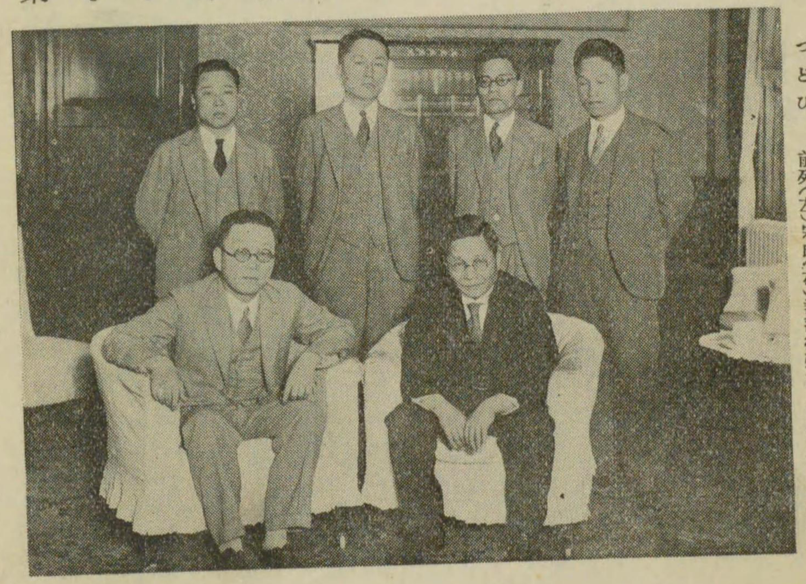
天香園の一夕



李氏の扇畫金剛山

天香園の一夕

京城で一つの愉悅を加へたのは、宋鎭禹大人が余がために、京城の藝術家の人々と、接觸するの機會をつくつて下さつたことである。五月十一日。その夜はもの靜かな街外れの東大門外、天香園を選び、そしてその席には朝鮮文壇の耆宿たる李光洙氏をはじめ、劇作家尹白南、畫家李象範、詩人朱耀翰、金炳奭、白南雲の諸氏をも陪賓として招待してあつた。廣々とした油紙を敷いた溫突の部屋に、臂据ゑの長い枕、疊一枚くらゐの赤い緞子の座蒲團、ヒョロ長い山水畫の軸物等の、何れも大陸的の悠長な氣分の出る調度だけであつた。東



つどひ　前列(左)宋氏(右)著者後列左より二人目李光洙氏

京や、朝鮮の藝術上その他の漫談の花が咲いてをるとき、かうした宴にはつきものであらう名物五人行列が綺羅をこらして楚々として入つてくる。どちらも新聞人とか、藝術家とかで遠慮のいらぬ人々のみで肩のこるやうな挨拶もなく、純朝鮮風の料理をつツつくのだつた。

私はこれまで、いろんなところで、朝鮮料理はたべた。しかし今夜のやうな心をこめての精粹は初めてであつた。すべての方式や、鹽梅やは支那料理よりはややあつさりしてをつた。正直のところ、今までは、朝鮮料理にさしたる執著はもたなかつたが、かうして時間と材料とを與へて準備をすれば、支那料理に何等遜色あるものでなく、むしろ私は支那料理の八寶飯に似通つた藥食や、牛の肋骨燒きは、却つて特色ある美味として誇りたいくらゐのものであると思つた。藥食は糯米に、棗、栗、松の實、蜂蜜等々を混ぜて蒸かした赤飯で、牛の肋骨燒きは、肉のついたままの肋骨に味をつけて燒いたもので、一寸氣味の惡いやうなところもあるが、味はなかなかで、恐らく朝鮮料理中の壓卷として許されるものではないだらうか。かうした新風味に、私の觸角はますます躍り上つて、酒精の要求さへ一段と增してくるのであつた。それから、主客が日鮮取りまぜての聲調でいろいろな歌を歌つたり、踊つたり、獨白つたりする。つづいて、名妓一行のいとも珍しい無禮講がはじまる。アリランの歌は、伽倻琴の音とともに、夏の夜に侘しく冴えて、

繪筆を採る佳人さへ、しばし運筆をひかへてきき入るのであつた。かうした劇的の瞬間にも、李朝時代の頽爛したる面影が、ちらちら目の前に浮び出ててくるのであつた。

×

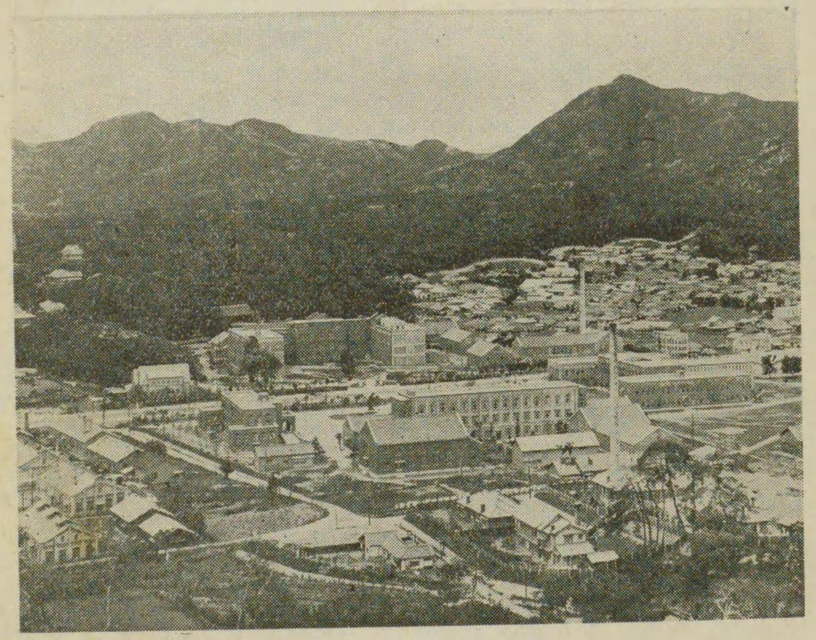
青田、象範氏は余がために、扇面に靈峯金剛山夏の朝の姿を描き、光洙氏は「君と我、ちがふは生れ、人の子の、まごころ同じ、ああ君と我」とかきすててあつた。

×

光洙氏の朝鮮における文壇的地位は我菊池寛氏の如く、氏を中心として金井鎭、金億、廉想涉氏が遊弋したり、離合したりしてゐる。その對立的存在として白潮派の金基鎭氏一派があるが、光洙氏といひ、基鎭氏といひ、ともに稻門出である。今でこそ光洙氏をブルジョア派の元老の如く云ふ向もあるが、當年の光洙氏は、民族的にも隨分苦しい戰ひを戰つたことは作物を一讀しても分明する。光洙氏は現在東亞日報の編輯局宰であり、基鎭氏等は、朝鮮日報に同情者多きものの如くである。この二つとも朝鮮文字の新聞である。その他、未來を期待せらるるものも、三、四プロ派の陣營にあるが如くであるが、我國の藝術水準にまで達せしめるには、聊かの努力を要するものの如く見られた。

京城大學訪問

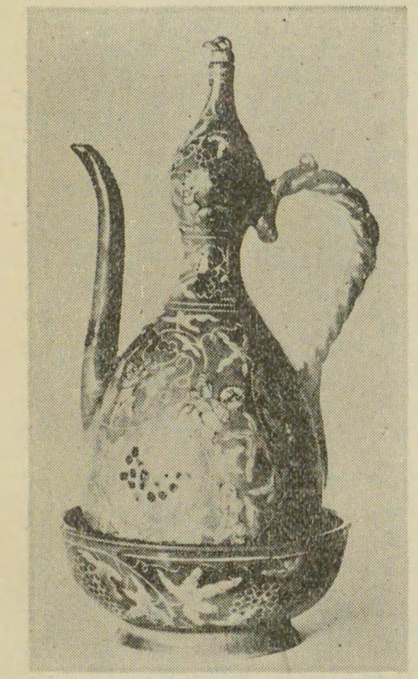
駱駝山麓の京城帝大の全景



京城大學訪問

五月十日午後、延禧嚴の白教授と共に、駱駝山麓の京城帝國大學を訪れた。そして安倍、奥平兩教授及び張之兌、岩崎氏等の案内で先づ「土俗品陳列所」を一瞥することを得た。この陳列所といふのは、年額僅か二、三百圓の豫算の範圍で苦心して集められたもので、あへて大規模のものでなく、旅順の博物館等に比すべくもないが、しかし朝鮮特有の民族的諸相を味ふ上において、やはり特異の存在であるといはねばなるまい。先づそこに陳列された硯、桃型の水入、青玉の細工品、烟管、笠、草笠、濟州島の編笠、婚禮用の衣裳類、農民劇の鳴物から馬鞍、鐙子、軍帽、文武官用の紗帽、玉帶等の色褪せたるが新羅、高麗の黄金時代を、轉た追想せしむ。又、土俗的の各種の假面、朱塗木造の立像、巫覡用の氈笠、五色樣の袗類等々 Shamanism の氣分を漂はせ、舊式の鎧、甲冑、弓矢、鳥銃、大藥筒、環刀等々の並列は在來武器の解除を物語る。そしてその日、食器か、便器かを日鮮人教授間に議せられた眞鍮製の食器及び燭臺、盥等々も薄暗い棚に、その議論をむしろ冷嘲するかの如く、鈍い光を放つてをつた。

それから、安倍、奥平兩教授及び阿部圖書館司書等によりて隣室の圖書館に案内せられたが、さすがに此處へ來ると垂涎萬丈たらざるを得ない。李朝以來の表門から見たところの記録で歴史的に異常の價値をもつ、八百四十八卷の原本李朝實錄及び李朝歴史の璿源譜(王室系譜)、儀式軌範、政經書類、野乘類、百家書類、別集類、醫卜書類、承政院日記、交隣書類等々、十八萬冊といふ尨大な貴重文獻を特別裝置して保管してをる。これだけはたしかに京城大學最大の誇りである。朝鮮は昔から文字の國といはれてゐた。それだけ各種の文獻が豐富であつたらうが、いつでも内外の戰亂には火が伴うた、そして灰燼に歸したものが多かつたのだ。從つて三韓、三國時代の文獻は現在では皆無と云つても差支へなく、僅かばかりの高麗朝時代のものを除けば、その大部は李朝時代のものばかりださうだ。とにかくこの一棟の集積で以て李朝文化三百四十餘年の全貌を窺ひ知ることのできるといふ點において、感慨の念にうたれたのだ。



高麗の青磁

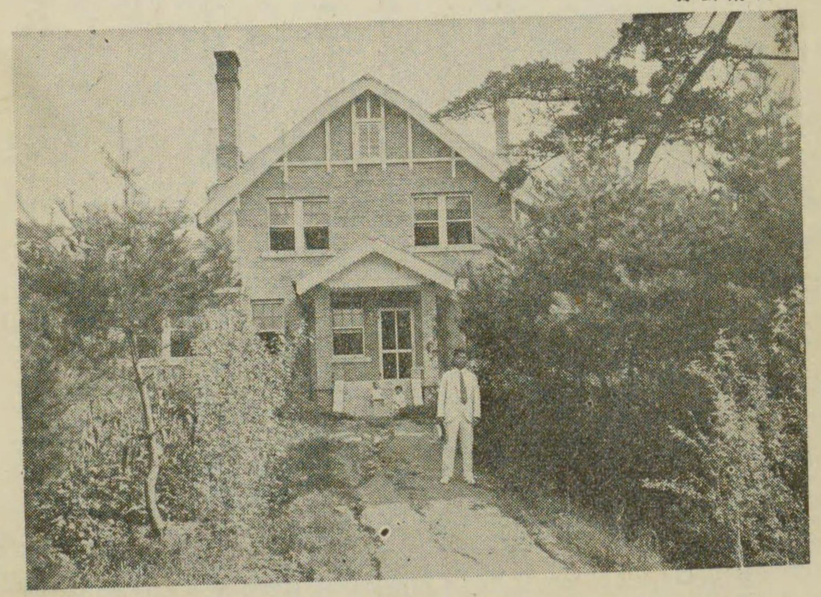
そして前記の古文書は、舊韓國時代の內閣圖書館たる「奎章閣」の所藏であつたことを聞かされて、何となく淋しく感ぜられた。朝鮮古文書の保存は、絕對安全にするの必要あるは勿論であるが、一面には獨占的に大學ばかりが、その恩惠にあづかつてはならぬ。廣く一般に公開利用するの方法をも講じてもらへば一段の幸である。

×

また、私の仄かに聞いたところではあるが、大學生たる朝鮮の人々の志向が、哲學と、法學に傾いて、純文學に入つて行く人々は少いとのことであつたが、希くば、この部面にも意を注いで立派な藝術傳統を持つ、古くなつかしい高麗、新羅をも生かしてもらひたいものである。そして我が內地出の朝鮮藝術研究者には先づ第一に民族文化をつくりあげるところのその言語の研究から發足してもらひたいことを切に望んでおくものである。

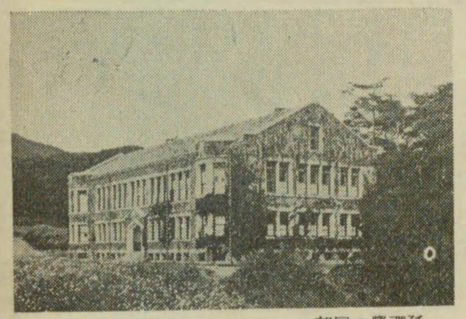
白遂堂と延禧黌

白南雲君



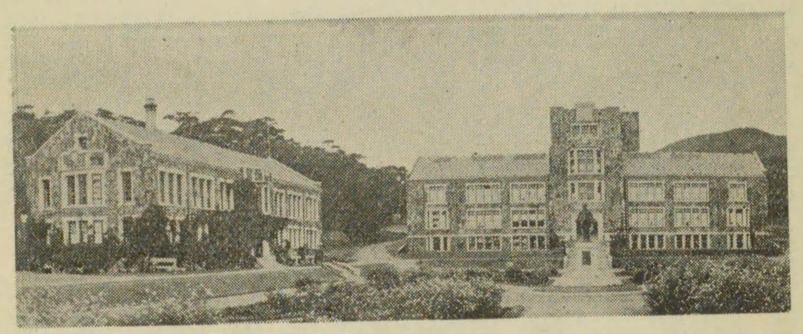
白遂堂と延禧黌

年來の知己である白南雲君から私に、延禧專門學校で一場の演說をせよとのことであつた。私は、別に演說について何等の構圖があつたわけではない。しかして延禧黌は四十萬坪を超過する校庭を有し、蒼松蟠伏して風色の佳なる京城大學の比にあらず、此校は紐育にある東洋宣教師の經營に屬するものとかで教授も西洋人が多く、そして文科、數理科、商科の三分科から成り、將來は綜合大學としての特色ある展開を試みんとおさおさ準備中であるさうだ。丁度、普成專門學校と或る意味で一つの對立をなすもので、これにありては純然たる朝鮮人財閥の經營であるが、民立大學として進まんとしてをる狀景は延禧と同一である。



延禧黌の展望

私は「藝術運動の展開と特殊性」といつたやうな題で一時間近く演說した。今の朝鮮は二千萬の民族を擁しながら、一つの劇場と名のつくものも持たなければ、古典的な芝居を見ることさへ許されない。もちろん現下の狀勢においては種々な制約を受けるために、凡ゆる方面の活動が妨げられつつあるが、かかる場合において、一つの啓蒙運動として、又は大衆的意識の表現としての藝術運動が最も意味あることと思ふ。ここに政治的、社會的の運動のことは須く說くを休めて、この藝術運動、殊に、民衆の日常生活と、直接に結びつくところの、又は、結びつけなければならぬところの此の創造的藝術運動の一面を通してその社會的の任務を果し得るやうに力むべきである、……と說き、最後に日鮮藝術の提携を說いたのであつた。



×

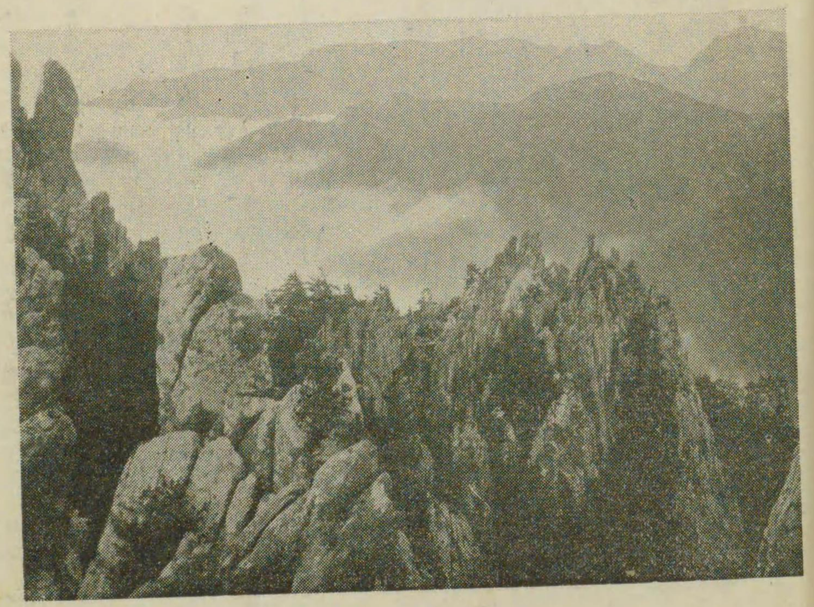
演說がすむと、一通り學校の機構設備を參觀し、それから構內にある白君の家で午餐のもてなしにあづかる。松間の氣持のいい家で圓い卓子を圍みながら、同君の嚴父樂奎大人と初對面の挨拶をした。初對面とは云へ南雲君を通じて久しい間の知己であるので、互に遠慮のない話が始まつた。西瓜のたねをかみながら大人の詩談を私は熱心にき

き入つた。大人は遂堂と號し、全北雅山面の人で今年六十七歳ではあるが矍鑠たるものだ。そして賴山陽や、杜甫、李太白、白樂天の詩評が始まつた。彼は「李太白は大天才である、とても杜甫の如きはその天分において比肩ができない、しかし律詩は杜甫もなかなかうまいので李白に劣らぬものがあつた。それから陶淵明と柳子厚は朱子も讃めてをるが私もそれには異論はない。なほ朝鮮における漢學の主潮は程朱學であるが、陸王學(陸象山と王陽明)もあるにはあるが、儒家ではそれに從ふものは殆んどない」などと話したりしてをつた……私は我國の明治維新の原動力をなしたこれ等の思想を今は、我國でも取上げるものの少いのに淡い感慨が浮んで來た……そして遂堂大人は語を亞いで朝鮮の若い人々にも篤志家はあるから朝鮮でも漢學が廢るやうなこともあるまいが、しかし一般の學生は漢字を無用視してをるのでその前途は淋しいものだ……そして撫然たる遂堂の顏をのぞけば一層淋しさがつのつてくるのであつた。

×

二、三日經つてから遂堂大人から私に一つの軸が屆けられた。「憑飽先聲不見親、今來傾蓋意愈新、盛年屈指詩文士、壯志回顧社會人、萬里晴光江戸月、一天和氣富山春、胷懷開豁要如此。再造奇功任自身」墨痕まさに百パーセント。

京元線・咸鏡線



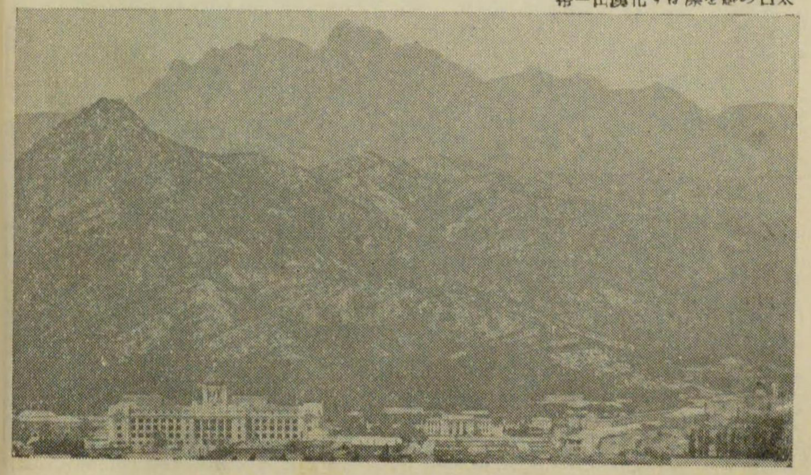
圖金外寒猛夏骨山

京元線・咸鏡線

朝鮮の旅は初夏にかぎる。行く先きざき悉く青葉に迎へられて「さわやかさ」といふ文字そつくりを味へる！と、友達は語つてくれるのである。なるほど、京城に數日間滯在しても、さうしたいい氣持でをられたのは事實であつた。さうした感覺を朝鮮の僻陬に延長したなら、どれほど愉快であらうとも考へた。今日は、さうした思ひが叶つたといへば大げさであるが、北鮮、間島に旅する汽車の窓より、まだ見ぬ山河に接見する日である、京元線以北は私にとりての初旅であるのであつた。

十四日の朝は青々と晴れ渡つた。北漢山一帶の青みが一層濃く近く見えて、私のこころをこよなくはれやかに

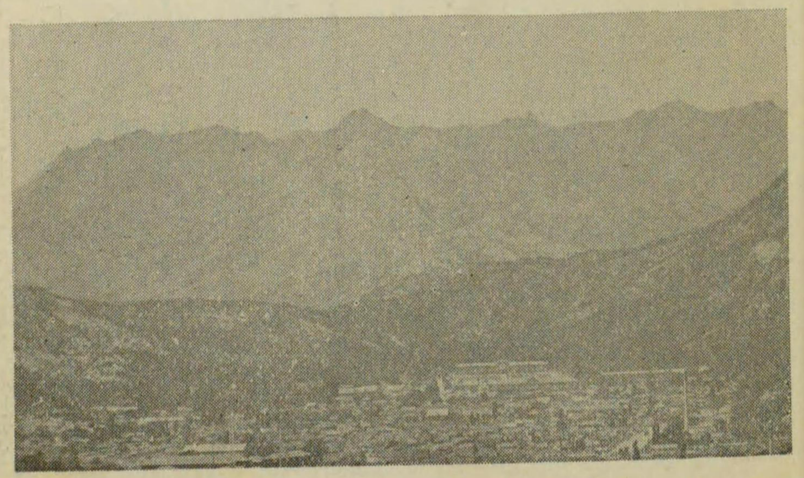
太古の鄙を深けす北漢山一帶



してくれる。私は朝の急行車に乘る前、久しく東京に滯在して昨夜歸鮮したばかりのI君を倭城臺に訪ねたのであつた。そしてかう云ふ騷々しいときであるから間島の總領事館や、警察部にもそれぞれ厄介になることであらうから、その手配などをたのむためであつた。

それから、朝のうちに鐵道局にO君と、T君とをたづねて、北鮮、間島、滿洲の交通についての一とほりの説明をきいて、龍山驛から會寧行きの汽車には乘つたのであつた。

東京を立つとき、夏服はまだ用ゐてゐなかつたので、北へ！ の旅だから袷著で、たくさんだらうと思つてゐたのであつたが、今日はカンカン照りつけるので、とてもたまらない、と思つた。どうも、京城では朝がたと、晩はたいへん涼しかつたが、大陸の氣溫は、内地のそれと



鐵原小景

違つて眞晝は豫測のつかぬ熱氣が出でてくるので、鐵原から夏服をおくるやうに東京へ打電したのであつた。

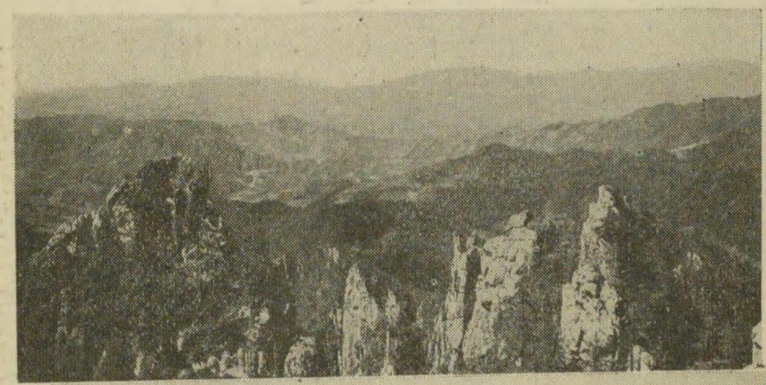
鐵原は金剛山へ行く電鐵の起點である。ここから內金剛へは僅か四時間で行けるのである。

この日、天勝一行とは、龍山から同車したのであつたが、車內はそれがため、ひつくり返るやうな賑かさであつた。足一たび朝鮮の土を踏めば、內地で豫想されぬものが、とても珍重さるることが多い。この日も、彼等の動靜をいとも、ものめづらしさうに、その周圍にまで出かけて行つて、粉香のあとをつけねらつてをるのが、をかしくもあつた。あとで聞けば、その天勝もほんたうの天勝一行でなくして新の字が上につく新天勝一行であつたさうだ。

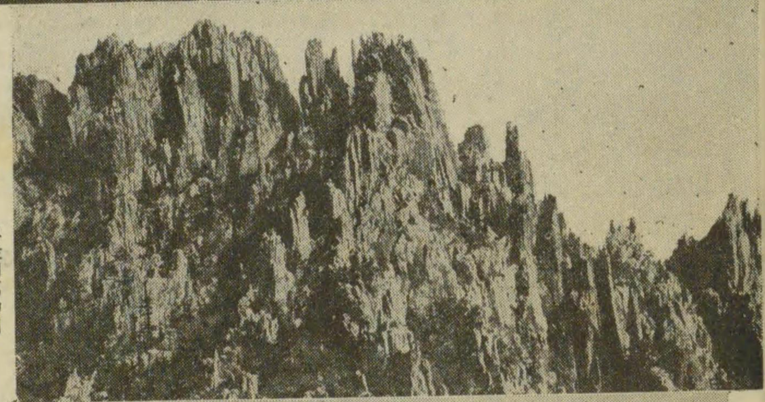
彼等一行も鐵原で降りたのであつた。

私はいままで、いくたびも朝鮮の旅をした。そして自分

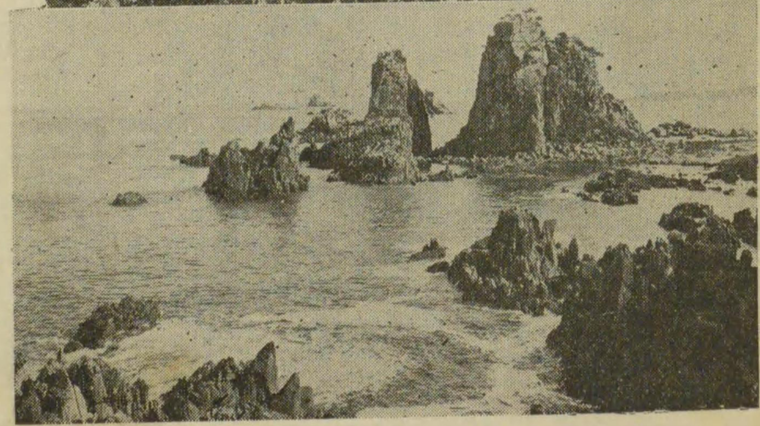
金剛山の大觀



內金剛



外金剛萬物相

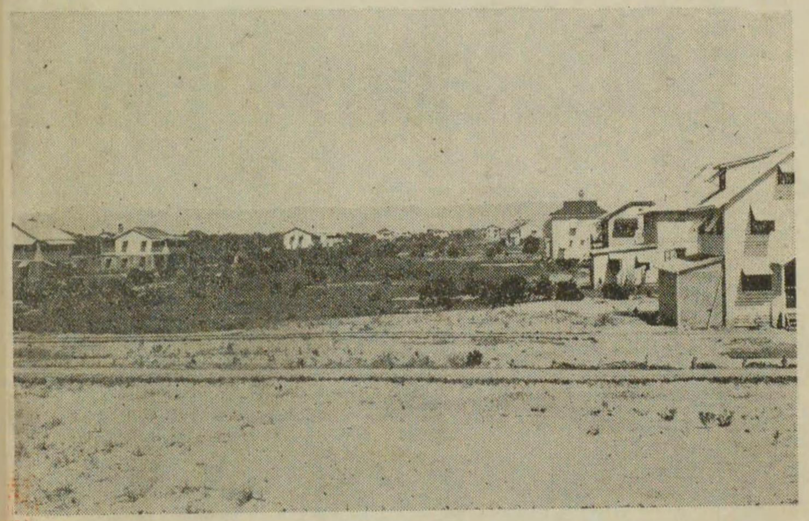


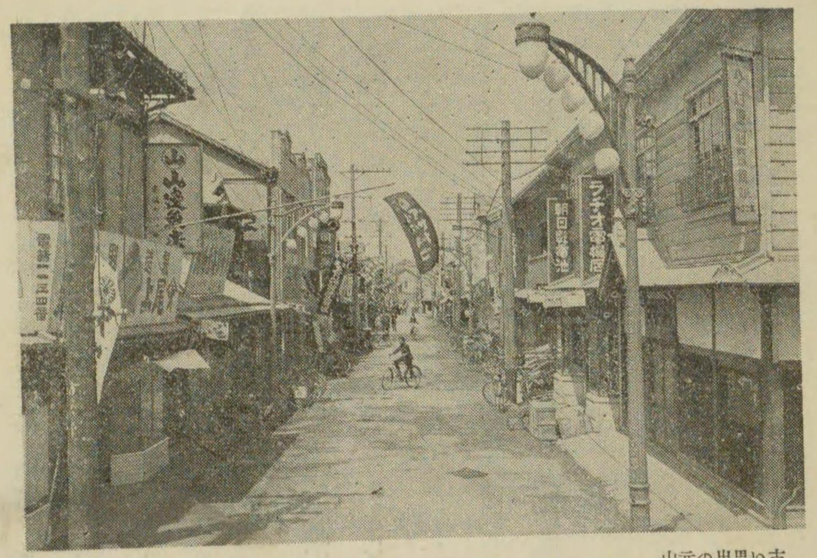
海金剛

が、一ぱん行つて見たい金剛山へはいつでも行けないのである。今日も、發車の汽笛が鳴るまで、列車が出發してからも、窓外に首をつき出して金剛山の方を恨めしく眺めとほしてゐるのであつた。

元山が近くなるころから、さすが晝間の熱氣もいささか衰へて、永興灣から吹きおくる海風が食卓にとてもいい風を送つてくれるのであつた。鮮鐵の幹線は廣軌で內地の列車に比してひろびろとして美はしく、とてもいい氣持がするばかりでなく、ボーイが絶えず熱い手拭をしぼつてくれるので、意外にさつぱりした旅がつづけられたのであつた。朝鮮の鐵道もこのごろではなかなか發展して昭和五年末には一千七百六十餘哩に達し、官私鐵の投資額は五億一千百餘萬圓を出でてをるのであつた。

永興灣の涼味





古い思出の元山

元山には午後四時二十六分ついて、七八分間停車したのであつたが、私はもう元山の街の姿も忘れてしまふほど古い元山訪問者であるのであつた。はや、二昔も前にたつた一回來たばかりであるが、その日は寒い日で、日本海から吹き上げてくる荒つぽい海風が、ずゐぶん私をさみしがらせたことだけを思ひださせるのであつた。

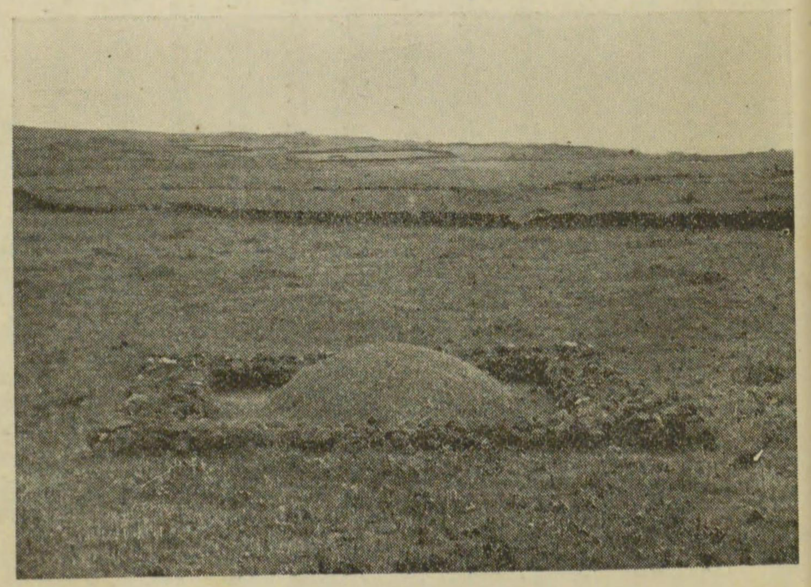
ここまでは二等車のなかも隨分空があつたが、元山からは七、八名ドヤドヤと內地人のお客らしいのが乘り込んできた。何でも、日本海を渡つてきたらしい人々で、その話しぶりから察すれば、北鮮一帶に投資の用務を帶びてきたものと思はれる。とても元氣ものの揃ひで、行儀の惡いことは比ひないぐらゐであつた。さりながら、內地が到

るところ不景氣に喘ぎもだえてをるのに、北鮮一帶が、汽車でも、宿屋でも、料理屋でも滿員札が、かかつてをるのは、なかなかいい氣持がするのであつた。これらの人々によつて、土木事業や、いろいろな事業が活潑になつて行くので、土工の入りこむものが多くなつたさうだ。元山までは同行者がなかつたので、すこしは退屈もおぼえたが、そのかはり朝鮮にたいしていい思索もできたのであつた。

その夜七時五十二分興南驛には宇垣總督が乘込んでをる列車が停まつてをる。たくさんの見送人が堵列してをる。巡査の目玉が、うすぐらいなかからピカピカ光る。

ふるさとの知己Nが興南驛頭に私を出迎へにきてをる。私はNの兄たちとは、とても仲よしであるから下車してゆつくり興南、咸興あたりのくさぐさの話ども、ききたいのであつたが、豫定をくるはすわけにゆかぬので間島からの歸路に立寄ることを約してNと別れたのであつた。

墓の頭饅土



冷くねむる

土饅頭の墓

私の乘つてをる汽車は今しも、朝もやの深く立ちこむる咸鏡線の北端鳳岡から龍坪へと走つてをる。そして汽車の走るごとにそのもやのなかから白い影が一つ二つ見えてくる。その數がだんだんたくさんになつてくる。まだ夜もしかとあけきらぬに、營々として田圃のなかにいそしんでをる彼等！　北鮮の人はよく働く？　さうした意外な感じで寢臺をはなれて窓の外に首を出したのであつた。とても冷つこい曉の風が私のおもてをスー、スーッとなでて行くのであつた。

今から七日前に、釜山から京城までの汽車の上の一日。その沿道の小さなみすぼらしい家々や街々を打眺めたとき、その情景はどうであつた。煙管をくはへながら悠々と汽車のすぎゆくを打まもる老人、濯衣の手をとどめて汽車をながめ入る女人のむれ、街や村の辻々にノラクラしてをる働きざかりの男女、さうした遊閑群が南鮮にいかに多かつたことを思ひ出し、考へ出しつつあるうちに、汽車はいつしか龍坪、朱乙を通過して鏡城についてゐるのであつたが、私はその間において田圃のあそこここに土饅頭が幾十、幾百となく列んでをるのを見とれてをつたのであつた。

永久の沈默群

朝鮮と土饅頭！　決して私にとつて新しい風景ではないが、しかし、彼等が涙のにじむ生への努力、執著をこれほど見せつけられたのは、全く北鮮の旅のおかげであつた。彼等が生のために、生活安定のために母國ではどのくらゐの輪郭で、どうした方法で彼等を救ひつつあるのであらう。

かれ等が民族としてのつかれ、生活にたいしてのつかれと脅威！　さうしたことはわれわれの思つてゐる幾倍、幾十倍のものがあらう。あのやうに物置小屋にひとしい小さな家々で、娯樂なども何一つ惠まれぬ生涯を、こつこつ戰つて行かねばならぬ運命！

かれ等は死んでも姓名、勳業を何等墓に錄しのこさるるでなし、そして特權階級以外のすべての人々は、茫々たる草の中に、一つの土饅頭と消えてしまふのである。「死して竹帛に英名を垂れる」といふ言葉が、傳統が、國民的にどれだけ大き

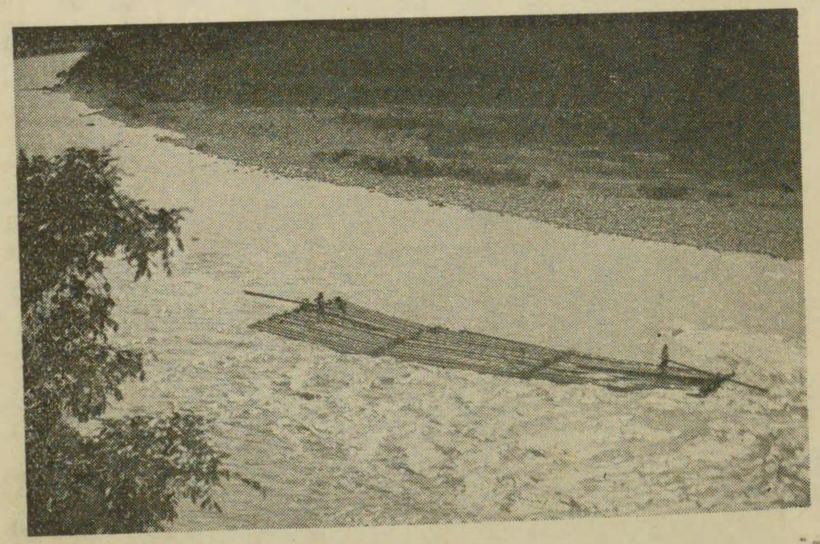
な響きを、大きな力をもつてをるであらうところの我國の人々では想像することさへできぬ徹底したあきらめかたではある。彼等が祖先を思ひ、あこがれる念慮はどういふ狀態のもとに存在してゐるのであらう。自分の親の名前も、自分の生年月も、その他何一つ、文字にて傳へるといふ關心のない民族——さうした民族に對して私はいろいろと考へて見た——

なるほど死んでしまへば、宰相の威望も、將軍の榮譽も、そしてそのあらゆるものが空に歸する。そしてこの草原の、毎日毎日、鳥獸に汚されつつあるところの、彼等の土饅頭のそれと、どこが異るかを考へて見たのである。

人生のいくたの憤怒、かぞへきれぬ悲みのすべてを抱擁してをるところのこの土饅頭、その累々たるなかを汽車は走つてをるのであつた。祖先崇拜の國、資本主義の國、軍國主義の國、人は死して名をのこす——さういふやうないろいろの傳統の前に立つて——果してこのいづれの道を、いかにして自分たちが歩いてをるかを考へて見たのであつた。

近附江們圖

初夏の圖們江

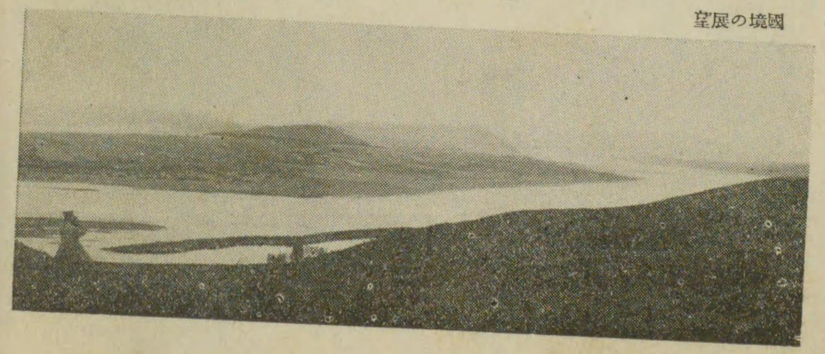


圖們江附近

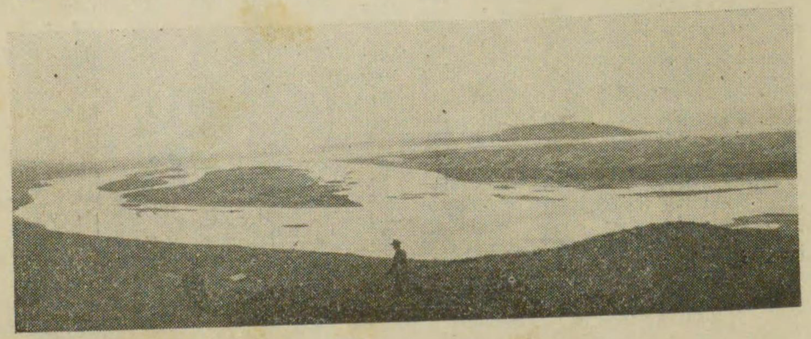
會寧

圖們江！　私はこの國際河にたいして永い間、いろいろの意味での憧憬を有つてをつた。それは單に鮮、滿、蘇三國の國境的氣分を味ふばかりでなく、會寧、兀良哈といふ日本武將に關係のある故地があるばかりでもなかつた。圖們江流域の地が地層的にも、植物的にも、特異の狀景を具へ、且つ鮮、滿兩民族の最も光榮ある聖地白頭山の近くであるといふことが私を引きつけたのである。それに加へて圖們江の流れが麗はしく、沿岸の變化また旅心を樂しませるものが多いとのことで私は一段の興趣をそそられたわけであつた。清津を朝の七時半に發した列車は午前十時に會寧につくことを得たが、汽車の中で朝鮮

國境の展望

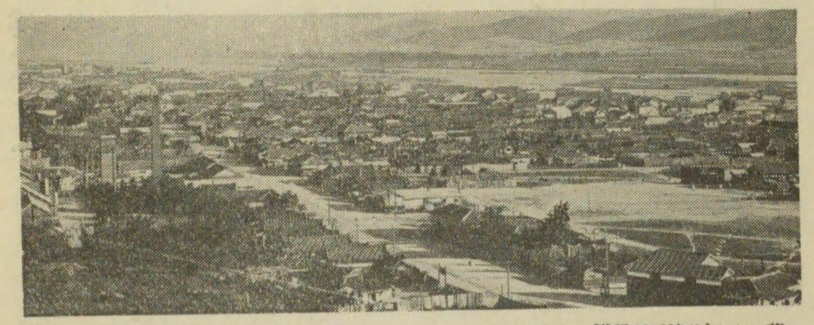


史に詳しいHさんが面白い話をしてくれた。「朝鮮に十數年も居てずゐぶん各地の人情も、風俗も探つて見たが、北鮮の圖們江流域には、まだ原始的なものが多く殘つてゐる。そして內地人でも、朝鮮人でもよく朝鮮美の代表として平壤のみを擧げるが、しかし茂山美人は、內地でいへば秋田、出雲のそれの如く、田を植ゑる野婦の一人一人を見ても、なかなか捨てがたいものが多い。平壤美人は大同江の水で洗はれ、茂山、會寧の美山は圖們江のあの淸らかな水で磨かれるから綺麗だといひます……」そのうちに中島驛についたら、もう戰時氣分が一ぱいである。そして驛の警戒にあたる巡査も間島近くなつて物騷だからといふので全員ピストルをブラ下げて車中をアチコチ氣味の惡いほど見廻しながら歩いてをる。さうした雰圍氣のなかにあつても自然はどこまでも、のどかである。五月十五日といふに驛の構內の山櫻は今を盛りに咲き亂れてをる。私は昨年も、本年も俗事に妨げられて墨陀や、上野の花神にもそむいたのであつたが、かうした思ひもかけぬと



ころで、花見ることができる奇遇に微笑まざるを得なかつた。

なるほど圖們江の流れは綺麗である。その會寧川と相會するところは、前には間島の山々がそそり立ち、その麓には十家一群、二十家一群といつたあんばいに支那家屋が並んでをり、そして滿洲國稅關旗さへ翩翻として茅屋にひるがへつてゐる。私は、會寧驛から道なき砂濱をここまで自動車を乘りつけて、四圍の狀勢を打眺めたり、いろいろの歷史的變化のあとを偲んだりして、顧望去りがたきものがあつた。ところが、國境を守る一警吏は私の態度を迂散臭いとでも思つたのか、ツカツカ寄つて來て、いんぎんではあつたが、何の用があつて此處に來れるかを問ふのであつた。私はあへて彼に不要な配慮をかくべきでないと思つて一葉の名刺を素直に渡したのであつた。彼は喜ばしげに、私の運轉手をいれて三人相寄つて「國境」についてのくさぐさの話をしてきかせるのであつた。水の淺いところをかち渡りしたり、くら闇を利用したりして當局の眼を掠めての諸種の密輸入をする話が、それからそれへと展開する。そしてただこの川一つ隔ててをるだけでいろいろの風俗、生活のかはつてをることや、民族が互に相鬪爭するさまなぞ聞かされて淺ましいかぎりにも思つた。私は安東縣と新義州との鐵橋はもう七度も渡つた。であるから鮮、滿の表玄關のことにはたいして趣味も、關心もなかつたが、裏玄關である會寧—間島間、上三峰—



夢のあと（昔清正が蹂躙した會寧）

間島間といふ新しい地を踏めば、おのづから別な國境的感情、情調の生れてくるのを新たに經驗したのであつた。

圖們江と會寧川の相會するところの砂濱は、珍しく氣持がいい。私はかうしたところに二、三日間滯在して附近の山々や、郊外なぞを歩いて見たい氣にもなつたが、前途を急ぐ旅であるので會寧神社のある丘陵へと自動車を飛ばせたのであつた。

なるほどここからは、會寧の街が一目だ。そして周圍の連山をも手にとるが如く見ることができる。歩兵聯隊や、工兵大隊の營所のあるところ、兀良哈の地點なぞをよく運轉手が指示してくれる。そして會寧が鐘城、穩城、慶源、茂山、慶興等と國境的に重要な役割を遂げた地點であることについての意識が、四圍の狀勢をこの高地から大觀することによりてますますハッキリしてくるのであつた。

會寧の街は、木材で賑うてをる。そして此處から上三峰までは廣軌掛け替へで大賑ひである。街を往來する人馬を見てもたいへんに

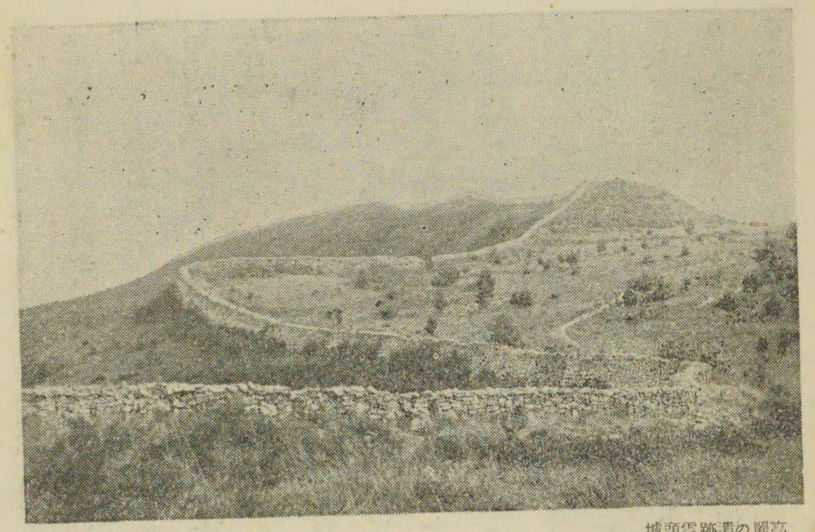
元氣があり、人出も多いのであつた。旅館も、料亭も大入滿員の姿であるさうだ。私が會寧銀座を通つたときも、これが人口一萬四千の都會と思へぬ位の殷賑さを極めてをつたのであつた。

將來の會寧がどうした展開を示すか、私は別にたいした期待をかける譯ではないが、會寧炭礦、咸北炭礦が、もしくは、圖們江一帶の炭層が噂のとほりの採掘量を出す曉にもなつたならば、工業都市としての躍進を見せることであらう。その上、圖們江一百三十里の流れの重要な地位にあるのであるから、木材業のみにても相當の進出を見せることであらう。

私は最後に、高麗時代の築城にかかる周圍十六粁にあまる雲頭城も詳細に視察する筈であつたが、時間が許さなかつたので他日に割愛したことは殘念至極であつた。

圖們鐵道

もう上三峰へ出る汽車の時間が十分しかないぞ——と、私は會寧公園で運轉手に時計を出して見せると、彼は、薄ら笑ひをしながら「ここの汽車には歩いて行つても追つつきますよ。自動車ならすこしくらゐおくれても大丈夫ですよ」と、云ふではないか。私はそのたよりない汽車に乘つて間島へ行かねばならぬのだ。この熱い日に、歩いても追つつく汽車に乘らねばならぬ退屈さを考へつつ公園の高臺から會寧驛へと自動車を飛ばしたのであつた。



高麗の遺跡雲頭城

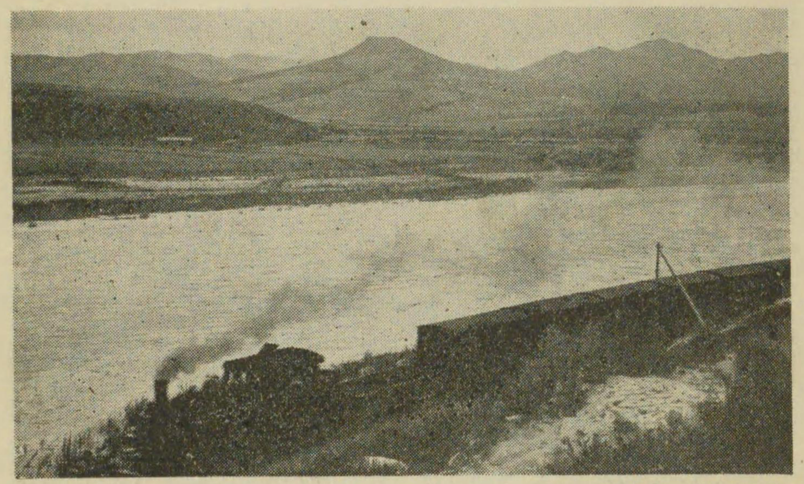
會寧驛——上三峰驛までの窮窟な小型の汽車——汽車とは云ふものの、三等車と二等の小さなのが一つづつついてをるに過ぎぬのである。從つて內地であつたら、極く田舍の輕便列車に塔じたくらゐの氣持でをればよいやうなものの、今日まで內地の急行車に比して勝るとも劣らない朝鮮の汽車のみに乘つたものに對してそこに云はれぬ窮窟さを覺えたのも無理もないことではある。

私の乘つた列車の同乘者はきはめてわづかだ。T參謀と會寧小學校教員夫妻と、その父君、そして素

朴な一人の日本商人とであつた。教員子と、その商人とは別懇の間柄と見えていろいろ琿春や局子街あたりの兵匪や、共匪の模様や、個々の消息まで語り合つてをるのであつた。

何でも教員子の父君は、自分の倅の嫁さんをつれてはるばる土佐から會寧くんだりまで來たものらしく、花嫁らしい――女の人も、都會人でないらしい粗朴の容姿ではあつた。その父君たる人は、土佐丸出しの言葉であつたが、どこかに齒切れのいい有志家氣質を持つてゐて、政事の狀勢等を話すことの好きなやうに見受けられた。あとで、私が「改造」の主幹であると云ふことを知つた教員子は、「私も改造はお馴染みである」とていろいろ打解けてこの地方の特殊な社會事情や思想的轉向などを話してくれるのであつた。

彼商人子は、T參謀とも懇意のなかであると見えて、「いや、いろいろなものを仕入れて歸聞するところです、實は清津に荷物が昨日つきましたので受取つて百草溝まで歸ります」と云つて、自分が持つてをるいろいろの商品の說明をしたりなどしてをつた。ところが、隨分變な品ものまで仕入れてあるので、T氏からさんざん冷かされてをるやうでもあつた。私は、その品ものが、どう云ふ性質のものであるかは知らなかつたが、何でも性に關するものであることだけは、ほぼ想像がついたのであつた。



圖們江を隔てて間島富士を望む

だが、さうした品物が、稅關で御厄介になる刹那のことを私はおもひだしたのである。强ち、文化、文明の恥辱！とか、さうした野暮なことはヌキにして、かうしたものは、大抵は稅關の目をくぐつて、あるひは稅關と妥協でもして國境を脫出するものであらうか。

×

思ひがけない不思議な想像の連續に、退屈を豫想された圖們鐵道の三時間は、いつのまにか經過してもう既に上三峰驛についてゐたのであつたが、會寧を離れてわづか十分くらゐ經つと、對岸に間島富士が見える。山頂まで六、七百尺しかないのであるが、山貌が端麗であるので我國人から非常の愛著をもたれてゐるのである。圖們鐵道が開通せぬ前は、江を渡つて此の山の麓をめぐり、清正で名高い兀良哈領を越えて龍井

村や局子街に赴いたものであるさうだが、今は山頂まで鍬の入らぬところはないまで耕作が行きとどいてをる。對岸がさう云ふやうにひろびろと展けてをるにかかはらず、鐵路の走つてをる我が朝鮮側の岸は、山形ますます迫つて、殆んど軌道が辛うじて布設せらるる餘地だけあるといつた狀態である。だが、江水は清く澄んで一浴したい欲望さへ湧いてくるのであつた。鮮童は五月の半ばであるのに、もう三々五々氣持よささうに水中にはひつてをるのが見受けられた。

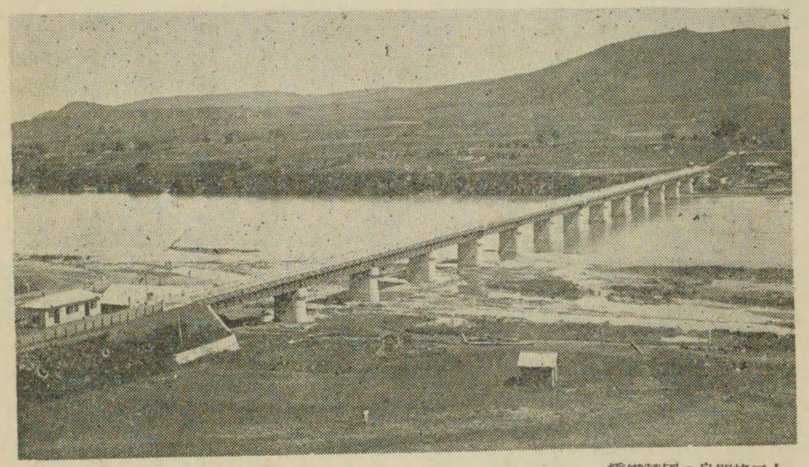
國際鐵橋

上三峰はいつまでも小さい新義州として存在するであらうか。新義州と地位が轉倒する時節がくるのではあるまいか。

吉會線開通の曉、圖們江國際鐵橋をめぐつて上三峰や對岸の江岸站がもたらすであらうところの役割を今から想像するのも面白いことではある。さりながら、もしも吉會の幹線が穩城に出づるが如きことがあつたら、此町は致命的痛手を負ふであらう。

我國の最前衞の役割を遂げつつある一つの小さいこの町。今では人口二千を數ふるのみであるが、しかしこの町は、昭和二年九月に國際鐵橋が架設されてから五年に滿たない短日月で、これだけの町形をなしたもので、その長足の進歩は驚嘆に値するものがある。殊に大豆の出盛りの時には當驛を通過する數量は十萬噸を超過し、漸次增加して行くのであるから人口は日に日に異常の增加を見つつあるのである。

私は過ぐる日、この國際鐵橋を去來して、その三町に垂んとする橋梁の美觀に驚くより、上三峰驛より江岸站に入つたとき青い服、黃色い服、黑い服、赤い帽、黃色い帽などまるでチンドン屋宜しくの色どりで車室に入りこんで來たのに面喰つたのであつた。青い服を一著したのが郵便局の役人で、黃色い軍服をまとうたのが憲兵である。黑いボロボロの服に、大きな穴のあいた帽子をかぶれるが月俸七圓の巡査、日本の海軍服みたやうな上等のスタ



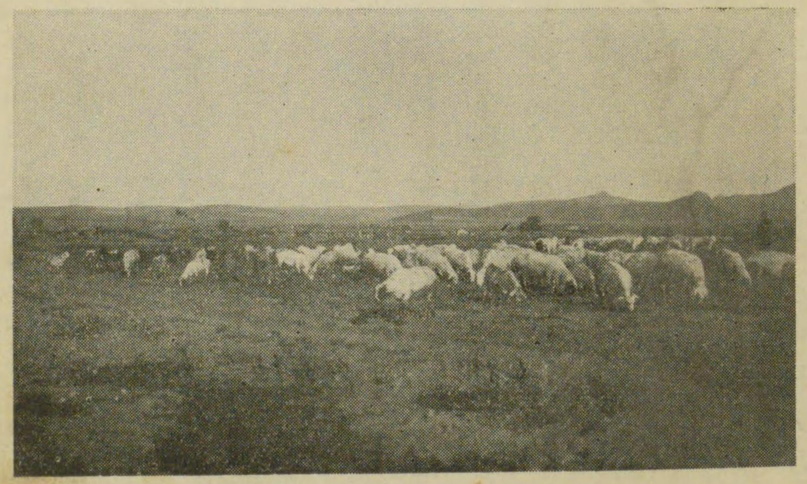
上三峰間島の國際鐵橋

イルが稅關吏である。そのうちの憲兵がとても年が若い、何でも十六、七であるさうである。

私は、私を龍井街の警察部からわざわざ護衛のために來てくれたところの巡査に、どうしてあ云ふ年齡の若い、そして一喝すれば吹ッ飛んでしまひさうなものを憲兵に選ぶのであらうかを尋ねたところが、「憲兵の服は美麗であるから、金持の子供が賄賂を贈つて仕官するのです、執行力も、學問もないのであるが、女にもてたいために憲兵になるのですよ」と聞いたときには、さすがにあきれかへつたのであつた。

そのうちに稅關の檢査がはじまる。私どもはその間、七、八の日本人たちと、一車を占領して麥酒を一杯やりはじめた。そのときの話に、「天圖鐵道の役人や車掌たちは、もう二年も給料をもらはないのだ。しかし、それ等の人々はストライキをやるでなし、重役攻擊に出づるでなし、默々として就職してをる、誰一人として會社を退くものもなければ、食つて行けぬものもないのが不思議である。支那くらゐ役人に役德のあるところは世界中でないであらう。そしてそれ等の役人や車掌たちは、必ず一度は何年分かをまとめてもらへるものと固く信じ切つてゐる」何と氣持のいい話ではないか。

島間

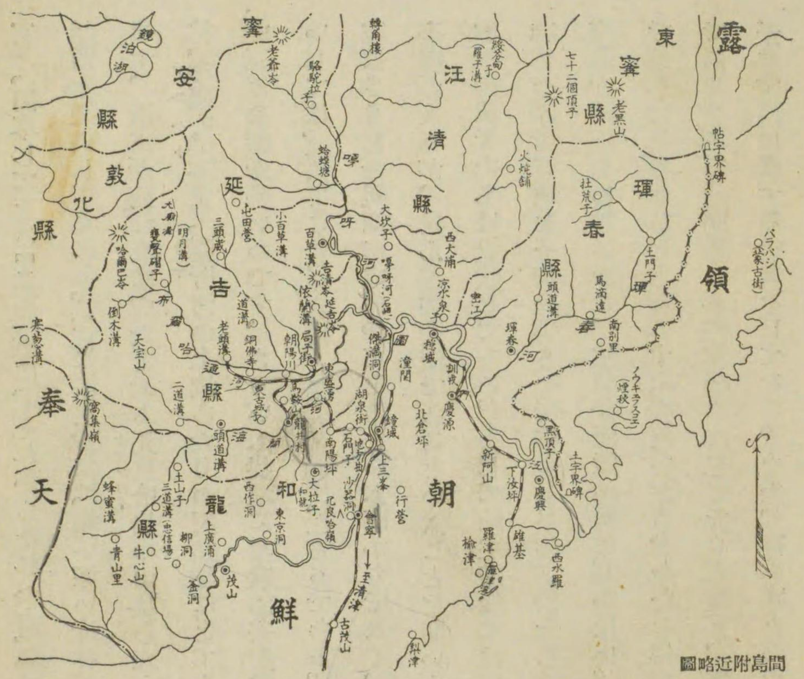


島間平野

間島

「間島は危いから、行くのはよせよ」と注意をしてくれる人々も多かつた。實際、そのときは共産黨、反政府軍、反日軍が合流して龍井や局子街さへ、あぶない時期であつたのだ。しかし間島へ來て「ああ來てよかつた」と、かう私は思つた。

間島は全く想像することの出來ない風景だ。あり合はせの風景でない。油繪が描けるならと思つた。全く油畫にふさはしい風景だ。そして「間島」といふよりは「間丘」といつた方が寧ろ感じが出て來ないかとも思つた。——上三峰から龍井まで——鐵道の沿線から見渡すかぎりは耕地ばかりのやうだ。赭黑や、赭黃の坊主山の連續だ。國境から龍井街につくまでうねりくねり、うねりくねりして、山々の間をグルリグルリ廻つてばかり行く。私はかうも思つた。全くここは支那の領土でも、朝鮮の地域でもないぢやないか。朝鮮の氣分が出でてくるでなし、支那の氣持も出て來ない。我が四國大の丘々を天から投げつけたやうなところだ。平地が乏しく、丘を越ゆれば丘があり、谷を渉ればまた谷がつづく。谷には清水が乏しく、濁つた水だ。無風流だ、殺風景だ。

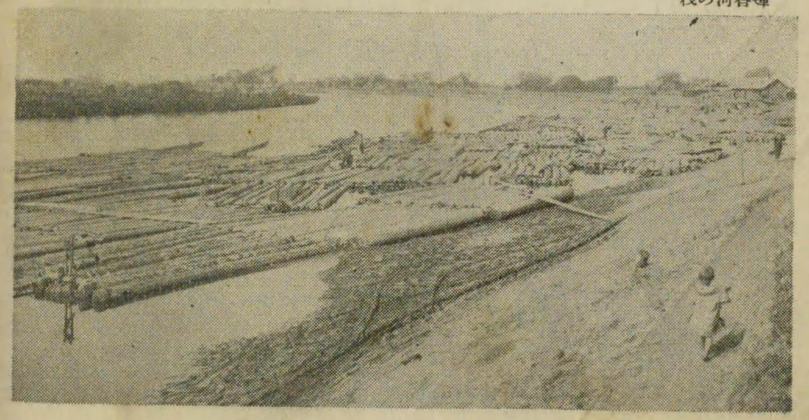


間島附近略圖

かうしたところで、一生を暮らさなくてはならない退屈さは想像ができぬ。私は深い谿が何だか戀しくなつた。鬱々とした老木を見たくなつた。間島の丘々は五月の紺青の空みたやうに殆んど一色に塗りつぶされて、この世界は、さながら空と陸との二色あるばかりにも見えた。まれにポプラの綠が、あそこここにあるけれど、それは本當に大きな坊主頭に髮の毛が一つ二つ數へられるくらゐにしか思へない。

かうしたところに共產黨が根城を生やしてをるのに、どうしようとするのか。丁度、私を迎へに來てくれた武裝した警

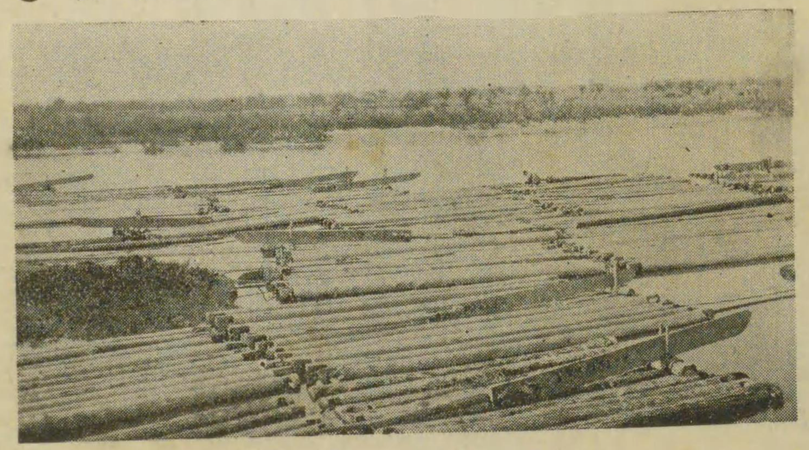
官と、同車してをるT參謀等は、それからそれへと、興味ある話題を提供してくれる。「この川上には、深い深い森林があります、清正が荒れまはつたと云ふ兀良哈(オランカイ)嶺の山奥あたりの森林、布爾哈通(フルハト)河や、嘎呀(カヤ)河の上流あたりの原始林はとても美しい巨きな樹が多いのです、さういふ奥地に巣喰ふ共産黨にたいしては、今のところ手の下しやうもない」さうである。共産黨はさうした奥地に立籠つてをるといふばかりでなく、間島全體の人々が、殆んど共産派であるといふことを聞いた。彼等の指導者たちは武裝してゐる。そして地主階級には短銃で嚇しつけ所有地を一切提供させ所持金を强制寄捨せしめる。交通が開けてゐないから、電報が邊陬の地に利かない。そこでどこにその救ひを求むるすべもないから、やむを得ぬことであるさうだ。間島の各停車場にはどこでも軍隊と、警察とが非常時に處する武裝をしてをる。また、驛と驛との中間の



渾春河の筏

部落には、日章旗が地主の家らしい茅屋に飜つて、五人六人の兵隊が線路の警戒をしてをる。

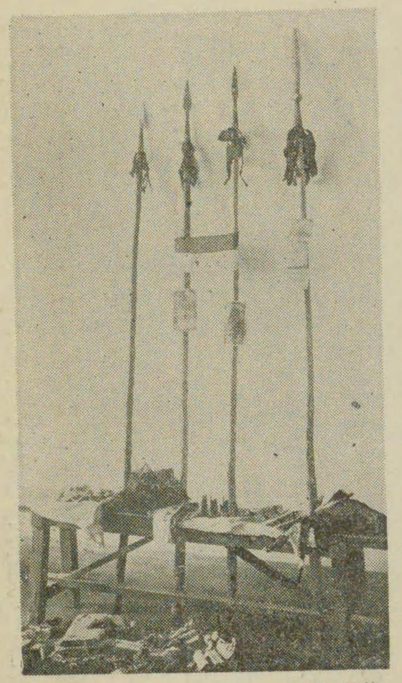
列車が南陽坪へ着く約三十分程てまへのところで、地下足袋をはき、短銃片手の五六人の警官の二隊が乘り込む。その人たちは、共産黨狩りにいつての歸るさであると護衛のI君が耳打ちしてくれる。私はいろいろと四方山の話をしてをるうちに、この人々の任務がいかに地味であり、そして積極的に毎日々々危險の地域に入りながら、さうした苦心が世に謳はるるでもなく、全く緣の下の力持ちの感があることがいかにも同情される。それは軍隊などのやうな大部隊を以て花々しい合戰に參加すれば、青史にものこる、高級の勳章ももらへる、人々の間にも膾炙しておのづから慰めやうもあるものを、默々としてかうした沙漠のやうな丘々で、それもいつからいつまでと際限のない、あぶない仕事に從ふの痛苦をいと



ほしく思ふのである。私は、それ等の人々をいろいろ犒つてビールを一、二杯すすめたりなぞした。そこで間島の共産黨はどこで、どう云ふやうな組織をもつて日常の闘爭をしてをるのか。そして非常時にいかに對應しつつあるのか。

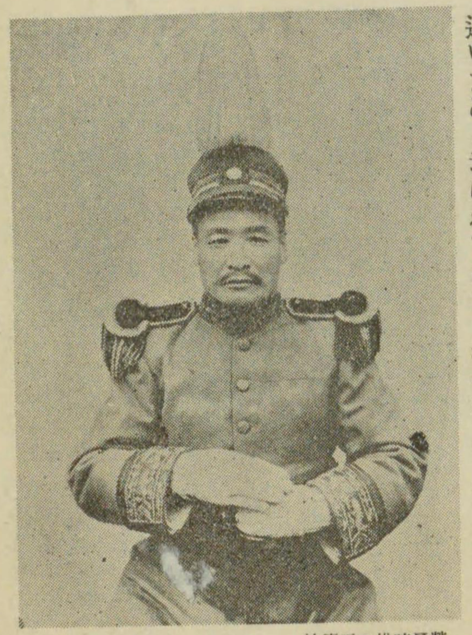
この全間島は和龍、延吉、汪清の三縣で、それにこのごろ大抵の人は琿春縣まで加へて通常、間島と呼びなしてをる。琿春まで含む間島の共産黨は、滿洲事件前までは中國共産黨の指令を受けてゐた。いまその組織として第一、中國共産黨の隷下に滿洲の委員會がある。その下に南滿、東滿、北滿の三委員會が隷屬し、間島一帶は東滿委員會の支配下にあつた。東滿委員會の隷屬下に和龍、琿春、延吉、汪清、敦化等の縣委員會があり、縣委員會の下に區の委員會といふものが十づつ位ある。區委員會の下に支部、細胞といふ順序でなかなか整然と統制づけられてをる。ところが、同じ共産黨の陣營のなかでも、純朝鮮派もあれば、親中國派もある。さりながら、親中派といふものは、滿洲事件以來俄に勢力を失墜し、純朝鮮派の勢力が强化擴大されて來た。そして民族派と、共産派が合流してきたのである。間島内に策動してをるものは、東支沿線の山市站に本部を置く漢族委員會がその中軸で、吉林以北における指令權を把握してをる狀態である。そこで間島では朝鮮共産黨といふ名目ではもう滅んだ形で、中國共産黨の直指令を受けてはをるが、

その實際權力の主體は間島在住の鮮人にあるのである。また、問題によつてハバロフスクの第三インターナショナルの東洋宣傳部の指令を受けることもありといはれてをる。だが、滿洲事件以來、日本帝國主義を打倒するには、どうしても、反吉林軍、大刀會、紅槍會等の總結成を必要とするといふので、現在では、いくたの兵匪と民族的に結合してをる。即ち「反日兵士擁護同盟」の旗風のもとに立つてをるのである。そこで一寸、この紅槍會とか、大刀會とかを説明する必要があるが、大刀會は奉天省興京縣から起つたもので、これは一般に兵匪、馬賊等とはその類を異にし、先づ自警團の一種で、初めは馬賊、兵匪に對立する農村良民の團體であつて、財産の安固、村落の擁護がその主たる使命であつたが、だんだん、それが勢力を持つてくると、それを利用せんとするものが出來、現在では紅槍會、大刀會も内部的にも不純な分子が多くなつて來た。この團體の首長は宗教的專制の老師があつて、それが卜占によつていろいろの

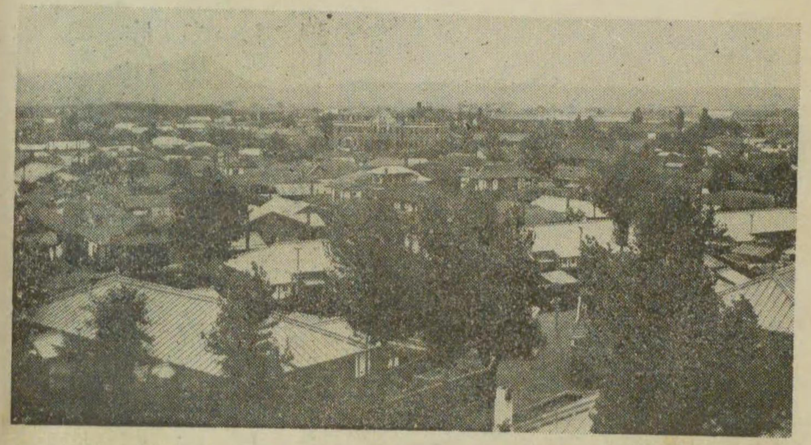

彼等の武器

ことを決定して行く。彼等は卜占によつて生門、死門を決し、そして符書(朱書)を燒いて喰つたり、または、それを懷中に入れて彈丸除けに使つたりしてをる。この迷信に對する信仰が強いので、意外に勇敢な働きを見せることもある。この大刀會、紅槍會は現在において共產軍と合流してをるのである。そして王德林一派の救國軍とも、共同戰線を張つてをる。彼等の勢力は敦化から間島、安圖縣あたりに進出し、間島界隈から敦化附近までは救國軍と、王德林の人氣が可なりあつて、そしてこれ等の地方に五人の王德林があるといふ面白い話さへある。彼は目に一丁字なく馬占山、張作霖なみに綠林中の俊で山東泝州の產である。しかし彼が馬賊になつたのは張や馬のそれと大に事情の異るものがある。それはかうだ。彼の親爺が不圖したことから露西亞人に殺された。それ以來、彼は東支沿線で露人目標にとてもあばれたものだ。東支露西亞側では大困りで吉林省長に多額の金を送つて彼の始末をたのんだので、省長は金だけはタンマリもらつて彼を殺してしまふことはしなかつた。かへつて營長に拔擢して依蘭に迎へたのであつた。彼はそれまでは王林といつたが軍人になつてから王德林と名乘ることにしたのであつた。それで戰ひもそれ相當の働きができるが、彼はいつでも「俺は始めから物取りや强盜になるの意思はすこしもなかつた、のだと誇らはしげに語るのであつた。それから、反對者をむごたらしい目に逢はさない、綠

林的俠氣があつて、一たん膝を乘り出して賴んだら、それをことわれぬところがある。彼はこのごろまでは現在の吉林警備司令吉興中將のもとに甕聲礌子(ウンスラーズ)で營長(我が大隊長)をしてをつたが、昨年十二月七日、敦圖鐵道事件に部下の兵士が、日本の測量隊を射擊して二名を殺した。そのうち反吉林軍討伐のために哈爾濱附近に出征を滿洲國政府から命ぜられたが、彼はその命を奉ぜずして東支線、中東線で反吉林軍として活躍することになつた。だが反亂の一ばんの原因は昇進が遲いためと云はれてゐた。彼の率ゐる救國軍は可なりの兵力を擁するが、何でも亂世では、實力本位で、骨節の强いものか、度胸のあるものか、智慧のめぐつたものかがすぐに頭角を表はしてくる。彼も、時がつくつた小風雲兒であるが、もう年頃も六十歲であるから、先々の運命もさう開かれさうにない。そのうへ、我軍が組織的にジリジリつめよることによつて、いづれは來ん秋までの蟲の命であらうなぞといふ人もあつたが、そ



營長時代の王德林

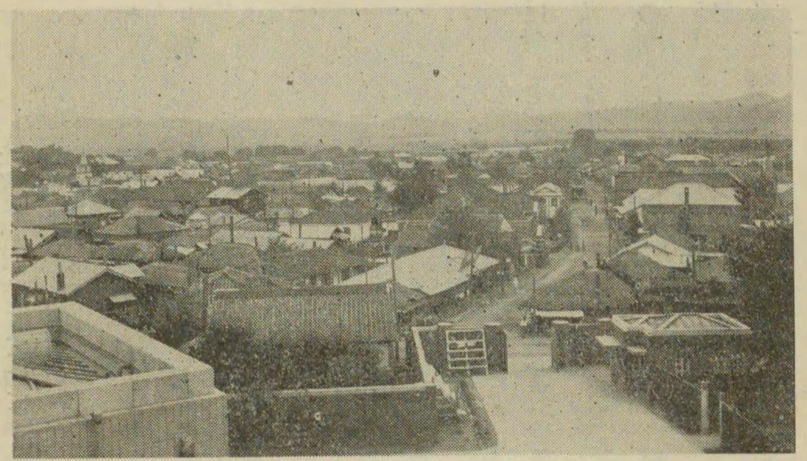


間島の中心龍井街

の參謀長の孔憲榮は排日にかけては實に思ひ切つたるいたづらものであり、先鋒司令の吳成義もしつこく敦化方面に活躍してをるさうだ。

×

また、國境を越えてソビエット領である浦鹽―ニコリスク間は、この事件前までは、支那人の勢力はなかなかであつたが、それ以來といふものは三十萬の人口から十七萬に減少した。ところが、反對に朝鮮人の勢力が支那人を驅逐して約五十萬になつた。その裏面の消息、呼吸は皆目我が識者の間に分明してをらぬ。そしてこの五十萬の朝鮮人の研究をすることが、むしろ間島にある朝鮮人の研究より大事ではなからうか。それは富の程度においてもウスリー鮮人の方が裕福であり、かたがた間島共產黨の兵站部の役割は大かた彼等によつて遂げられてをると、また、ウスリー、ニ



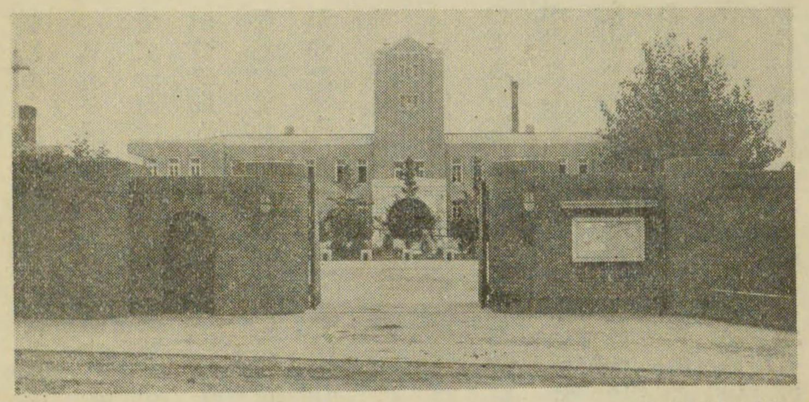
コリスク方面の朝鮮の人々は、東斌學校を建ててをるが、それで思ひ切つた民族的、思想的の教育を施し、その秀才を上海、天津、北平のソビエット色の濃厚な學校に送り、その卒業したものが、間島や、ニコリスク附近の共產黨の指導幹部になつてをるやうなありさまであるさうだ。

×

私が龍井街間島旅館についたのは、午後七時すぎであつたが、大地はまだ、殘照で暗くはなかつた。間島旅館はこの地では一流であるらしいが、それでも設備なぞはせいぜい神田あたりの下宿屋なみであつた。その夜は軍部や、滿鐵社員その他の人々で芋を洗ふやうな賑かさで、一部屋に四人、五人も重なり合つて泊つて居つた。私は幸に、領事館に電報で賴んでおいたから一部屋貰へた。そしてお風呂をすませて、二、三人で夕飯をしたためてゐるとき、間島輸出

穀物組合長林道三君が訪ねてきてくれた。この人は大正七年私が浦鹽にぶらついてをるときからの知人で、久かたぶりのなつかしい面會だ。いろいろ間島の事情をきいてをるうちに、林君は突如「あなたは犬養總理のやられたことを御存じですか、只今ラヂオの放送でききましたが」とのことで、私はおどろいてしまつた。そして少壯軍人の一團が制服のまま總理官邸で大びらに正面からやつたといふ以外、何等の情報もわからない。私は、すぐさま東京へ引き返さうと思ひ三、四の電報を、東京と京城とに打たせた。そして領事館にはモット詳しいことが分つてをるだらうと思ひ、林君から電話で問合せてもらつたら、總領事は誰やらの宴會に行つて不在、犬養さんの兇變についての報道はまだ到著してゐないとのことであつた。そのうち、領事館の人々も、軍部の人も私のところに見えたのであつたが、それ以上のことは何にも分らないのであつた。四、五の人々は私に對してこのごろの政局の動きや、軍部の軋轢やについて一わたりの問ひを發するのであつたが、私はさうしたことよりは、どうしてこのごろは、かうも直接行動が多くなつたらう、僅か一、二年のうちに、濱口氏でも、井上でもあの通りの最期であつたし、そして濱口氏が打たれたとき、井上氏がやられたとき、原氏が刺されたときの瞬間にくらべて、今回は何と云ふ殘酷な最期だらう！

私は、勝手知つたる總理官邸の部屋のありさまとか、そして短銃を擬してをる軍人達のまなざし



間島日本總領事館

と、犬養氏の最期のまなざしが、すごく睨み合つてをる刹那等々をつぎつぎに想像するのだつた。そしてそのとき、誰かが、草木の萠え出づる季節はとても人心が險惡になる、それで革命なぞも歐羅巴では二月から五月までに多いと云つて政治家の最も警戒を要するシーズンである云々の話も生れて、私の座敷は案外しんみりとなつた。それからしばらく經つて、夜十時過ぎになると、京城から、東京から私に對して犬養氏がやられた可なりくはしい電報が頻々とやつて來たから、林君を促して岡田總領事を訪問した。ところが、夜半十二時に至つてもまだ、總領事館に公電がきてゐないとのことで、東京政局や、間島のくさぐさの話なぞ葡萄酒を飲みながら思はず長談して歸るときは十二時半にもなつてゐたので、岡田君は此の眞夜中に町を歩くのは非常に危險だから、自分の自動車を出すから待つてくれとのことであつたが、間島旅館と總

領事館とは、目と鼻の間にあるからと强ひて辭退したのであつた。その夜、月はおぼろで人つこ一人さへ通らぬ。我々の咳する聲のみが寂寞を破るものすごさである。ところが、總領事館を出でて一町ほど來た暗い露路から銃劍をひらめかした二人の支那兵士が我等を一睨みする。ここで一つやられるれば、それでおしまひだがナと小さな苦笑をもらしつつ急ぐ行手の前面、小學校の門の前にまた三人の武裝した支那兵士が立つてをる。陰曆十日の月は雲に蔽はれてあたりはうす暗かつた。そしてさう云ふ事件のあつた夜であるので、ふしぎに不氣味な感じがつのつてきたのである。

私は今回の旅行中、間島の視察はその日數と、努力において最も犧牲を拂ふつもりで出掛けたのであつたが、犬養氏不時の變によつて、どうしても間島にゐては、通信不便のため東京の狀態が、なかなか分りさうにないから、不本意ではあつたが、その視察を端折ることにした。しかしながら、龍井街は間島問題について日本政治の中心であるし、局子街は支那の軍事上の中心であるから、少くとも此の二つの地點だけについては比較的正確なる認識を得てかへりたいと思つたからその翌日は間島の監獄を第一に視察した。

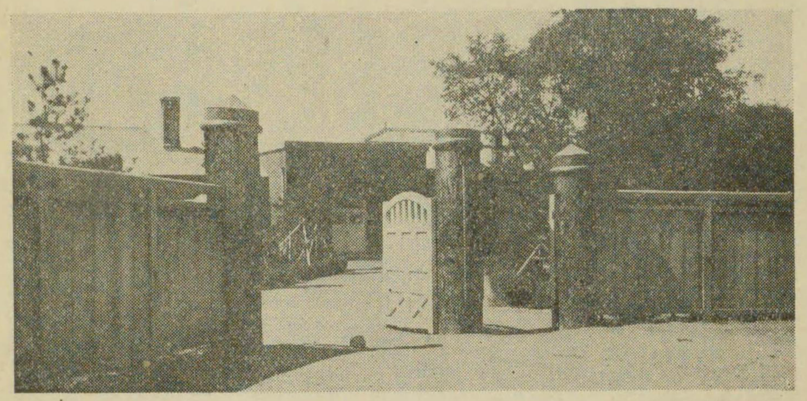
この監獄は思想監獄といつてもよい特殊的のものである。卽ち、全間島のいはゆる思想犯のも

のが十中九まで入監してをる。間島共產黨の內容については、警察部長や、あまたの警部その他の日、支、鮮人から詳しく聞いてをつた。今、これ等の受刑者であらう人々を眼の前において、いろいろと我國の前途に考へねばならぬ統治上の問題を頭に描いて見た。また、その反對の出發點を有つこれ等民族的、思想的立場に居る人々の側からも、一應は解決點を思考して見たのである。その二つの立場から生れてくる私の成案については、また、他日發表する機會もあらうと思ふ。だが、間島の共產黨の實勢力は、東京や、京城で聞いたのと想像を異にし、その規模が大きく、殆んど間島に在住する朝鮮民族四十萬人が全部黨員であるといふことは間違ひのない事實であるさうだ。

監獄の設備については、內地のそれの如く完全ではない。從つて建物から受くる壓迫的の氣分はやや薄いやうではあつたが、しかし一房に五人、六人づつ入れられてをるその息づかひには特殊の民族的臭味の漂ふは免れぬこととして、その人相、風貌も政治犯らしく、智的犯人らしく、それにふさはしい鋭き眼の持主が多かつたが、監獄の規律に對しては監督者としての配慮は案外にかからぬらしく、彼等は概して年少ではあるが、小兒病的な警官との爭鬪なぞは回避してをるやうな傾向が見える。然しその主張になると案外に强硬に把持するものが多いらしく、私を案內

してくれた一警部の話では「彼等は監獄に居ることを寸毫も恐れてゐない。少しも恥ぢてゐないやうである。そして再犯のものは初犯より、三犯の人は再犯者より獄中においても、村落においても幅が利けるさうである。この監獄は思想的犯人のみでも千名を超過するくらゐ、前後數年に亙りて收容したが、領袖から末輩に至るまでなかなか白狀しない。それに民族的にいろいろの立場がからみついてくるので困難はいよいよ加はつてくる。そして全部の人々が生命の問題を眼中に置かないから始末が悪く、此點、日本内地から想像さるると大變な異ひであらう。時々は、有産階級の人々がここへ引かれてくる、それ等のもの達は、彼等がああ云ふから我等も詮方なくその主張に引き入れられて財産を提供したにすぎぬ、と述べるが例であるさうだ。そして財産を彼等に提供して後悔するものと、觀念的にあきらめるものと、早く始末して逃げ出すものなぞとりどりあるが、それより刹那の脅迫から詮方なく入黨したものが多い」とのことであつた。

丁度、私が監獄を見た時、そこにつながれて居る人々は、約二百名内外あつたが、この間島の監獄は、長く受刑されるための監獄でなくして、我内地で云へば、警察署の留置場と監獄との合の子みたやうな中繼的の性質を帶びたもので、刑期の長いものは片つ端から京城の監獄に送られて行くやうになつてをる。



龍井日本人小學校

×

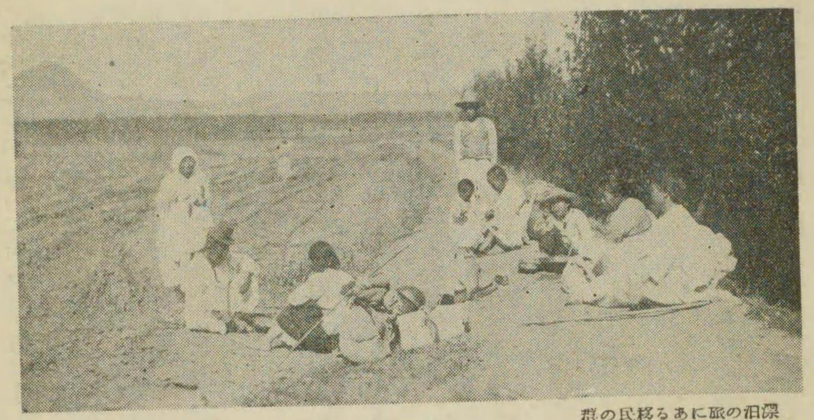
それから朝鮮人教育のことについてすこし語つて見たい。

我が統監府が初めて間島朝鮮人保護のため、齋藤季治郎大佐を派遣したときは非常なショックを支那政界に與へた。否、奉天軍閥への刺戟は甚大なものであつた。吳祿貞將軍がそのため、わざわざ局子街に駐屯するやうにもなつた。そのときの朝鮮人は暗夜に燈光を認めたやうにホッとしたのである。然るにそのかみの感激は時と共に薄れ行きて、間島は安奉線改築問題その他二、三の問題と政治的に交換を遂げられて、支那領土として確保さるるに至つた。今までは鮮、支人爭鬪の巷であつた間島は日韓合併と共に舞臺が一轉して、排日の根據地となつてしまつた。一面支那人側からは强烈な壓迫を受けるし、鮮人の氣持は頗るデリケートな動きを示すやうになつた。間島鮮人の我國に對する民族的陰謀は初めキリスト教

と結び、天道教と結びつつ深化してをつたが、今やソビエットが反宗教的である立場上、その協同者、策源地は一變して學校が背景をなすに至つたのである。

現に龍井街の大成中學の如き、長い間、間島共産黨を指導して居る如く見られてをる。また、昭和二年の第一次間島共産黨事件、昭和三年の第二次間島共産黨事件、第三次の昭和四年の共産黨事件においても、大成中學がその中樞勢力であつたことは否めないさうだ。それからこれも龍井にある東興中學は、天道教徒の設立したものであるが、これも浦鹽、ニコリスクあたりの共産黨と相響應して、周密なる委員制のもとに地下運動をやつて居ると誰かが話をしてゐたが、私はその正否を斷定しようとは思はぬが、しかし中等學生に對し民族的教育をやつてをることについて、朝鮮統治に關心するものは多大の考慮を拂ふべきであらう。

小作農鮮人の生活

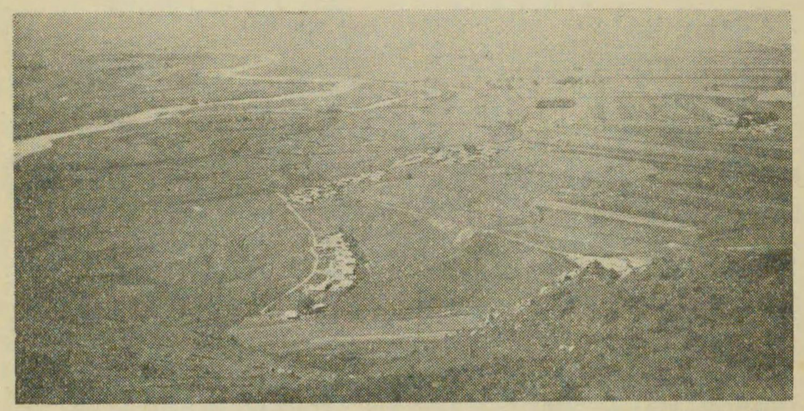


漂泊の旅にあるる移民の群

それから間島及び琿春に散在する四十萬の鮮農の地位について一言したい。彼等は朝鮮の農村における落伍者である。一日は一日と潮の如く押寄せてくる産業資本主義の荒波に太刀打ができず、納税に行き詰り、生活に行き詰つて故國を逐はれるが如く一臺の牛車に妻子眷族や、砧、杵、鍬、犂と共々乘つてジプシーの如く間島へ！　敦化へ！　と國境を越えて漂泊の旅に上るのである。その氣持、その哀調は一片の詩を以て歌はるるにはあまりに悲慘の連續である。彼等が圖們江を渡るとき、果してどれだけの準備があるだらうか。大抵のものは自分の身のまはりを、すべて金にかへて五六十圓を得、それが卽ち、彼地にての一切の生活基礎をなすのである。だが、また、一面から考へて見れば、朝鮮から間島への移住者の七割一分まで、卽ち四十萬の人口中二十八、九萬人までは咸鏡北道の人々である。咸北よりは、間島が地味が肥沃で、

生活に金がかからず、親類縁者も多いから、我々が推測するやうに國を離れる哀愁にひたりながら、離郷するのではなからうと思はるる節もあるが、人間誰として母國に愛著を持たないものがあるだらう。綿々の情を父祖の山河にのこして行くことはわかり切つてをる。英國人や、佛國人が過ぐる世紀において雄大な詩、壯快な計畫を懷いて植民地に遠征するのとおのづから事情の異るものがある。

そして間島に行つて見て、果して求めるものが得られるか？　自由な、のびのびした生活に打克つことができるか？　貪慾極まりなき支那地主が一片の好意を有つて彼等に接してくれるだらうか？　一家の柱とも、杖とも思つて曳いて行つた牛さへ、苦しい生活に逐はれてそれとも泣く泣く別離せねばならず、さればといつて牛を地主から一年借りると穀物を五石六斗（半分は粟、大豆、他の半分は高粱と玉蜀黍）を報酬として拂はなくてはならず、種子代、農具、秋穫までの生活費も、大かた借りつくしてをる。青田契約までしてをるものが半數もあるのであるから、苦艱の生活！　生き地獄たるにおいて、故郷に居るときと何等異るところはない。彼等は產業革命が日に日に强い勢を以て壓迫してくるのを故國にて感じてをつた。それで朝鮮の瘦田に嚙りついてをるより未開地の廣大であるこの間島へは渡つて來たのだ。



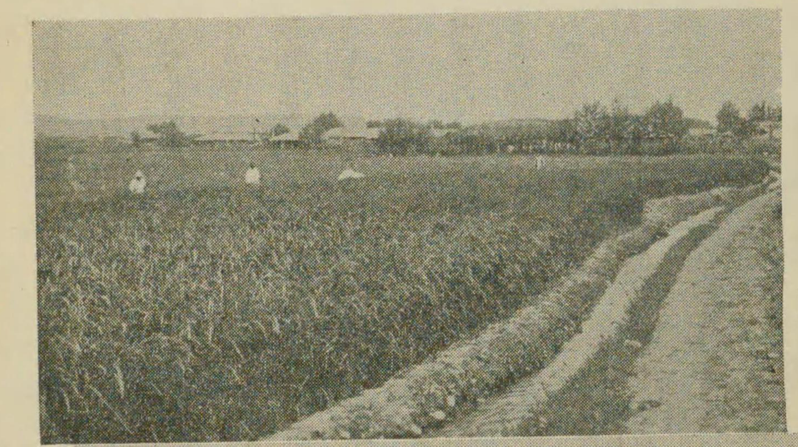
暮れ行く間島の平野

×

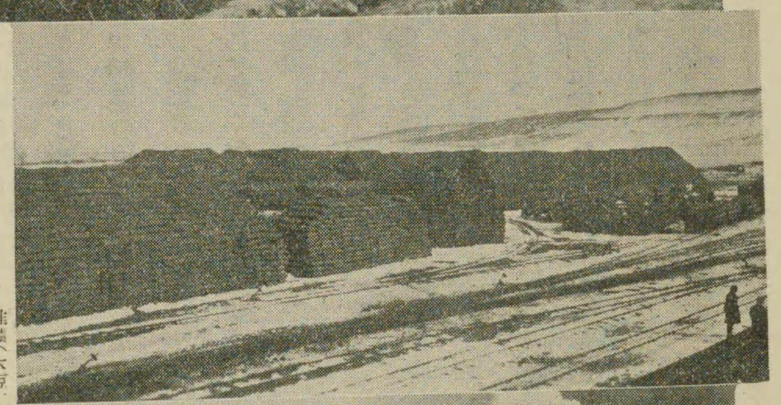
なるほど耕地は多い。目にあまるほど、どこそこの河邊に未開の平野がつづいてをる。それでその筋で調査したるところによると間島に四十萬町歩の可耕地があり、そのうち二十萬町歩が既耕地で、あとの二十萬町歩は未墾地である。試みにその未墾地のみを對象として考へて見ても、かりに一戸三町當りとして六萬七千戸卽ち三十三萬五千人を支持する田畑可耕地が殘されてをる。しかし、それどころの話ではない。間島を根據地として敦化、安圖、寧安、東寧地方へどしどし押出せば、その幾倍もの人口を抱擁することもできるのだ。また、彼等はどれほどの準備のもとに間島へ渡つてきたか、昭和五年間島へ移住した五十家族の調査をして見たところ、無一物で國境へ乘出した家族が一割もあつたさうだ。かうした切羽つまつた人々は三町歩の半分の地積でも生活が支へら

れて行くのである。否、否、三反、四反でも何とかして一家の生活を漕ぎつけて行くのだ。間島における農業は支那人と朝鮮人の勢力が互に相對立し、相爭鬪してここに數十年、百年以上に及んだ。しかしいつも權力の背景は支那側にあつた。支那人の權力の前に强いことは無雙であらうやうに、それほど朝鮮人は永い間、つらい壓迫の鞭を潛つてきたのだ。それ故に、今までに支那側から劍の制壓、死の壓迫が下つても彼等はもう金輪ざい間島を離れないのである。そして自分等の親、祖父、先祖が十數代、二十數代に亙つて血と汗とで開拓した間島は絶對に離れたくないのである。然しながら、またそれ以上に、間島はもともと朝鮮の領土であつたといふ牢乎として拔くことのできない根本觀念が根强く刻みつけられてをるから、朝鮮人の間島に對する執著はとてもわれわれの想像することのできぬものがある。

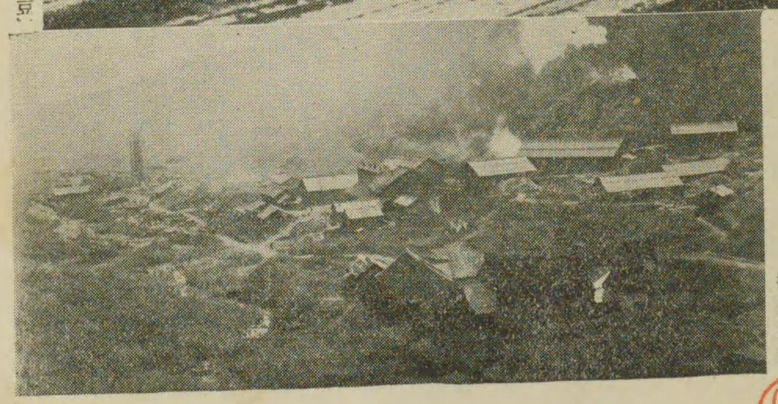
なるほど、咸北より間島の方が作物はよくできる。米でも一反で九斗二升の咸北より二斗四升も餘計にとれる。粟なぞは一石二斗もとれて殆んど咸北の倍近くの收入もある。大豆でも、三割弱、小麥が三割六分も咸北より收入が多いから、辛抱のしやうでは自作農として立派にやつて行けるが、小作農として支那地主の下風に立てば、とても浮ぶ瀨がないと、彼等は悲しい觀念をしてをる。彼等が、地主から未開地を借りるときは大抵三年間は無稅であるが、四年目から約五割



みのり（稻作）



堆積（大豆）

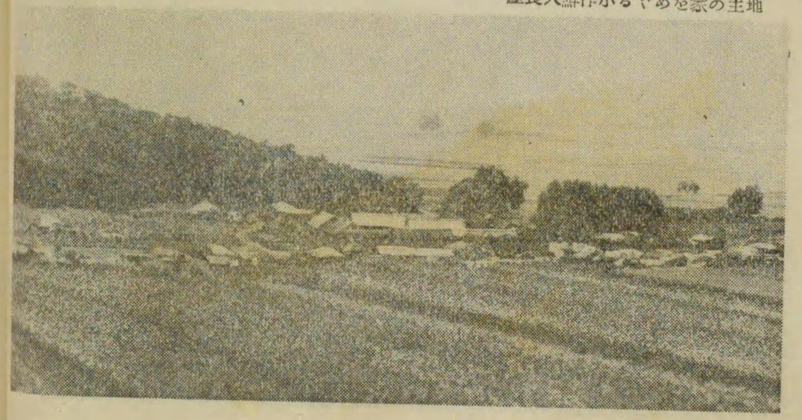


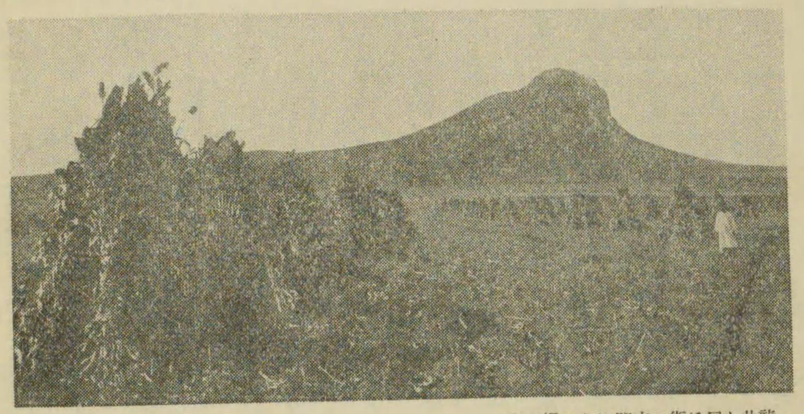
採掘（金山）

を支拂はねばならないのだ。その上に、端境期になれば、とても不利な條件で以て地主との契約をすることが多くなる。からした事情を詳しく說いてくると、鮮農の前途を悲觀するやうであるが、決してさうではない。彼等はかうした艱苦を飛躍して、だんだん堅牢の地盤を固めて行くのである。我國としては、彼等があらゆる壓迫を踏み越え踏み越え、進出するその努力に對し、いくたの便宜を與へてやるやうに計畫すべきではなからうか。どうもただいまでは日本資本と朝鮮人との關係について各方面から觀察すれば、その親みの度において支那地主と朝鮮人との如くうまく行つてゐないやうである。此點において、總督府なり、東京拓植會社なり、または資本家なりは、深くこれを省みるところがなくてはなるまい。

さしをり、新移住者を世話する機關——卽ち無料宿泊所の如き、耕地斡旋所の如き、新移住者に春耕より秋穫までの生活

地主の家をめぐる小作鮮人長屋





龍井と局子街の中間にある帽子山

費の融通の如きを何とか考慮してやるべきである。支那地主の高利貸的なるを排除してやるだけでも、彼等はどれほど喜ぶことであらう。今では、滿洲國も我等と殆んど兄弟の國になつた。とは云へ、此問題はただ、單なる一地方問題と考へずして全鮮に及ぼす影響の大なるを慮つて東洋拓殖會社あたりが、何等かの計畫に出づることを望んでおく。また、滿鐵がこれから此方面の事業に進出するなら、いろんなことを滿鐵中心にばかり計畫することを愼んで、背後に橫はる大きな問題に眼を徹してもらひたい。

×

それから私は、林君や飯塚君と局子街の一瞥にでかけた。龍井から局子街までは汽車も通ずるが、帽子山や、海蘭河のいろいろな狀態を視察する必要もあるし、そして、夜歩くことが絕對に危險であつたので自動車で出かけた。龍井から局

子街の半ばの道程までは海蘭河に沿うて行くのであるが、この河を中心として龍井文化は育まれつつあるのである。眞に海蘭河は間島中心地帶の生命の泉であり、この川があつて水田も出來るし、奥地の筏も龍井街岸に傳ーつてくるし、殊に高原にこの川が流れてをることと、月明のときにこの河岸の逍遙にどれほどの詩趣を喚びおこすことか。私は無限の愛著を禁じ得なかつたのである。ことに、この高原の川に鮭と、鱒とが産卵期に上つてくると云ふことをきいたとき、彼の兀良哈嶺(オランカイ)から長驅して局子街に入つたといふ清正たちも、この風流を味つたであらうことを微笑を以て追憶するのであつた。そしてその日、一支那漁夫が、日本流の投網で、ボラやハゼをたくさん漁つてをるのを我々はつくづく眺め入つて日本へ歸つたやうななつかしさを覺えたのであつた。それから龍井の川岸には、朝鮮ハリモミ、杉松(サンシヤウ)、落葉松の見事な木材が、山と積まれてをる。すべて冬の季節に、氷や雪やを利用して、橇を以て深山から川上に引きだしておいて、そして春の雪消のときを待つて、その材木がつぎつぎに川下の方に流れて行くので、そしてその材木を流すときは、その流した人の印と、受取人の印とを一寸刻りこんでおくので、我々の知つてをる鴨綠江の筏流しとは聊か異つてをる。そして局子街の方に向つてすすみつつ海蘭河の流れと袂を別つあたりに帽子山がある。山といつても、別に樹木が生えてをる譯でなく、三、四百尺もある丘岡

間島の泉海蘭河

である。その麓に、ささやかな二、三軒の茶屋があつた。その茶屋附近が一番危險地帶と云はれて居て、始終匪賊の出づるところとされてをるとI氏が話してくれる。なるほど、沿道の電柱や、岩などには赤いビラがたくさん貼られて「打倒日本帝國主義」といふやうな宣傳文がイヤといふほどベタベタはりつけられてをるのを見たとき、もう敵地にはひつた——といふ感じがわいてくる。丁度、そのとき、そこの茶屋に憩つてゐる支那の人々に對しても、怪しい眼を投げかけるやうな氣持にもなつたのである。

お茶屋の前を過ぎダラダラ坂を二つ三つ廻れば、もう局子街の家々が見えそめる。局子街はさすが間島における、支那勢力の中心だけあつて、堂々たる道臺衙門の跡や、案外手のかかつた支那軍隊の營所がある。漢民族威壓のために滿洲でも稀に見るやうな威壓的建築をたてたその意圖、吳祿貞將軍

が威氣揚々として布爾哈通河のほとりに間島で最後であらうところの軍國的氣分を漲らしたさまが眼の前にちらつく。龍井の街は、新興の氣と、日本氣分が多量にあるが、ここは支那建築の落ちつきあるものが多くて、新開地の氣分がせない。この街は、清正が間島入りのとき一たん兵燹のために烏有に歸したものであるさうだが、それも正確な史跡の證するものがないので、どれほど眞實性があるかは私は知ることができない。

私が局子街を訪ねた日は、丁度、定期の市日であつたので、市中の雜沓は織るが如くであつた。私は黄塵のために、からだぢう一ぱいの砂ぼこりを浴びながら、その原始的な市場を觀察した。間島でも一流とおぼしき斷髪娘から、苦力や、朝鮮の日雇人足に至るまで、露店の安ものの呉服や、内地三流地の新開地辻賣で見るやうな化粧道具、さては緬羊の皮、羊の肉、牛肉、ほこり一ぱいをかぶつた罐づめ類・豚の大切、腐りかけた林檎や、棗、支那梨、野菜、蒜、大豆、米、干魚、川魚、鹽鮭等々、さうしたものが雜然として數町に亙つて列んでをる。支那饅頭を頰張るもの、豚の汁、天プラを食ふもの、或は物々交換、或は銅錢取引の面白さなぞ、何れも間島特有の情景を發揮したものであつた。

私等は、あまりに咽喉の乾きを訴へたので、ロシア人經營のティーハウスに入つて見た。殆んど二間しかない小さい部屋で、一つの卓子を中心に安つぽい長椅子が三脚無造作に並べられてある。主人は四十四、五の白系露人で、おかみさんはまだ、四十を出ないらしい小柄の柔和な女であつたが、かうした巷に見られるやうな卑しいところのない、どこかにノーブルな一面さへあるやうに見えた。そのうへ支那人や、朝鮮人の店々に見るやうな銀蠅もをらず、一杯の紅茶と、一切れの菓子とが氣持よく食べられた。私はそのときつくづく考へたのであるが、瀟洒とか「さび」とかが、日本人のみの特有の傳統であり、そして四阿、お茶の間といふやうな好みが我が民族特有の洗錬されたる趣味であると思つてゐた。ところが、かうした狹隘な部屋をよく整理し、清洒にし、そして脂粉を用ゐずしてサッパリした身づくろひのできる彼等も我が傳統の清洒な趣味は味へるのであつた。私はかうしたロシア人に接するたびに、彼等の經て來た道々をさまざまに回想するので

間島支那文化の中心局子街

ある。彼等は一日にどのくらゐで生活してをるだらうか。かう思ふと氣の毒にも思はれた。しかしそれよりはモットモットひどい生活をなす人々が、我々と同じ山河に育ち、同じ血を分けた民族の中に幾萬人も幾十萬人もをるのだ。私がテーブルの上においた白い銀貨に彼等のまなざしは濕うてゐた。

×

私等は、局子街の市場を視察する前に、間島日本派遣軍司令部を訪うた。局子街の要所々々には鐵條網が張られ、土囊が高く積み上げられて、日本兵と滿洲國兵とが嚴重な警戒をやつてをる。軍司令部と、局子街領事分館とは同じ構内にあるのであるが、羅南から來て居られるM司令官とも逢つた。和やかな顏、おとなしい話しぶりに我々はこよなく親しみをおぼえさせられた。この禿頭の小柄な司令官は、話の興をおぼえるごとにK大尉や、T參謀の顏をのぞきこんでニッコリするのである。M司令官の曰く、「まつたく共產黨の奴等の宣傳はうまいですヨ、そしてビラを貼りつけるでも、剝がれぬやうに糊をベットリつけてやるからナ」この局子街を中心とする間島の支那側の兵備は三箇聯隊、四千五百の實力があり、それに公安隊(我警察)の三千と合せて七千五百あつた。滿洲事件前までは吉興中將が旅團長として、鎭守使を兼ねて總司令であつたのであ

る。そしてその武器は、三八式長銃、墺式長銃、露式長銃、白國式長銃等とりどりであるやうに、その兵隊さんも、いろんな分子が含まれてをるのである。そして僅かではあつたが、機關銃や、山砲、追擊砲も具へてあつたさうだ。私なぞはK大尉から間島における敵軍の一般をきいた。まだまだ聞くべきことは多かつたが、あまり時間を持たなかつたので、T參謀が「泊つて行きなさい、一杯やりつつゆつくり話さうぢやないか」の厚意を謝しつつお隣りの領事分館に足を運んだのであつた。尤もこの領事とは今朝がた、龍井で逢つたが、まだ、歸館してゐないので警察署長さんまで名刺をたのんでおいた。

それから、支那街、朝鮮街、日本街といふ順序で一巡りして見たが、支那人街の堂々たる屋宇のあるのに比し、朝鮮街は小屋がけであまりにも振はなさすぎる。そして怪しげな軒燈のある家が多いのは、どこの新開地でもあらうやうな現象で苦笑ものの一つである。日本人の集團地も決して朝鮮家屋に比し優越を誇る何ものもない——ところが、わが白粉の特級人たちの漫步、木材商、それに軍隊めあての雜貨商、旅館、いかがはしい料亭等々の跳梁は甚しく目立つて見える。今までは此街は日本人は僅か二百五十人しかゐなかつたが、この事件と共に日本の女だけでも百名を越えてはひり込んでをる。何れも「友喰ひ」の仲間ではあるが、それも日本人が下駄を穿いた

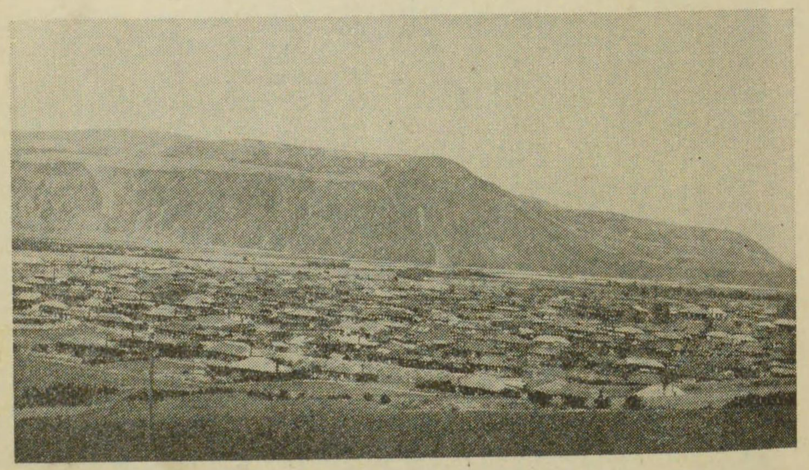
り、丸髷を結つたり、袖のついた著物で寛いだり、味噌汁を戀しがつたり、刺身に舌鼓を打つたり、丈にあまる晝夜帶をかついで歩いたりする道樂がやまぬ間は、「友喰ひ」もやまねば、活潑な大陸への濶歩、永遠に腰の据つた植民的成功を謠へるの日が到來するか、どうか？

×

私は最後に、布爾哈通河や、嘎呀河流域、琿春河流域、密江流域における數百萬町歩に亙る見事な密林分布、原始林の狀態及び將來について語りたいいくたの珍しい話、そして經綸をも持つてをる。そして滿鮮第一の聖地としての白頭山玄武岩臺畔のことについても項を更めて語つて見たいのである。

鐘城か慶源

鐘城と接壤する間島



鐘城から慶源

私は龍井街から雄基へ！　と出發する日のあけ方、まだうす靄につつまれた龍井の街や、龍井の公園をも歩いて見た。この街も寢坊の街であつた。街路には五、六の支那人がウロウロしてをるのと、公園の前の支那側のさる役所の前に銃劍の歩哨が、あくびしながら一匹の大きな西比利犬を相手に退屈しのぎをしてをるのを見たばかりである。もとより公園には人つ子一人をるわけでなく、楊柳や、北鮮の雜木がうつたうしいまで茂つてゐて、五月の朝空がのぞかれぬくらゐであつた。それから私は、間島入り以來、たいへんに厄介をかけたH君を訪問して見たが、朝風呂にでかけて不在であつたので、夫人に招ぜらるるままに二階の應接間でしばらく待つて香の高い朝のばん茶をのんだりしてゐた。しばらく經つとH君が歸つて來たので相連れ立ちて龍井驛へ自動車を走らせたのであつたが、驛頭には副領事の瀧山さん、大美賀警視、飯塚新聞社長、濱田書記生、尾崎君、H君の一族郎黨が打揃つて賑かに見送つて下さつた。

丁度、私と同じ汽車で、若い飛行中尉と飛行少尉が、さる任務を果して平壤の飛行隊へ歸還す

るといふので、送別のために數臺の飛行機が低空滑走をやつてたいへんの人出であるだけに隣境にはその威壓的示威がたいへんにきくことだらう。さうした賑かな空氣のうちに龍井驛を出發して、上三峰を經過し、鐘城驛へは向つたのである。

爽かな初夏の間島公園（著者）

龍井驛から上三峰驛に行く途中で幾度となく、高麗雉子の聲をきいた。それのみならず雉子の正體をも、三度も、四度も車窓から認めたのであつた。間島の雉子はふしぎにも人を恐れない。そして芝生や、野茨のなかから啼いてをるのでなく、軌道から十間か、二十間離れた赭土の畑に戯々としてうろついてをるのである。雉子も啼かずば擊たれまい！　彼等一群は啼いても擊たれないのである。機關車を見れば、大きな兩つの目から光を發する動物――と思つ

てか虎さへ北ぐるといふことであるのに、彼等は、飛び立ちもしないで、悠々として汽車や、汽車のなかの人々を見物してをるのである。私の護衛の巡査氏とS氏は「現在では、個人として誰にも短銃や、鐵砲を打つことを許されてゐない。それで雉子も横著をきめ込んでをるわけです。間島の高麗雉子は內地のものより少し大きいが、それでも一羽が二十錢から二十五錢くらゐしかしないのです。それから日本の雉子と違つてをる點は、顎を取卷いて白色のきれいな頸輪があることと、胸腹部が黑色でなく銅赤色であること、肩が黃色で、背は內地のものより赤味を帶びて白色の斑紋があることです。何でも高麗雉子は人工蕃殖がきはめて容易であるさうで、內地の養殖家がたいへんに注目してゐますヨ」と、語つてくれたのであつた。

その親切な巡査君とも、上三峰で別れてしまつたのであつた。

鐘城も、會寧や、穩城とともに間島の支那勢力に對抗して重要な地點であつた。附近では大豆、黍なぞも豐富にできるし、案外、くらしやすい土地ではあるさうだが、冬季結氷、土地僻陬のため、むかしは朝鮮間島の最主要地として北兵使行營までここにあつて龍井、局子街の支那官憲に對抗したものであつたが、今はただ邊陬の小さな街としての存在にとどまつてをるのである。

私は、ここで下車してこんどは乘合自動車で山越えして慶源まで行くことにきめた。貨物自動

車とも見られるガタガタに十二人までおしこめられて三、四時間の長きにわたつて身動きさへもできぬ。肩をかはさうにも、肱をかけようにもそれもできぬ。そのうへ、私のすぐ後方に腰かけてをる、さる一人がノベツ幕なしに靑痰をベッベッと吐きちらすので、その飛沫が飛んでくるので、氣持のわるさといつたらない。

しかしながら、火田民族の仕業であらうところの、山々のやかれたあとあとに掘立小屋みたやうなものが二軒、三軒打建てられ、そしてその周圍のみが、或は三角型に、或は鍬型に開墾されてをるのが、ところどころに隱見する。道路の周圍には薄桃色の朝鮮つつじが繚亂と咲きほこつてをる高原の氣分を味つては、さうした不愉快なことをも打忘れしめるのであつた。

朝鮮つつじは、花瓣が大きく、そして淡桃色で、もの靜かな感じがする。鮮女の好みとする紛紅がそれである。一抹のものさびしさと、すがすがしさはある。ちやうど北方蘇格蘭を旅してヒースの花がわびしく初秋の丘陵に咲きいでてをる趣、そつくりである。

そして私達の、自動車の音におどろいて、足もとから雉子が鳴き立つ、高麗鶯が岩間や、つつじの木を傳はつて鳴いてをる情景は、二、三時前に通過したところの間島のあの索漠たる景色とくらべて何といふ相違であらう。かうした風趣豐けき山川をすてて彼等はどうして間島へ！　間

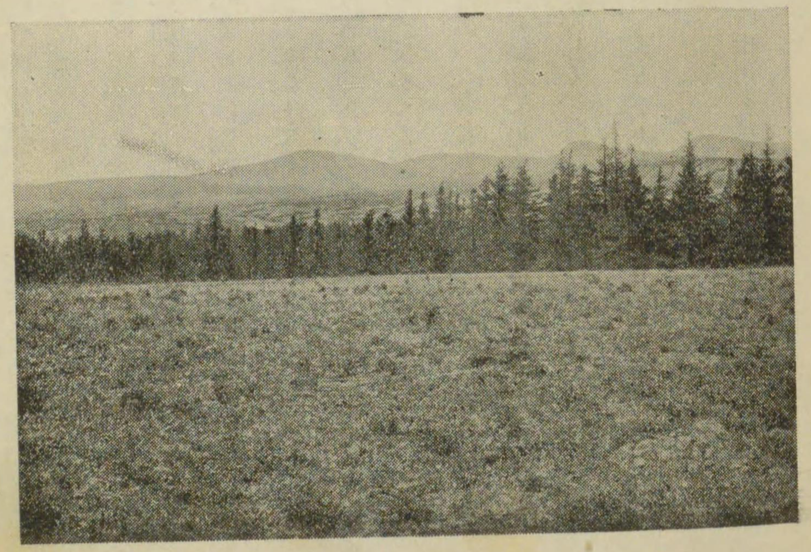
島へ！と赴くのだらう。

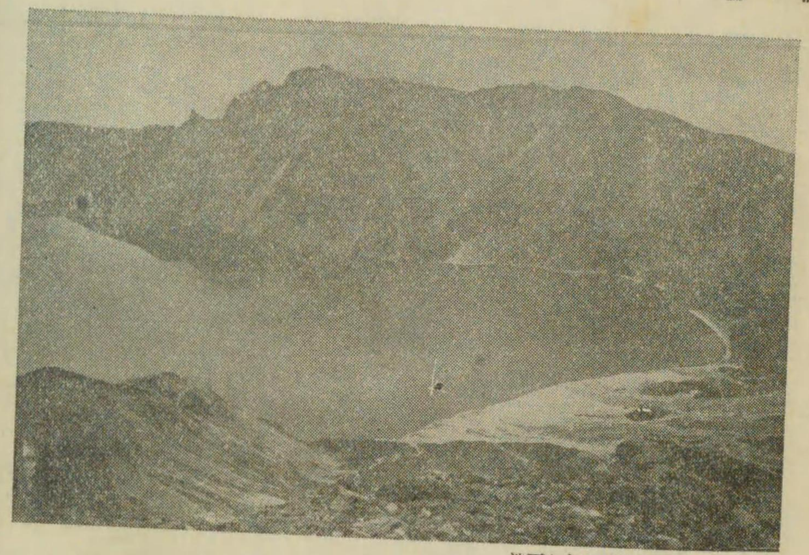
漸く慶源の街が見え始めた。圖們江も絲の如く見えてきた。琿春間島が夕靄の間にひろびろと展開してきた。琿春の街も、慶源街から四、五里の間であるから、チョット行つて見たい氣持になつたが、目下は兵匪横行して交通遮斷のをりからであるからといふので、やむなく慶源の街を一わたり歩いて見るだけにとどめた。

上三峰、會寧等は裏朝鮮での表門といふ感じがして、間島へ赴くものは、のこらずそれ等の驛路を經過しなければならぬのだが、慶源は沿海蘇領、琿春一帶をひかへてブキ味の程度が上三峰等とは違ふやうにおもはれてくるのであつた。從つてここに駐屯する僅かばかりの兵士たちも聊か心もとない氣がするであらう。慶源の街は營所のほかに警察署も、郡廳もある。そして曖昧屋もずゐぶんあるやうにあつたが、その前通りには三、四の滿洲犬がゴロゴロして豚の骨か、なにかをしきりにしやぶつてをつた。しかしながら、兵匪の跳梁が止んだときは、ここは一つの重要な市場となつて、琿春地方の貨物を吸取し得る地點となるのである。

天池への思慕

思慕の山（白頭山の遠望）



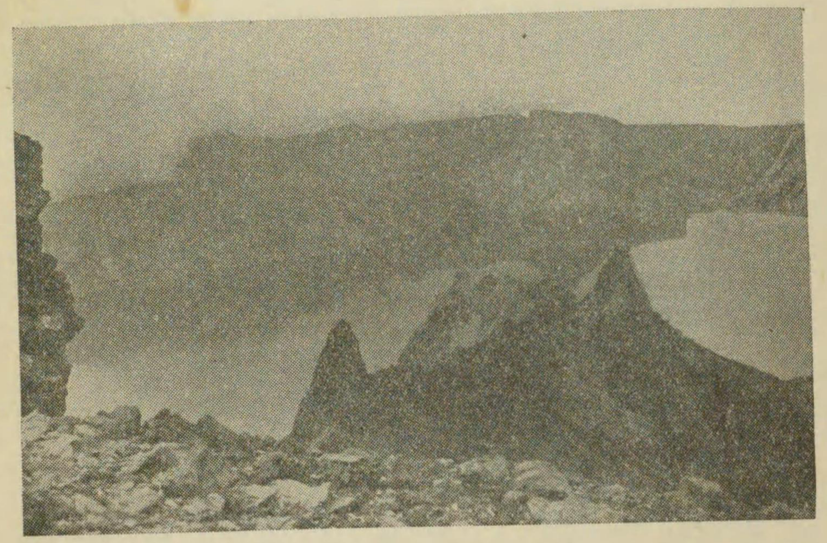


民族の神祕を包む天池

天池への思慕

私は今回の朝鮮、滿洲の旅において、國境をめぐってのいくたの問題に、最も興味を有つたのであつたが、天池に對してのあこがれ！　天池、白頭山を中心としての朝鮮人の信仰の偉大なるには全く一驚を喫したのであつた。

私は、今までは檀君降誕の傳說の伴ふ妙高山こそ全鮮第一の靈山であることを信じてゐたが、朝鮮の人々としたしく相語つたり、史跡をあさつたりして白頭山が、朝鮮諸山の宗嶽と仰がれ、朝鮮民族のシナイと信仰されてをることが、分つたのであつた。そしてその山頂の天池が、その聖の聖でちり、神祕の



うちの神祕であることもわかつたのであつた。

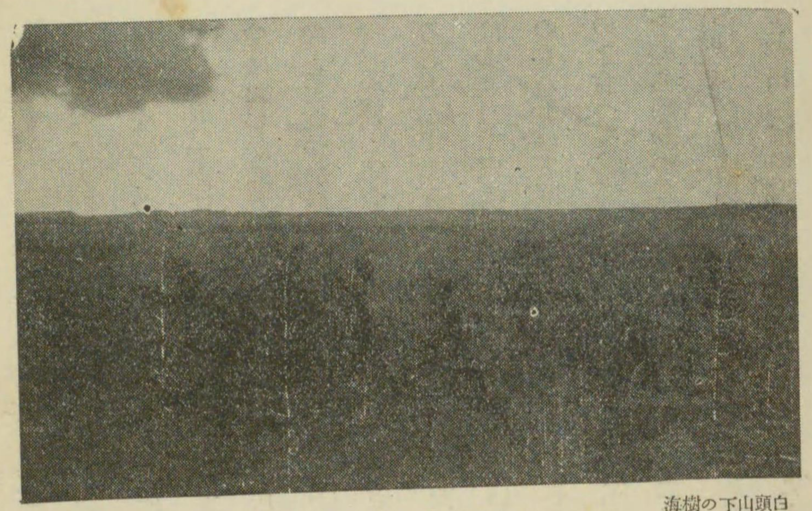
私は、こんどこそは、その峯頂をきはめようと思つてゐた。そして幾千年の間、深い信仰の絕對祕殿であつた神祕の境に、自分の思索を深めたい希望もあつたのであつた。ところが、この一寰は平常でも、四、五の小人數では登山できぬとされてをるのである。それは、この周圍にこの靈山地帶を根據とする馬賊の巢窟があつて、その一團に襲はれると生命まで祭壇にささげなくてはならぬからだ。ただ、馬賊の巢窟と云ふ簡單なものでなく、此地一帶が八十餘年前は、立派な小じんまりした自由國で、韓秉華の威令が徹底してゐたといふ面白い話があるのだ。

それはかうである。凡そ八十年前に威鏡北道明川生れの韓といふ一人の山奥の獵師が、白頭山を中心

として狩獵でその日、その日をおくつてゐたが、或日、彼は馬賊のためにあへない最期をとげてしまつた。その子の乘華は年わづかに十三、四のいたづら盛りであつたが、いかにもして親の讎を晴さんものをと、日に夜をついで一心に武道にいそしんだ甲斐があつて、彼は隣境の馬賊を掃蕩しつくし、それがため長白山麓、松花江輝發河間において東西四里餘、南北三里あまりの自治權を獲得することができ、韓國政府もこれを公認するに至つたのであつた。

彼は小さな自由國ではあつたが、政治、經濟、軍政、刑罰の制度を獨立國家のやうに確然とした。それかあらぬか、明治二十一年露國は圖們江兩岸を露韓兩國人だけの貿易港となす慶興條約を締結した。尙、公使ウェーベルの辣腕は韓廷內部を自己の藥籠のものとなすのとき、この自由國あるを忘れなかつた。そののち鴨綠江口、右岸唯一の港灣たる龍岩浦を租借すると同時に、この自由國も完全に露國の爪牙となつてしまつたのであつた。このことはふだん精到周密を以て誇る我參謀本部さへもうまくだしぬかれたのであつた。日露戰役がすんだ年、吉林督軍から、その自由國の解散令が出でて彼等一味はそれに服するのやむなきに至つた譯であるが、滿洲側では乘華及びその自由國のことを、韓邊外と云ひ、邊外王國ともいつてをつた。

だが、もしも、日露の國際關係が、ああしたことにまで發展せなかつたら、その自由國はどう

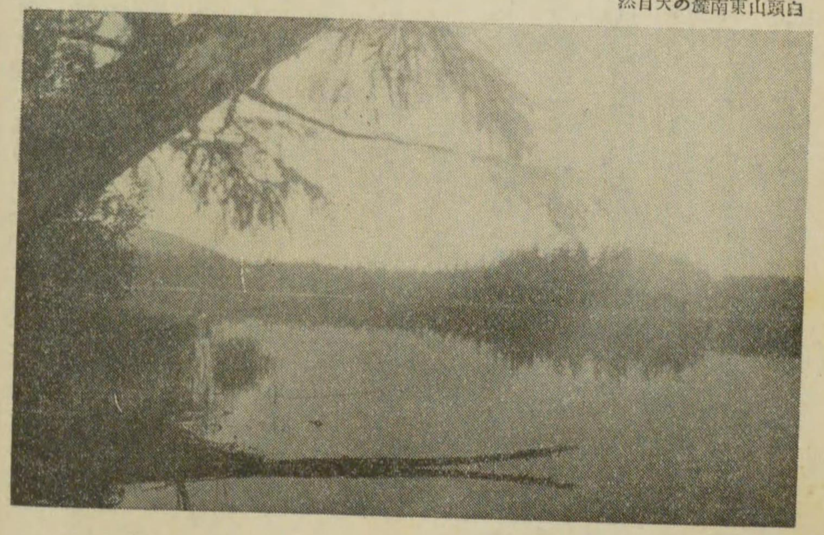


白頭山下の樹海

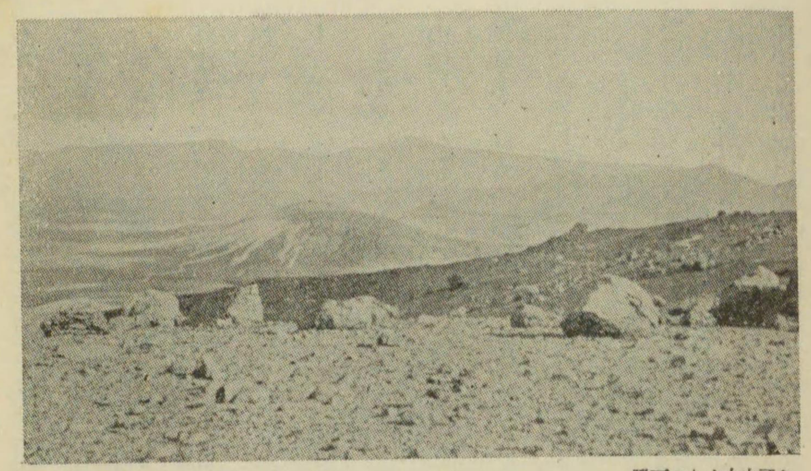
いふやうに變形してゐたであらう。韓乘華の王者ぶりはどうなつてゐたであらうか？

ホンの近いこのごろまでさうした興趣深い境域であつた此一帶は、神話的には一ばん民族信仰の對象となつてゐるのであるが、古記に「昔、帝釋の庶子に桓雄といふとてもの野心家があつて、頻りに人間界の動靜をうかがつてをつた。それを見拔いた父神の天帝はある日、祕藏の靈寶である三箇の天符印を授けて人間界に降ることを許した。桓雄は大に喜び、風伯、雨師、雲師等股肱の幕僚三千を率ゐて、先づ大伯山頂(白頭山の古名)における神檀の下に降つた。その天降りの地を神市と名づけ、自ら桓雄天王と稱して穀物、生命、病氣、刑罰、善惡等々、凡そ人間界三百六十餘の事件を主宰することとなつて、理化の被澤、その治下に洽

く、萬物は盛に生育した。時に、同穴に同居する熊と虎とが、人間に化けたいとしきりに神桓雄に祈願するのであつた。そこで桓雄天王はあはれにおもうて、靈艾一たばと二十枚の蒜とを與へて『爾輩の願望はたしかに聽きとどけてやる。しかし、この艾と蒜とを食つた後、百日間、日光を見てはならぬ、我言を宜しく守つて居さへすれば、必らず人間にかはることができる』と、云つたのであつた。熊と虎とは大喜びで穴に歸り、天王からいただいたこの兩つのものをむさぼり食べた。しかし虎はその兩つのものを食つて、すぐ驅けだしなどして天王のいひつけを守らなかつたから人間に化ることは不可能に了つた。が、熊は眞面目に、云はれたままを實行することが出來たので頭到女身に生れかはることができた



白頭山東南麓の大自然



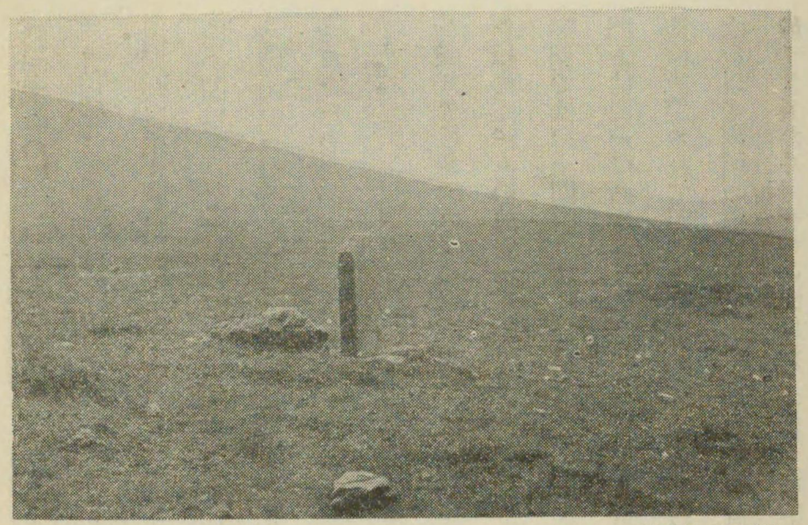
白頭山上よりの下瞰

のであつた。熊は人間になるの大願は成就した。しかも誰も亭主になつてくれるものがないので、毎日檀樹の下に往つて、どうか人間の子を胎ませ下さいと祈願をこめるのであつた。これを側から見てゐた桓雄天王は、もののあはれを感じ人間に假裝して遂に熊女と通婚したのであつた。この間に生れたのが、半島の始祖檀君王儉である——半島開闢の神話はその通りであるが——このことのあつた大伯山を妙高山と解するものがあつて、妙高降誕の説が起つたものらしいが、それは後世の牽强附會の説で矢張り白頭の頂上がその神聖地視されてをる。

二千七百四十四米の白頭峯頂、雲深くしてさすがに天帝の別宮、神の寶座、護國の主と稱せらる靈域たるに恥ぢない。そして天池の深さが四千尺以上と稱せられ、世界第一を以て知らるるだけありて水色が黝碧で恐ろしい

やうな、何ものかに引かるる氣持がするさうである。また一つの傳說は天池の地底から、海に通じてをつて、潮汐がつねに出入してゐる、それで天池のことを海眼とも云つてゐる。何といつても白頭山の支柱は天池である。この一萬一千三百米突の天池の周汀をめぐつて、不思議な神話がどれほど生れてをらう。この半ば雲に鎖された池畔は、眞夏でも、攝氏零下六、七度の低溫を示し、風雪、烈風、激浪の神變は、神怒の表象と見られてをるのである。天池は實に印度の無熱惱池であり、神話傳說の胎盤でもあるのである。

そればかりではない。日、滿、露の國際河川である圖們江も、鴨綠江も、松花江もその源は白頭山奥の雪の集まりであることによつて、一層その神祕が深められて行くのである。卽ち、鮮人の始祖も、滿人の始祖も同じ山ふところに育ち、同じ谿川の水をすくつてのみ、同じ丘岡に成熟したる果實野草を食んだと云ふことが、未來の鮮滿にどう云ふことを呼びかけるか、興趣の深いことではある。卽ち支那及び滿洲側でも、白頭山、天池をめぐつていろいろの傳說が長くつづいてをるのである。試みにその一二をここに擧げて見れば「白頭山の東側に布庫里山があり、その山下には布爾湖里といふ池があつた。昔、恩古倫、正古倫、佛古倫の三人姉妹の天女が、その池に降つて沐浴中、一羽の神鵲が、朱果を銜へきたつて、季女佛古倫の衣上に落し去つた。佛古倫は、



白頭山腹の定界碑

それを拾つて口中に入れるや、忽にして腹中へくだつていつた。それ以來、季女の翅がきかなくなつて天上に飛びのぼることができなくなつた。そこでふたりの姉は氣の毒におもつて『汝は朱果を食べて胤を孕んだのだから、分娩するまで地上で我慢すべきである』と、云つて天上に舞ひ上つてしまつた。地上にとどまつた佛天女は後に一男を生んだのであつたが、英姿雄偉、步行も、言語も、自由自在であつた。これが淸國の始祖であつたと云はれてをる。淸の始祖の生れる刹那は、この天池からの瑞氣が、その家まで棚引きあふれたと傳へられてをる」

白頭山、天池をめぐる一郭は、鮮、滿兩國の守本尊として奪ひ合ひの現象を呈してをるのである。卽ち滿淸、愛親覺羅氏の桑梓地であつたばかりでなく、朝

鮮李太祖の豐沛地でもあつたのである。

而して、また一面に韓秉華によつて小さな自由國が發生する以前に、政治上の問題として清韓の間において、長い間、國境問題で爭つたことは「間島」篇において、その一般は記しておいたのであつたが、清の康熙五十一年(朝鮮肅家三十八年)に、烏剌(吉林)總督穆克登が、聖祖の命を受け、威脅的に白頭山南麓臙脂峯頂に定界碑を建てた。その碑文のなかに爲土門なる文字があるのが、論爭の題目となつたのであつたが、朝鮮側では、土門は松花江の上流であるから、同江以東は我領土なりとし、支那側では、土門と圖門とは同一であるから、圖們江以北は支那領なりと主張するのであつたが、明治四十二年九月統監府設置されてから、圖們江を以て清韓の國境とし、江源地方にある、定界碑を起點として石乙水を以て兩國の境界とすることにはなつた。その當時、朝鮮の民論は非常に沸騰したのであつたが、我國の外交上の立場から、この問題を支那側に讓歩せねばならない事情にあつたので、一先

定界碑正面

大清

烏喇總管穆克登奉
旦查邊至此審視西爲鴨綠爲土門故
不於分水嶺上勒石爲記
康熙五十一年五月十五日
筆帖式蘇爾昌
朝鮮軍官　李義復　趙台相
差使官　許樑　朴道常
通官　全應憲　金慶門

づそれで手打となつたわけであつた。

さうした政治的の問題となつて長い間紛亂の中心地であつた白頭山！　以前は幾度となく噴火した。最近三百年くらゐ前にも大噴火したと傳へられてをる。頂上には白頭岩といふ粗面岩石の一千米突の削壁が突兀としてをる。將軍峰、西出峰、大臙脂峰、滔天孔、その他數十の熔岩峰突起し、外輪十里にあまつて全く一大奇觀を呈してをるさうだ。天池は將軍峰頭に存在するのである。そして、白頭山の周圍には硫黄泉が多く、山頂より二里ばかりの西南麓にある「湯水長」が最も著聞す。山北一里ばかりのところに、高さ七百尺、廣さ三間の飛瀑が奔湍となつて流れてをるのであるが、これを天上水と云つてをる。

定界碑

天池をめぐり、白頭山をめぐり、建國の歷史を語つたら興趣のつくるところがないのである。古の扶餘も、高勾麗も、中古の高麗も、もとを洗へば白頭山の溪谷に蓄積

された勢力の延長にすぎないのだ。その他、朝鮮人の渤海國もさうであるのである。金國の如きは、白頭山の北麓に、廟宇を建てて開天宏聖帝を封じたし、清國の聖祖は康熙十七年に白頭山を、その發祥の靈蹟として長白山之神を冊じたのである。女眞族の興つたのも白頭山の北、松花江の上流であつたのであつた。

私は滿洲、朝鮮を通じて、これほど雄大な靈境はないと思つてゐる。この環域の示現が民族的にどれほどの役割を遂げるか、そして詩の領域において、自然科學の領域においても。

ただ、私は唯物史觀の立場において、これ等の領域をいかに考へればいいのか、そしてそれ等の民族的信仰の現實の前において、それにいかなる公式を以てすれば私の期待する解答が出でてくるかは、未だ成算がついてをらぬのであつた。

近附基雄

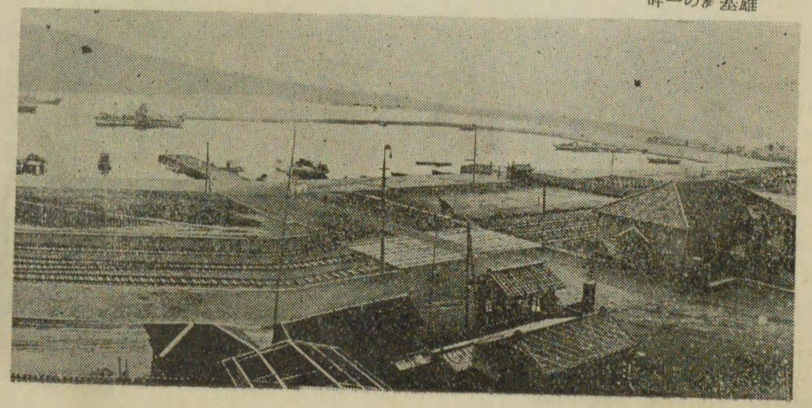
羅水西墳國

雄基附近

夕方の七時、慶源驛頭に立つて、雄基まで行く汽車を待つてをるのであつたが、午後七時とは云ふものの、まだ足もとは暗くはない。しかし雄基までの距離が、百粁足らずでありながら、三時間半もかかるといふ悠長な汽車であるから驚かない譯には行かない。そして車内も、ランプであつたか、電燈であつたか、はつきり記憶もしないやうな豆の如き細い光が、一車のうちに二つ三つともつてをるさびしさで、書見さへできない暗さであつたのであつた。

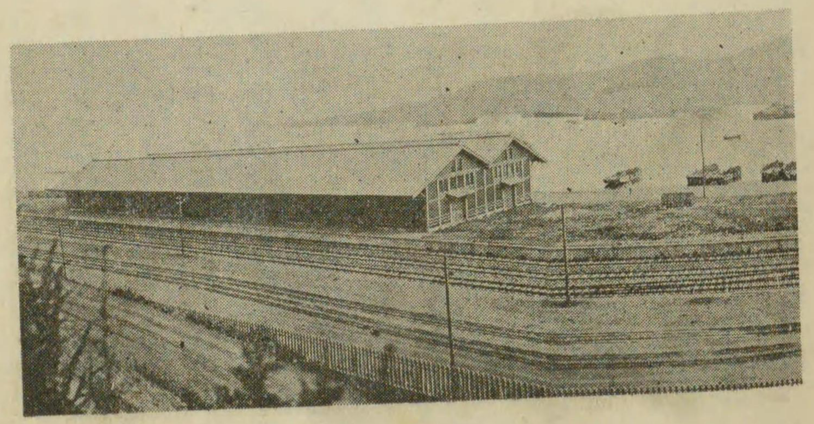
私は、この間の國境鐵道にも多大の關心を持つてをつた。すなはち圖們江口附近の西水羅の如きも、ぜひ一度は行つて見たかつた。そして河口の狀勢や、蘇領沿海縣の話などもき

雄基港の一瞥



いて見たかつたのであつた。かうした興趣をかけたる線路を夜行にしたことの殘念さは、今になつても忘れかねるのである。そして、ここの汽車は一、二等車もないのであつたが、三等車にしても、どこかの廢車を拂下げてきたものらしい朝鮮最惡のもので、列車のなかでは何處でも、かしこでも痰つばが吐きすてられて氣もちの惡いことと云つたらなかつた。全く幹線に用ゐてあるものが、あまりにも美しかつたので、かうもきたなく見えたのかも知れない。

ところが、五月の中旬といふのに、どうもストーヴのそばでなければ、うすら寒さをおぼえて、あそこに一かたまり、ここに一かたまり、つどつて私にはわからない朝鮮語でいろいろな聲高の話がはずんでをる。私は、すこしさむさをおぼえたので正宗の驛賣りを一本もとめてチビリチビリやつて、たいくつをしのいだのであつた。



ところが、この界隈は間島や、浦鹽の近くであるので、高等警察が不愉快をきはめるほどうるさく、列車のなかでも、「お姓名は」とか、「行先きは」とか不躾な問答をするのが、ずゐぶん目に立つほどであつた。

私はその夜おそく著雄して、博多屋に一泊したのであつたが、十一時過ぎに、鄕里の人でここに十數年も住んでをるI君がたづねきて死んだ俠友Kの晩年の話や、國境のおもしろい話などがあつたので、床についたのは午前一時すぎであつた。

×

朝おき出でて見れば、この宿の中庭の山櫻が滿開であつた。ちやうど雨模樣の日であつたが、それがため却つて風情をますのであつた。五月、六月の旅に山櫻をたびたび北鮮の地において見ることのできたのは愉快であつた。

今朝雄基での有力者M君、T君及びI君がたづねてきてくれる。私はM君、I君とともに神社の森に登つて雄基の街を一瞥するのであつた。

M君は「ゆうべあなたが、乘つてこられた圖們東部線の最南端がそこの突端で、西水羅だの、蘇領ホシエット灣の方があの北東の側」、卵島の方向を示して、卵島の由來、現狀を語り、そして雄

基がちかごろ非常の活氣を見せてをること、人口も二萬四千を超えたこと、初め築港するとき第一案であつた大計畫でやつてをればよかつたらうとか、ここの水面面積は三百萬坪であることとか、水底は泥砂層であるから浚渫は容易であること、雄基河、白鶴河、寛谷河の三河川流域が四百五十萬坪あることとか今後羅津灣と合同して大規模の設備にかかつたらよからう、などの、いくたの經綸に花が咲いたのであつた。

なるほど、雄基港はいい眺めではある。商港としての設備や、灣形も小じんまり整つてはをる。ここが今まで間島一帶の物資を呑吐してゐたのかと思ふと、今昔の感にたへないで低徊去りがたいものがあるが、しかし大連や、浦鹽と角逐してその覇を競ふと云ふことになれば、その規模において、ずゐぶん劣るところが多いやうにも思はるるのであつた。で、あるから羅津と聯合さへすれば、一大商港を出現することは、至難ではなからうが、それも、どう云ふ形のもとに、それが實現可能であるかはなかなかむづかしい問題であるのである。

私はM君や、I君とともに、雄基をあとへ、問題の羅津灣見學のために自動車をかつたのであつたが、その間の三里の山越しは坦々たる道路で、初夏のドライヴには持つて來いの快適地である。朝がたドンヨリしてゐた天候も、どうやらあがつて來て、日本海の波濤も、初夏の海らしい

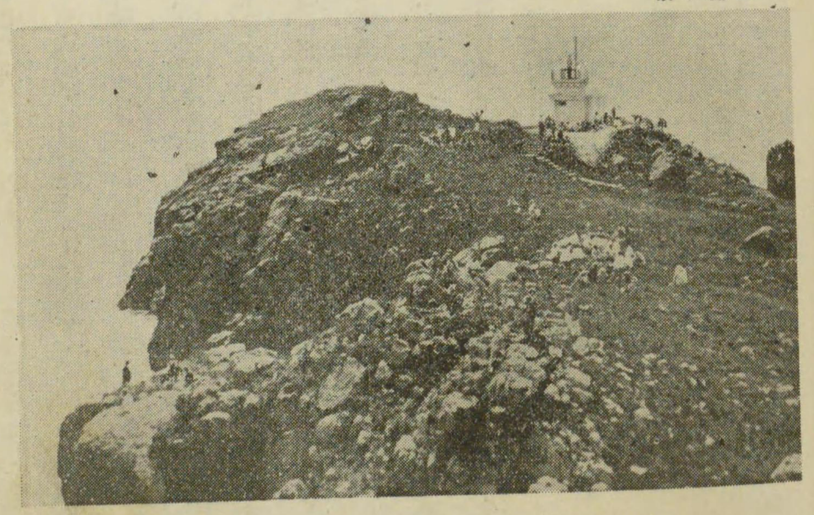
黑ずんだ碧の色を濃くおりだしてをる。いままで、この裏海は、あまりにも虐待せられてゐた、ただ、浦鹽—敦賀間、それに清津、元山が、ホンの申譯的といふほどの貿易をしてゐたにすぎないのだ。しかし、これからは、北滿、東滿、北鮮が釜山を通過せずして羅津、雄基、清津を經由することによつて、ここに晴れやかな日本海となり、裏日本から表日本への飛躍を遂げるのである。そして歴史的のコースに向つて、我が新日本を啓發して行くのである。

さういふ氣持をもつて、この花崗岩帶の一角から海濤はるかの東方、我祖國の方へと眼をやれば、自分たちも「歴史を造つて行く」小さい影法師であるやうにも思はれた。

羅津の海が見える館洞嶺のあたりから、風色はいよいよ加はつてきたので、われわれは自動車をすてて歩くことにした。足もとからは杜鵑がいい音で啼いてくれる、雉子が飛び立つ、まるで一日の行樂にありついたやうな、のんびりしたきもちになれたのであつた。

羅津

卵島小景



羅津

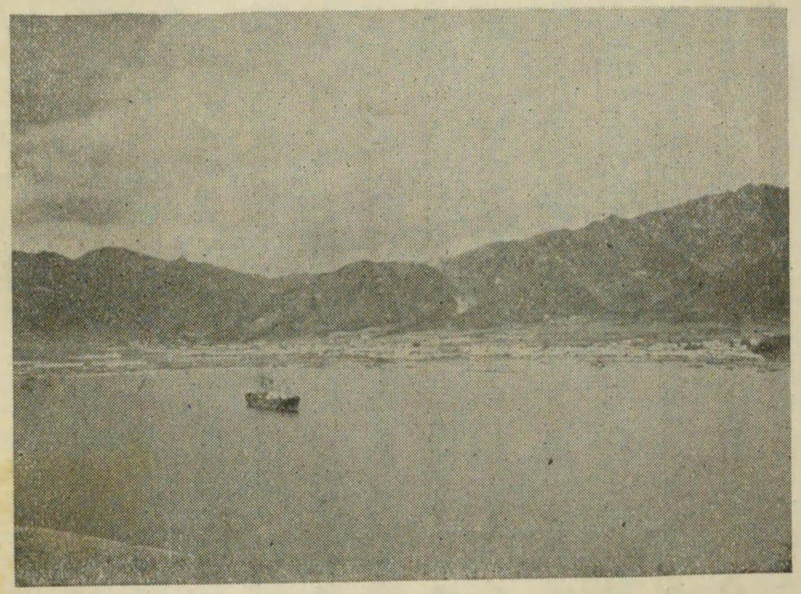
私は北鮮羅津のこれからの經濟的發展について、茲に忌憚なき所見を披瀝して見たいと思ふが、現在において吉會線の經濟的、軍事的、政治的討議をなすの自由を許されてゐない。しかしながら北鮮第一の現在の問題は何であらうかと問ふものあらば、それは日滿の經濟的、文化的聯絡が今までは大連、浦鹽、釜山によつてなされたものが、爾後において北鮮に、その最有力なる一線を、新たに開かるることが目睫の間に迫つて來たことこれである。從つて今後の浦鹽、大連と對立し、抗爭的立場におかるる北鮮の或る一港が、異常に重要なる役割を遂げなくてはならぬやうになる。そして今後の日本海が更に複雜なる經濟的、文化的使命を新たに背負はなくてならぬこととなるのである。或る一港！　その榮冠は雄基か、淸津か、ただしは新たに突如として參加したる羅津か？　新興滿洲國と、友邦日本との飛躍すべき生命の連鎖は果して何れの港によつてさるるに至るか、對內的の問題としてもなかなか興趣深き問題であるとともに、更に、國際的にも重要なる問題であるのである。つまりソビエット浦鹽及び大連と取り組んで何れが覇をなすかの

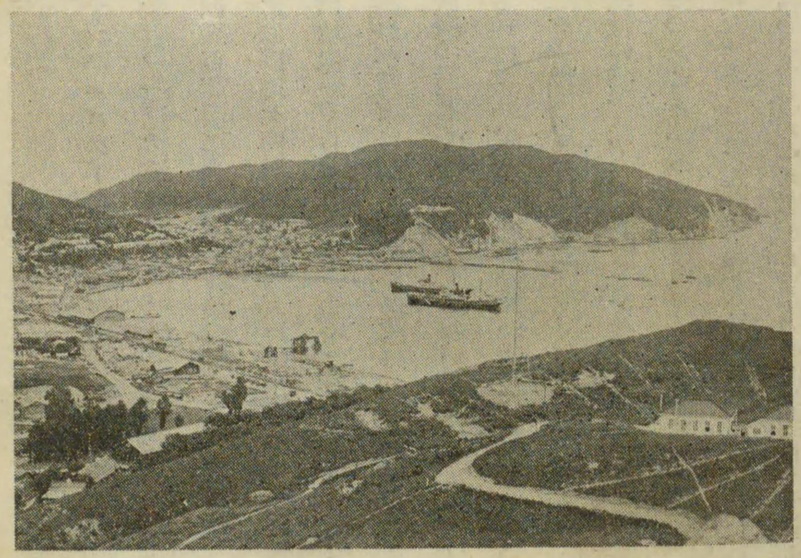
重大事を決するのだ。

哈爾濱から東支東部線にて浦鹽に達するより、哈爾濱から吉會線によりて雄基、羅津に出づるの道程がどれほど近いものであり、そして哈爾濱、拉法、敦化までは最近において驚くべく交通が便利になるだらうと推斷のできる理由がある。それのみならず浦鹽、敦賀間は四百八十八浬であるが、羅津、敦賀間は四百七十五浬もある。それから大連、門司間は實に六百二十浬もあるのであるから、北滿を市場とする限り、時間において決定的優勝の商權を把握することが羅津に許されるのである。否、それは一の羅津ばかりでなく、淸津でも、雄基でも同じ理由で浦鹽に打勝つことができ、そして大連を制肘することもできるのである。彼の物資の豐富な北滿を新たに背景とするばかりでなく、間島の寶庫も、圖們江を中心とする北鮮の新たに開拓さるべき石炭も、木材も、此の線に依らなくてはならぬ運命に到著してをるのだ。私は、東支東部線及び、浦鹽の將來を茲に豫斷しようとは思はぬ。ただ此の線路は夙に開拓さるべきであつたのだが、今までの滿鐵首腦者の狹隘なる考へ方、卽ち大連を中心とする繁榮策から、ただしは、國家的大局の經綸に乏しかつたから遲滯して今日まで持越すに至つたのである。尤も歷代の朝鮮總督や、我國の政治、經濟主腦者たちが、東方の經綸に乏しかつたことは同じく認めねばならぬ。從つて後れたり

と雖も、今日において國家百年の大計より見て姑息でない計畫を樹て、そしてその港灣の撰擇には一切の情實をすててかかるべきである。そしてその開拓者は滿鐵であらうと、鮮鐵であらうと問ふところでない。六千萬圓を費さうと七千萬圓かからうと、そこは思ひ切つて勇斷すべきである。

私は今清津、雄基、羅津の三港についてその優劣につき論じようとは思はぬ。殊に清津は開港場として既成品であり、雄基も半既成品である。しかしながら、羅津に至りてはその內容、規模を知れる人殆んどなく、朝鮮人においても十中の九までは羅津が何れの地にありやさへ知るものが少いのである。まして此港が歷史的偉業を遂ぐべきなぞとの觀念を有つものは皆目ないと云つてもよい。現にその證據として日本內地人がただの一人も、羅津に住んでゐないのでも分明する。ただの一軒も內地人の家がないのでわかる。私は思ふところありてこの港を我國のすべての人々に紹介したい。自分の思つてゐることがやがて——十年か百年かの後に——國民の間に必らず顧みらるる時が來ると自信してゐるから。鐵道もなければ、電燈もなく、旅館もなければ汽船さへ未だ碇船しないこの田舍の一つの港について私が力瘤を入れるのは、やがては、我國が統制的に國家の意思を以て力瘤を入れなければならぬ港であると思ふが故に、玆に貴重なる紙面を割愛す



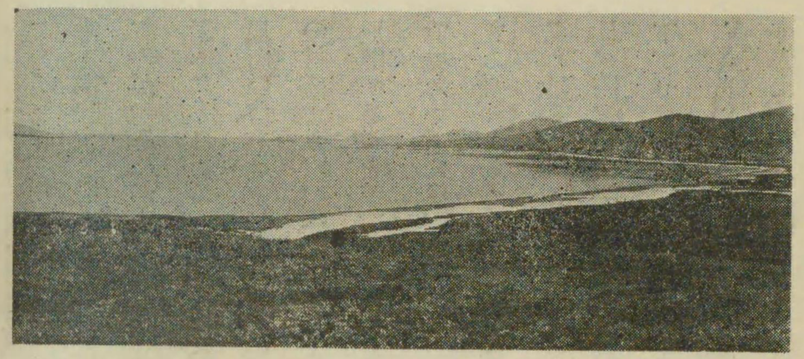


半既成品雄基港と既成品清津港

る譯である。

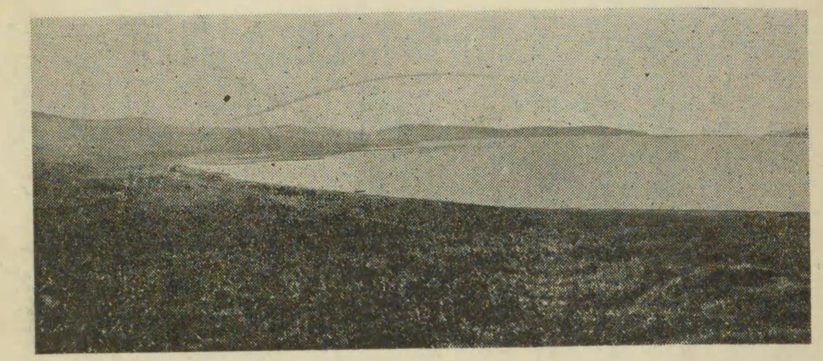
雄基港にしても、清津港にしても帝國將來のマンチェスターたり得る資格においてどこが缺けてをるか。清津は明治四十一年開港して以來、敦賀、七尾、浦潮、關門、伏木、宮津、新潟等への定期航路が出來て一年の貿易額において二千四五百萬圓にも及び、石鹸の原料として日本內地へ行く鰮油のみにても六百萬圓を超過す。背後には躑躅ケ岡、高秣山、天馬山があつて眺望も絕佳である。そして清津驛の方向へ發展すれば市街地はいくらでも展開の餘地はあるが、港の雄大さにおいて到底羅津に及ぶべくもない。そして港口が西南に開いてをるが故に風濤を回避する上においても難點が伴ふのである。雄基も、稍々清津と同じく港內の規模において羅津と同日の比でない。羅津にありてはそのスケールの雄大なる朝鮮第一で、そして前面一帶には小草、大草等の島嶼が散布し、外海がいかなる高潮、暴風と雖も、港の中では安穩靜謐で何等の危險も伴はない。明治三十二年、英艦十二隻が入港し、日露戰役の折、我上村艦隊がバルチック艦隊を邀擊するのとき、二日間この港で待機の姿勢をとつてをつたことがあり、大正七年西伯利事件のときは我艦隊四十七隻が三ケ月間投錨したこともあるのだ。なるほど一艦隊でも二艦隊でも悠々游弋することのできるのは朝鮮にて羅津を措いて他にないのである。此羅津は、地史に今までは「地境」

とか「新安」とか記されてをつた。なるほど新安面の一角こそは羅津であるが、將來はその一を羅津と稱呼するであらう。羅津港の缺陷として擧げらるるところは、港內の水深は三尋乃至二十尋あるが、それが少々深すぎるので投錨に不便であるのと、市街地として計畫さるる地域が狹いと云ふことにある。港內水深の問題は、如何樣にも解決がつくとして、市街地としては北方には種馬所の官有地を拂下げて、隧道を新たに開いて雄基と聯絡しても展開の方法はあり、正面は現在の村落より右奧へ、山を越えて延長してもいい譯であり、そして楡津、梨津方面へはいくらでも展開することができるのである。だから五十萬や八十萬の人口を集中するが如きはさう難い問題ではない。だが、市街地として建設するには惠まれてをるとは云はれない。しかも、この廣からざる羅津の五百餘町歩が、既に前滿鐵重役であつた某氏によりて思惑されてをると聞いた。私はその說の正否を訊さうとするものではない、さうしたことがあつても宜しい、國家は眞に將來の日、滿、鮮の咽喉としてどの港が最も有利な條件を具へてをるかを嚴重に考察して最後の斷案を下すべきものであると信ずる。私はこの村を一通り自ら調査した。現在の財產狀態としては金持の村といふことはできないが、貧弱町村の部類にも屬してゐない。だが、村の基本財產としては僅かに一萬五千八圓あるのみだ。この基本財產も思惑師が村有地を買つたのを或人が將來の村政



將來のマンチエスクーロー羅津

を顧慮して銀行預金とさしたものである。將來朝鮮で一番大きい港、さうした期待をかけられてをるこの土地の人々は、あまり歡迎のできぬ、利巧な思惑者たちに昨年ごろから一坪二十錢とか二十五錢とかで賣つてしまつた。そして、何にも知らないこの村の人々は自分等の親たちから、先祖から讓り受けたこの土地を惜しげもなく人手に渡してその大部分を酒色に消費してしまつた。私は、この村の面長李萬權氏及びその他面役場の殆んど全部の人と會見して、港の飛躍の話などして見た。今、左に羅津のあらましにつきて陳ぶれば、本村の耕地面積は一千三百町で實際の平地は七百町歩しかない。その七百町歩が將來の羅津銀座として經營さるる根幹である。村有林は五百町歩あるが、これと先に記せし一萬五千八圓の預金が本村唯一の財産であると云ふに至つては、心細くも悲しい話ではある。しかし、將來の大羅津を形成するのは決してこの村だけの地積を利用するのではない。何れにせよ、村



人達は自分の鄕關がいかなる地位にあるかを知らずにゐては、酷い豺狼のために肝心なところを嘗め盡さるるのは火を見る如く明瞭の事實である。私は村民の無智に乘ずる狐狼の群々が、これ以上に、この村の人々を奈落の底に突落さないことを祈つてをる。そして自分の絕對權を惡用して一村の運命に罹る賭博をやつた人はたとひ數千萬の富を成し遂げようが、國民として、そして國民の利害を一身に荷ふ職權を不當に行使して、思惑をやつたことについて遺憾の念を國民から持たるるであらう。此村の人々は、只今四千二百人、戸數は七百戸ばかりだ。これ等の人々は高利の犧牲になつて骨までしやぶられてゐる。假へば一千圓借りて三割即ち三百六十圓の利息を天引さるる哀れな貸借法に甘受せなくてはならぬ狀態である。水田に從事するもの、漁業に携はるもの、もとより勤勉努力を特筆すべきものはない。否、その漁民はいくらでも漁れる鰯獲に對して殆んど半遊民的である。雨下れば海に出

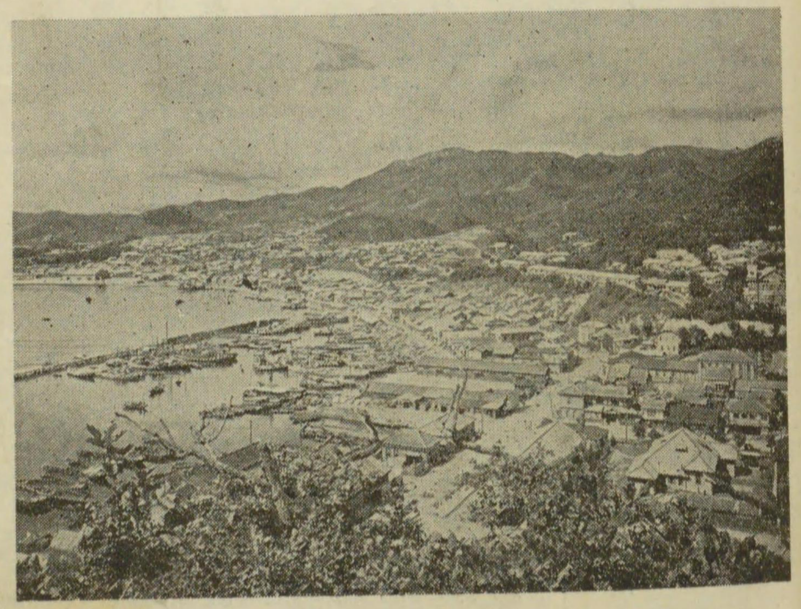
づるを避け、食あれば前に進むの魄力を喪ふ。一年一戸の收入が百圓內外であり、そして一戸の平均財產が四百圓乃至五百圓である。一年の村總負擔額が本年は一萬四千圓で一人當り年二十圓平均(但しこの年は土地賣買激甚のため取得稅が半額以上を含む)、普通の年では一年一人當り十圓內外である。また、村の最高資本家は家、宅地、山林を併せて五萬圓に達するものが一人あるのみだ。日本の北海道である咸鏡北道は總體的に文化の進度においても他に比して遜色があるが、しかしその學校教育において特に遺憾の點が多い。本村學校は校舍狹隘のため、二部教授をやつてをるが、本年は就學兒童三百八名の中、入學者は僅に三十一名しか收容できなかつた。(本年は滿六歲から十歲までの兒童を收容する目的であつた、それで今までの學齡者が殘つてをつたため三百名を越した)卽ち志望者の十分の一しか收容することのできないやうな狀態である。これは强ち村財政狀態から來たものでなく、文化的自覺の然らしめしものである。然れども近時に至り何れも向學心に燃えて來てをるから此點は著しく數年間に長足の進展を遂げるであらう。また、本村には本當の醫師がない、醫生なるものはあるが、この人はただ診察に任ずるのみで、投藥はしない。そして村人を診察したからといつてもその料金を取ると云ふでもなく、志あるもののみ一年に一圓づつを醵出するのみである。要するに負擔する能力あるもののみが義務的に負擔する

制度をとつてをる。これでこそ眞に「醫は仁術である」を諺どほり實行してをるものである。ところが、さうした平和の村にも選擧の爭鬪が劇甚になつて來つつあるさうだ。つい、このほど、面議員選擧には八名の議員に十四名の候補者が出現した。而も選擧權のあるものが百八名であつた。その原因についてものべたいが今は省く。この村を大觀すれば滯納者のないこと、借金に首が回らぬといふほどのこともないから、今にして覺醒するならば立派に飛躍のできる村である。さりながら、農業にも科學的知識を利用するの域に達せず、原始的農法であり、漁撈についても前に言つた如くである。

このやうな田舍村が、瘦せこけた一漁港が、國際貿易港の大立物として沿海州を北に睥睨し、北滿、北鮮、間島の寵兒として覇をなすに至るか、その將來を想望すれば、なかなか大きな興味を有つことができる。この序に、雄基のことについても、もうすこし觸れておく。現在雄基は國際貿易最北の基點であつて、南方は日本海に面し、東西北の三面は松鎭山と雄基嶺とが包容してをる。日露戰爭當時は露軍が駐屯してルーブル經濟下に支配された雄基でもあつたのである。何といつても露滿國境への行程がわづか六里しかない一都邑であるのである。現在において奧地との陸上の連絡が未完成裡にあるがため、その貿易額は淸津に及ばないが、それでも年額七百萬圓

を超過し、人口またドシドシ增加しつつある。滿洲事件以來、雄基と會寧とが起點となつて諸種の事業が進められたため、現下市況の活潑は豫想外である。港口二哩、灣入三哩、水深九尋乃至十二尋を有する。海港の規模から云へば、羅津には及ばないことは前にも述べた通りであるが、市街地發展の地域の廣大なるは羅津の雄基に及ばぬ點である。私から云はしむれば大羅津を建設するにはどうしても雄基と打つて一丸とすべきであらうと思ふのである。

羅津か清津か

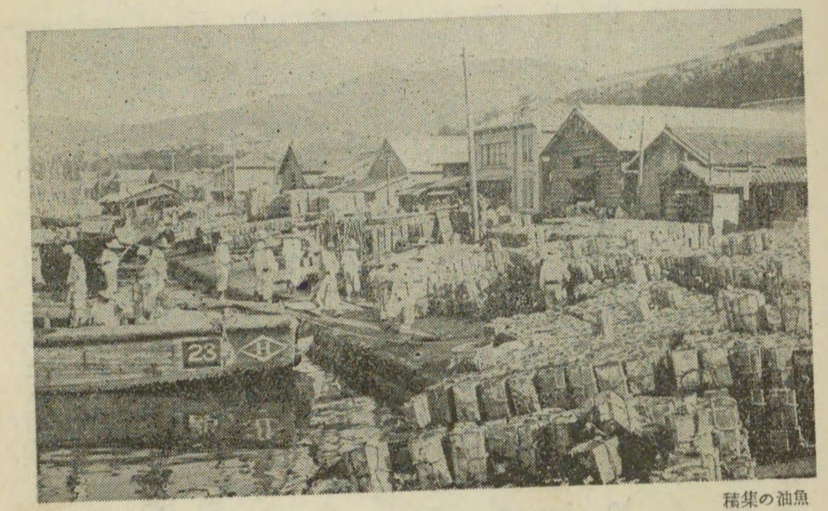


昔一の津清

羅津から清津へ

羅津で思ひの外の時間を調査に費消した。しかし、朝鮮の一つの村落、漁港を根本的に見ることのできたのは、私の將來にとつての大きな收穫ではあつた。そして、羅津が市街として、國際港として、どう伸びて行くかが、今後、私にとりての、たのしみでもあるのだ。今では、煤煙一つ立たない、はればれした漁村であるが、もう五、六年も經つたならば、汽船の出入も繁くならうし、停車場ができ、人家は建てられ、埋立工事も著手され、公園ができ、下水ができ、水道が設けられ、面は府となるまでの展開を示したなら、灣入一千二百六十二萬坪の海面も、清淨な村落も、煤煙一ぱいの都となつてしまふであらう。そして間島からの貨物も、新京、哈爾濱からの貨物も幅輳するやうになり、敦賀、舞鶴、新潟あたりからの貨物も、遊覽客も織るやうに羅津へ！羅津へ！　の時代の到來するであらうことを思つて見れば、さすがに去りがたい感じがするのであつた。

そして今後十年も經てば、六七百萬噸といふ物貨が雄基、羅津で呑吐されて行くであらうこと



積集の油魚

を想像すれば壯大な、豪快な氣持にもなれるのであるが、羅津―長春間は僅か四百十九哩であつて大連―長春間より二十哩も短距離であり、大連―關門間は六百二十哩であるが、羅津―關門間はそれより九十六哩も短距離であるから、新京までの差數は百哩以上短縮されるわけである。まして北滿經濟上の肺臟哈爾濱を中心として考へて見たならば、どれだけ羅津、雄基の前途が多望であるかが分明するのである。

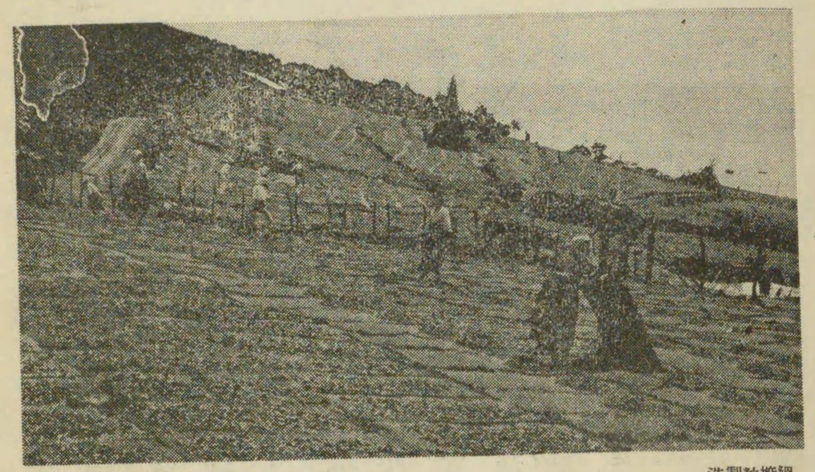
私はさうした、いろいろのことを感じたり、思つたりしながら、羅津の海と別れて行くのであつた。MもIも、忙しいなかをくり合せて、ここまでついてきてくれたのであるから、その厚意を謝してお別れしたく思つたのであつたが、Mは「もう、すこし行きませう、楡津まで行かなくては大羅津の風貌が、はつきりしま

せんよ」と云つたので、三人とも自動車に乘つて、將來羅津港の外港たるべき楡津までの丘岡路を走らせるのであつた。なるほど、羅津灣は、長崎港を見るがやうな、ながい袋の港である。どこまで行つても、港の口がわからぬくらゐである。Mは少々、得意げに「これだから市街は海岸に沿うていくらでもできますヨ、つまり外港になるところに何十萬人でも、はひる市街がつくれるのです。もう、ここいら邊まで思惑してゐる人もゐますからナ」と語るのであつたが、それは、ちやうど羅津—楡津の中間くらゐのところであつた。私は二人の厚意で楡津まで七里半の岸壁道を、とても興趣多く旅することができたのであつた。

楡津からは、また二十五六里をさびしい獨り旅をせねばならぬ。しかし沿道の海も山も初めて經過するところばかりであつたので、退屈どころの話ではない。M君I君が楡津で別れるとき、自動車のなかで飲んでくれと云つてもらつた麥酒も、ただの一本口をあけたのみで、却つて長いあひだ沿道の風景に醉はされて清津についたのであつた。

私は海近くのさる茶店の樓上でホット・ウヰスキーを一杯傾けつつ港や、岸壁を見おろしながら、しづかに數年の後の清津の街を考へて見た。

清津の街は、だいたいにおいて、天圖鐵道と運命を共にするのである。龍井街と運命を共にするのである。近き將來において吉會線が圖們東部線に有利に解決されたときは、清津の運命はそこに谷まつてしまふのである。さうした出發點より清津を、私は眺めて見たいのである。だが、現在はその批判が或る事情で許されてはゐない。



鹽搾柏製造

この街は日露戰爭當時は、僅々百軒ぐらゐしかなかつた漁村の部落であつたのを、明治四十一年開港場となつてから、今のやうな北鮮第一の都會となつたものだ。港としての價値批判は、だいたい「羅津篇」にのべておいたが、ただいまは工費六百四十萬圓を投じてわづかに十一萬坪の港をつくりつつある。ここの港のうしろは山で、平地は至つて尠いのであるが、さればといつて水面は今でさへ狹隘であるのであるから、埋め立てることなどは尙更できないのである。だが、西方には輸城平野がひろ

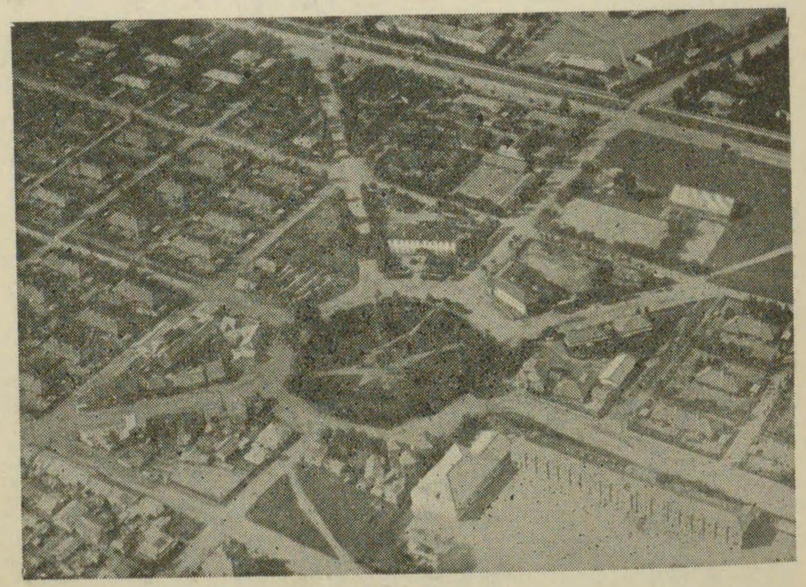
びろとして控へてをるから、そちらの方へ擴大して行けば、大都市としての計畫はできるわけである。

現在の清津はいわしの街である、いわしの油だけで日本內地へ行くのが、六百萬圓と云ふ豪勢さだ。人口三萬內外の田舍町としては注目すべき額である。なほ清津全體の貿易額は一年に二千五百萬圓に達し、今後異常の勢ひを以て展開せんとしてをる。そして輸移出の主なるものは、豆類、木材、魚油、乾魚で、移入品は小麥粉、麥酒、砂糖、工事材料、織物等々である。

私は最後に一言したいのは、たとひ天圖鐵道がどうならうと、吉會線がどちらに廻らうと、圖們江口から鴨綠江口間の國境鐵道八百哩が縱斷したならば、數千萬町歩にわたる木材も、そして國境を中心として石炭が十億萬噸も發掘されたなら、また別の意味を以て、清津を考ふるの日があらうと思ふのであつた。

羅南の街

羅南の放射路



羅南の街

羅南の街は軍人の街。

私は清津から自動車で羅南の街をおとづれました。

朝鮮中でかはつた街であります。その眞中に公園があつて、そこから放射路が整然と八幡山の方へ、三笠山の方へ、金毘羅山の方へ、梨木谷の方へ、師團の方へ、羅南驛の方へ、黄金橋の方へ！　八方へ放射してゐます。

どこか札幌の街に似てをるやうです。

街路にはプラタナス、アカシヤ、ポプラの樹々が美しく植ゑられてゐました。

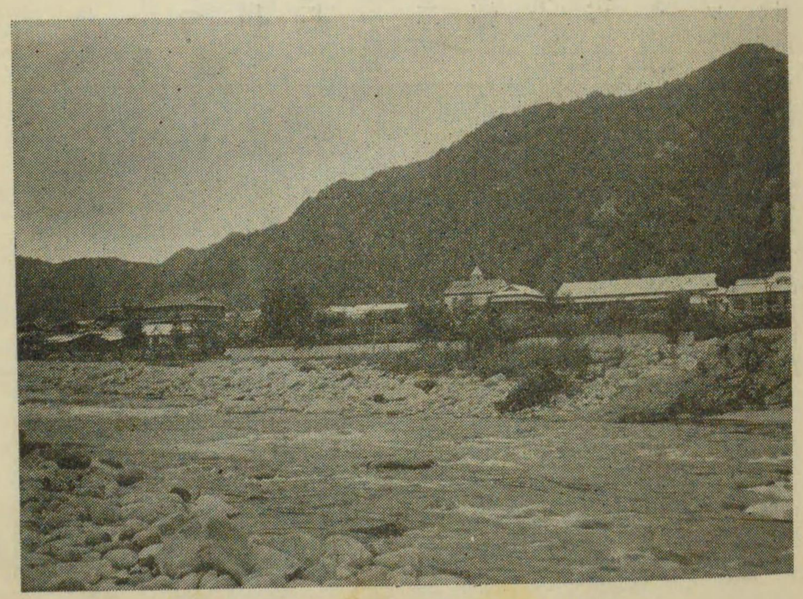
そして初夏の風がさらさらとその梢に、その青葉におとづれてゐました。

師團の軍人さんは出征して大かたは留守でありました。

街頭を歩いてをる軍人さんは留守居でとこか淋しさうでした。

そしてふだん軍人さんの相手をしてをるバアの灯はさびしくふるへてゐました。

乙朱



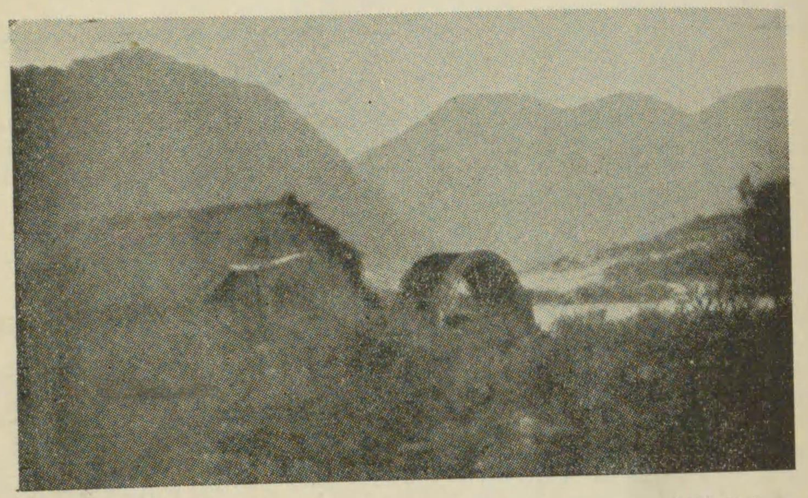
乙朱鄉泉撮

朱乙

朱乙で汽車がでるまで三時間またねばならなかつた。名にしおふ朝鮮一のいでゆであるから、一つ出かけてみようと云ふ氣になつて自動車を雇ふことにした。

もう、朱乙驛には電燈がついてをつた。驛から二里半の山奥で二十五分かかれば大丈夫であると運轉手は語つてきかせたが、まつ暗の山道をひとり行くのは、何だか、すこし薄氣味惡いやうでもあつたが、道路がとても立派で京城の總督府の大道を驅るやうなきもちがする。今日の晝間はとてもあつくて、ワイシャツまでしぼるやうになつたが、夜の山みちは

朱乙山奥



朱乙附近

ひえびえとして、まるで晝間の世界と變つた高原國に旅してをるがやうである。

鮮仙閣といふ朱乙第一のやどやに送りこまれた。何でも五、六日前までは宇垣總督が滯留したといふ川ぞひのひつそりした大きい部屋に入れられた。

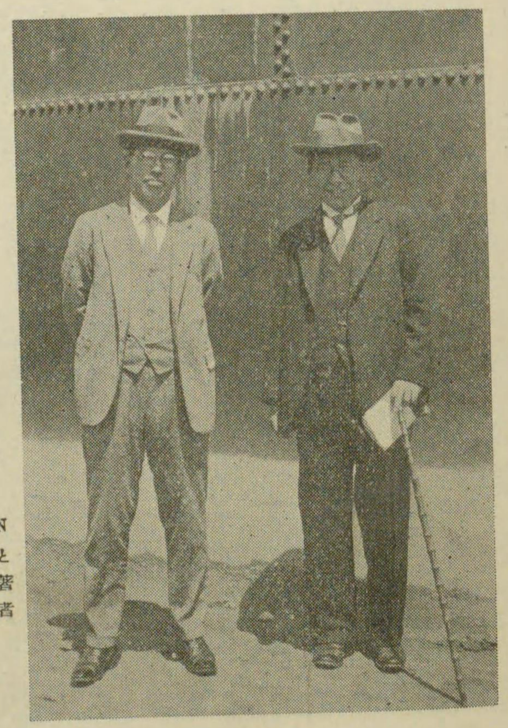
この宿屋はだだつ廣くて、少々まとまりがないやうにもあるが、その夜は誰も他にお客がないとかにて、とても閑寂のきはみであつた。そして溪流がかそけき音をたててをるのをきくのとき、身は全く信州邊のホンの山中の溫泉にあるやうな氣がした。私はせめてここに一泊でもしたかつたが、奉天行の日取りが、約束してあつたので、與へられた二時間のうちで入湯もすれば、晩食もとるといつた忙しさだ。

そして、私が晩食をとるのとき女中さんが「總督さ

んといふ職業はとてもかなひませんな、お巡りさんが十四五名でねずの番でさア、やつぱりたれかがつけねらつてをるのでせうか」

私はかうした幽寂の地にありても、自然のしづけさ、のどかさを味ふことのできぬ地位にある人の窮窟さにはそぞろ氣の毒の感にもうたれたが、しかしあまり地位的に緊張の境遇にあるときは、たいしていい分別がでるものでないともきいてをつたが、なるほど、かうした地にありても取卷きのある世界で生活せなくてはならないとすれば、いい智慧も、いい分別もいでないのが故あるかなとも思つたのであつた。

興南での教訓

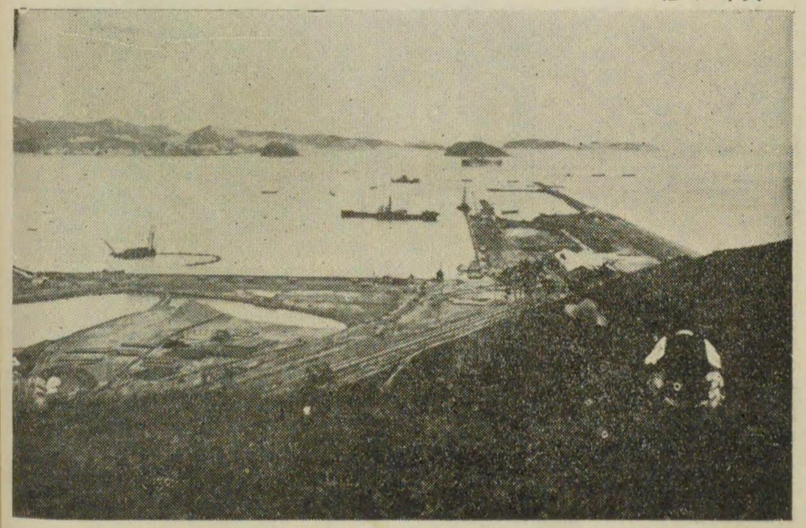


Nと著者

興南での教訓

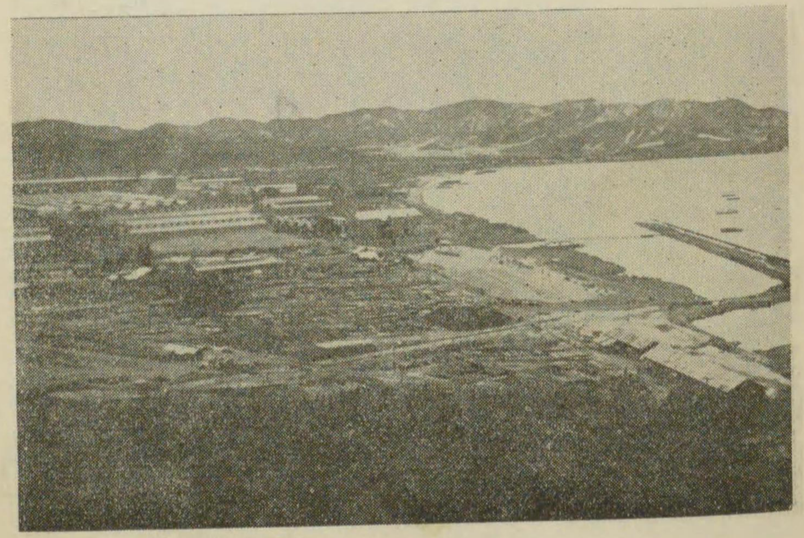
私が今回視察したいろいろの工場のうちで、最も採錄すべき必要があると思つたのは興南の窒素肥料會社であると思つた。その規模から云つても、朝鮮滿洲を通じて第一の大きな組織のものであるし、そしてその關係が全鮮の農民に影響するので、ぜひ一ぺんは見る必要があるのであつた。ところが、近ごろ、滿鐵會社もこれに對立して一つの肥料會社を起し、滿洲の肥料界を席捲せんとするの計畫があると云ふ噂がある。そんなことはどつちでもいいことにして、私の知人のNがここの要職にをるから、その案内で數時間會社内をかけずりまはるやうにして一

興南の港



瞥した。私は、科學にも、化學もほんの門外漢であるから、その内部的解剖及びその前途の價値批判はできない。しからば、感覺不應症かといへばさうではない、一つの感心したことがある。私は職工が五千をつて、事業資金が一億萬圓を越えて、發電力が十九萬キロワットあつたにしても、それには驚かない。羨ましくも思はない。株主に三菱系はじめ大どころがズラリと並んだところで、それもどうでもよい。野口君が、年に二千萬圓儲けようが、三千萬圓儲けようが、それも私の關心するとこでない。三井を凌ぎ、三菱を凌ぐ富の力ができたところで、それにも文句のあらう筈がないのだ。

ただ、ここの首腦野口君が科學工藝の生命に對する見解だ。彼は「科學工藝の一つの特權的生命は長



くて五、六年きりだ。だから、その生命を超過せない年數のうちに、豫定の收益を擧ぐべく努力すべきだ」と、いつてをるさうだ。

私は、その一言が一ばんいい土産になつた。そして資本主義の神髓の或るものが、うかがはれたやうにも感ぜられた。

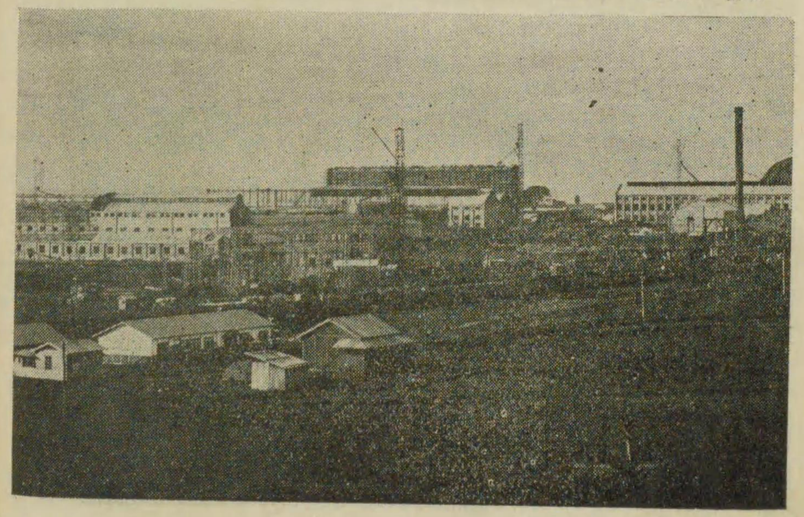
もとより、その外にも、規模や、組織から學ぶべきところもあつた。しかし、それよりは、私は、その貯水池が海拔五千尺の高原に八千キロメートルの周圍と、八十米突の深さとを湛へてをるさうだから、そこで四、五日寢ころんで讀書して見たいなあと思つた。

×

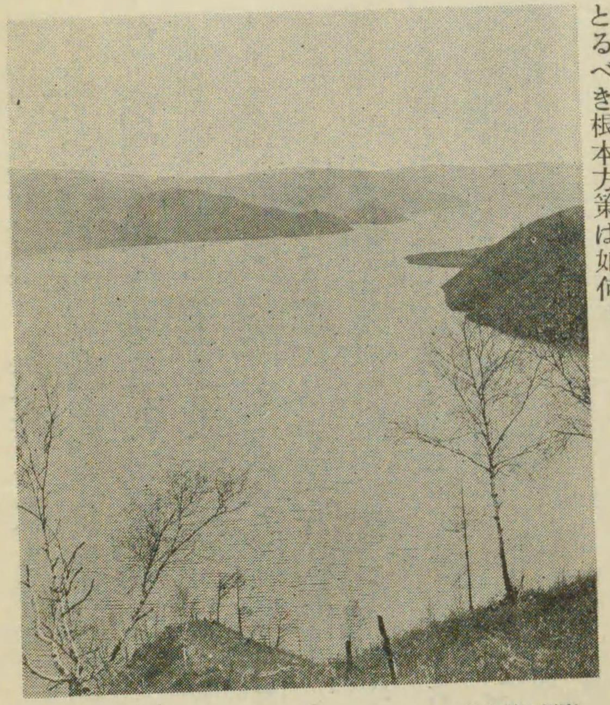
私は、その日、Nからそこの倶樂部であつさりした午餐のもてなしにあづかつた。

×

私は、その歸途、左の四問題にぶつつかつた。かうした特權的の果實にたいし、未來の國家のとるべき根本方策は如何。



朝鮮一の大工場



高原の貯水池

科學工藝の將來にたいし、未來の國家はどういふやうな態度をとりつつ進むべきであるか、獨逸のそれに比し、蘇聯の大計畫に對立して。

將來の朝鮮勞働者問題をどう云ふ態度で指導して行けばよいか、賃銀問題の點より支那苦力との對立は、よほどむづかしい問題に激化して行くにちがひない。その根本策は、實に民族問題の主要な役割を遂げるで

あらうことを、つくづくと考へたのであつた。

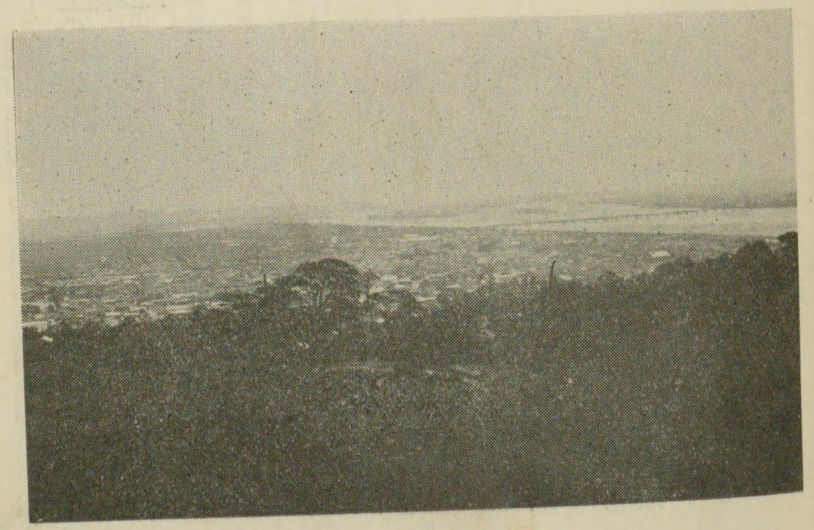
もう一つは朝鮮の知識階級者問題の將來にたいしての解決策。

今回の渡鮮を機緣としてこの日、ぶつつかつた前二項問題を十二分に私は研究するつもりで興南に別れた。そして、またその日、親しく肥料會社における朝鮮勞働者の狀態を見て第三項の緊急性を痛切に感じた。それは對內問題からでも重要であるが、さしあたり滿洲國に橫はる現實の對立にたいして切實さをおぼゆるものである。第四項は、この問題は朝鮮における高等敎育の完成に伴ふ一つの重大な副次的の問題である。これは敎育そのものからと、社會、國家そのものからと對立して二つの見方で、いつかゆつくり別に說いて見たいのである。

肥料會社を見物に行つて、農業問題にもふれず、顧みて他を云ふそしりはまぬかれぬが、それもやむを得ぬことである。

咸興

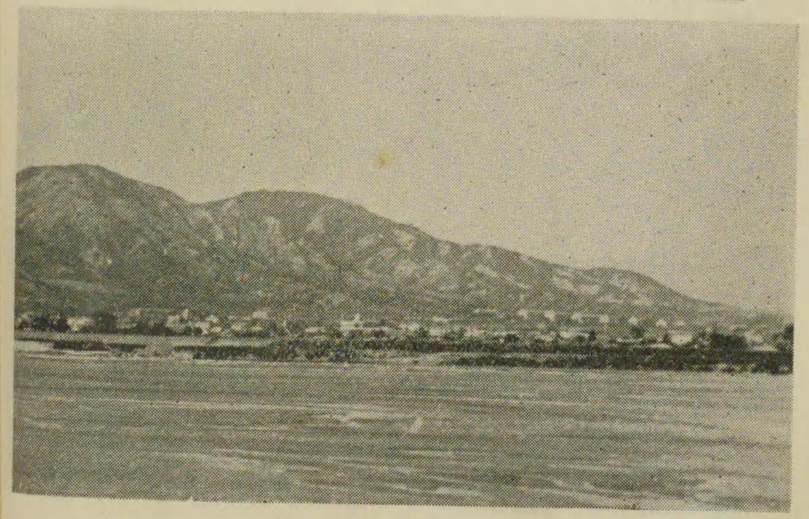
咸興街の眺望



咸興

咸興は李氏の興つたところだと云ふことで、私は興南から自動車で咸興の街にはひつた。

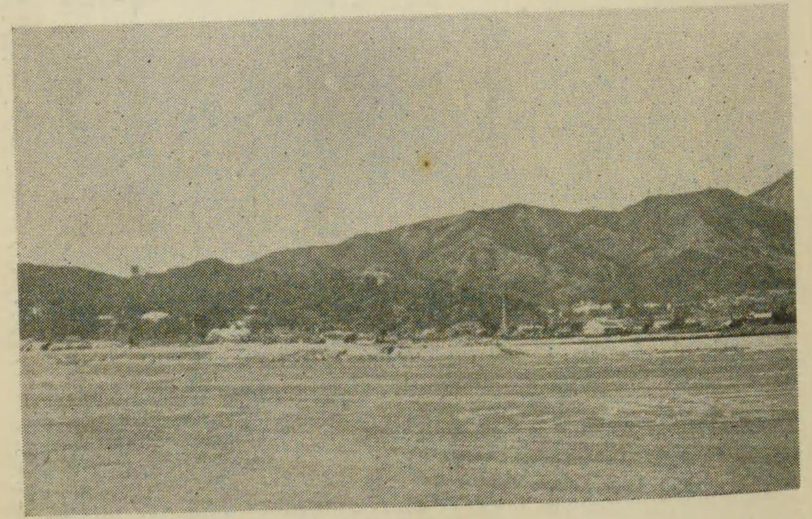
ところが、沿路で支那人がたくさん野菜畑で働いてをる。それについて運轉手は「興南も、咸興も內地人が、一日は一日とふえ、興南のみにても內地人が二萬もあるのです、それは皆窒素肥料のお蔭でせうが、その野菜を供給するのは大抵支那人です、北鮮あたりは豆腐屋まで支那人の勢力になつてゐます、そして、京城の附近でも、それからその他の都會附近でも野菜つくりは、支那人であるから面白いのです」と、語つてくれたのであつた。



盤龍山の遠景

私は、興南でさる人から、勞働者として支那人を使用するにおいては、朝鮮人を使用するより、賃銀も三割方やすいし、そして非常に使ひよいから、つい支那人を雇傭するやうになるのだと聞かされたことなどを思ひくらべて、支那人が、朝鮮まではひり込んで、その勢力を奪取するにおいては、その結果必然的に起るであらうところの重大な土地問題、勞働者問題、民族問題が近く或る形のもとにおいて問題化するではなからうかと今から心痛されるのであつた。

そして咸興街について一ばん初めにきいた話が、K製絲工場が、賃銀問題、勞働時間短縮にからんでちやうどストライキの最中であるといふのであつた。何でも四、五十錢の最低賃銀で勞働時間が十七、八



時間であるといふ、謊のやうな事實であると。しかし咸興の或る一人は、私にたいして「なるほど內地から來られたら五十錢の勞銀は廉いと思はるるのは無理もないが、支那人、朝鮮人の生活程度から見たら、むしろ高いといつてもよい、それにK組ののは、女工であるからやすいといふことは斷じてない、支那人なら靑壯年の男子でも、それだけで、どしどし働いてくれる」と云ふのであつた。なるほど、さうきけば、尤もなところはあるけれども、しかし十七、八時間ブッ通しの働きかたは、勞働問題といふよりは人道問題に飛躍してをるのである。

そして私は、咸興監獄の隣りにあるK工場の前にいつて、その狀況をも一瞥したのではあつた。ちやうど、その日は、塵埃のひどい日で、目をあけて市中を見物することさへもできないのではあつたが、たそがれごろより風もをさまつてきたので、盤龍山にのぼつて咸興平野や、咸興市街を展望したのであつた。

この街は、むかしは觀察使や、兵營などをおき、そして城壁をめぐらして北方のおさへとしてあつたが、近年に至りて城壁も、六つの大門もすべて撤去するに至つたから、たいして感興のわくやうな對象物もなく、ただそのかみから流れてをるであらう城川江が、くれ行く平野のなかに白布のやうな、のどかな存在を示してくれてをるのと、その川を中心に咸興街が朝鮮式、日本

李太祖を祀れる廟

式、洋式等とりまぜて不規則に、ものうさうに立ち列んでをるのであつた。

私は山を下つて、古い李朝を物語る兩班邸宅の跡々をたづねて見たが、その荒廢のさまは見るかげもなかつた。彼等が威儀をつくろふための土塀は悉くおちてしまひ、屋根瓦には雜草が生ひ茂り、そこにすむ主人公も、我が公卿の成れのはてどころの狀態でないあはれなさまを悉く露出してをるのであつた。そして彼等のうちには地主階級のものが少く、小作人の群にまで墜落してゐるものも多いとのことであつたが、それも行きつくところに行きついたものであらう。

咸興の兩班は李家發祥の地で、普通の鄕班

に比して勢力を有つてゐたのであつたが、今や、その日、その日を糊して行くことさへできぬものが多數にあると私の友は語つてゐた。

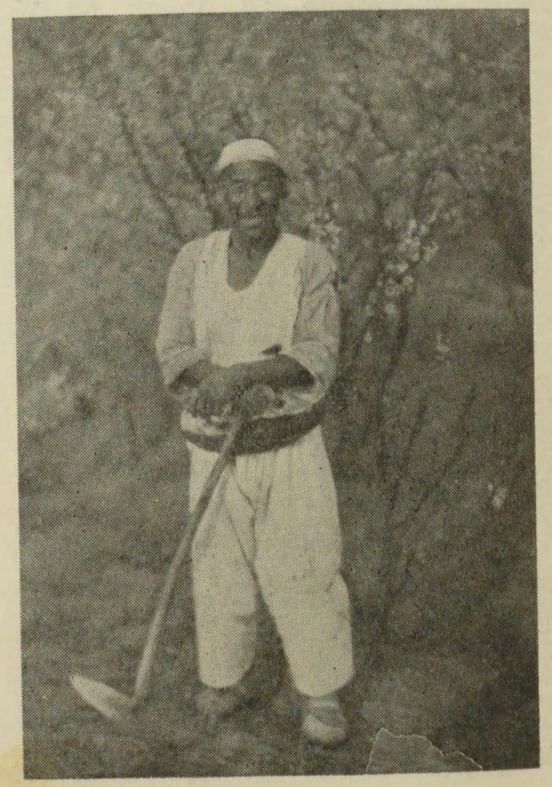
それから私は、兵營の前、萬歳橋のほとりを見物して京城行の夜行車にはのり込んだのであつた。

私は市中見物のときツルジョクといふ珍しい酒を一罎もとめた。これは白頭山の四千尺以上の高原にあるツルジョクと云ふ高山植物の實からつくられるもので、その果實は葡萄を一まはり小さくしたやうな紫がかつた色をしてゐた。

だが、私の舌と喉とは、そんなあまつたるいやうな、味にはあまり好意はもたなかつた。

朝鮮の近狀を或友へ

土に生く



朝鮮の近狀を或友へ

私はこれまでいくたびも渡鮮しましたが、大觀的に、趣味的に、藝術的に朝鮮を見ることができたのは今回が初めてであります。それはやつぱり「改造」の編輯を十三、四年もやらせてもらつた御蔭で、總て線の細かい藝術的の味ひとか、自然にたいする觀賞の眼も伸びて來たであらうことを、ひそかに感謝してをるのです。

今度の渡鮮は實は何も計畫的ではなかつたのです。しかし久しい間のあこがれを實現するため平常愛好する五、六の書物を持參しましたから、門司から釜山までの間で樂しみに讀むつもりでしたが、あまりに海が和やかであつたので、グッスリ寢込んでしまつてただの一頁も讀めなかつたのでした。ところが、それがためスッカリ東京—下關間の汽車中の疲れがとれて釜山から京城間も落ちついた旅行ができました。そして洛東江を中心に可なりの平野がひらけ、その平野には麥の綠波がかすかに動いて涼しき風を送つてくれました。

私が、以前渡鮮したときは、釜山から京城まで悉く山肌が見えて旅情を荒ませましたが、今日

では見違へるほどの美しい綠があそこの丘、ここの狹間に充ち滿ちてまゐりました。これにはずゐぶん總督府が、永い間苦勞をしたものらしいです。T總督などは木を伐ると死刑に近い嚴罰を科したものださうですが、そのお蔭も多分にありませう。

しかしながら、その沿道の松がスクスクと育つてゐない。横にひねくれたり、或は樹幹の悉くが、殆んど肺病に惱む青年のやうに發育不十分の畸形的悲しい存在を我等の前に展開してをるのです。

そのかはり南鮮はさすがに朝鮮の寶庫だけあつて田畑が氣持よく開けて、あたかも東海道の旅をするがやうな氣持がしました。それも總督府が大正九年以來、產米增殖十五年計畫を樹立し、之に依つて八百二十八萬石の增收に熱中しただけあつて、肥料も科學的に使用され、耕種法の改善等もかなり行きとどいてをるかのやうに見受けられました。しかし、その一面には馬小屋みたいな住宅が幾里も幾里も京釜線の沿道に續いて居るのを見て民族的にいろいろと考へさせられました。

私は京城について早速農民の生活狀態の調査にかかつたのでしたが、試みに一つの表にしてお目にかけませう。

農民の生活狀態

月次	食糧	食事回數	一日食の價格
一月	米、大豆、小豆、粟等	二	約一五——二〇錢
二月	同上	二	同上
三月	同上	三	約一五錢
四月	同上(草粥)	三	同上
五月	同上(同)	三——四	同上
六月	大麥(米)	三——四	約一〇——一五錢
七月	大麥(米)	三——五	同上
八月	大麥、小麥	三——五	約一〇錢

これは京畿道における農民生活の一例でありますが、それよりは人口の密度が多く、貧富の懸隔の甚だしい慶尙道、全羅道あたりの地方においては一層の慘狀を呈してをることと思ふのです。私、はこのことについては、別項「苦力」を論ずるときにも引合ひに出したいと思つてをるのです。ただいま資本主義が朝鮮農村に對し猛烈な攻勢をとつて進出しつつあるところです。この對立がモット激化して來たなら農民の生活狀態はどう云ふやうに轉化して行きませう。これは必然的に一つの大きな社會問題を卷きおこさずにすむでせうか。

それから小作爭議は昭和元年から見ますと、昭和六年は約三倍强で六百六十七件數になつてをり、參加人員は四倍半で九千二百三十七人となつてゐます。それでも昭和五年に比べますと件數において五十九を減じ、參加人員において二千九百十五を減じてはをるのです。

それから勞働者の將來についていろいろ憂心させらるることがずゐぶん多いのですが、現在朝

鮮で勞働してをる朝鮮人勞働者は百十三萬六千餘人で日本內地人が二萬二千四百九十一人、支那人が二萬六千四百九十六人でちやうど我內地人と數において對立してをるが、朝鮮人はこれ以外に半農半勞働者の九十八萬七千餘人を加へて二百十二萬餘人となり、我內地人の半農、半勞までを合すれば三萬三千人弱となるのです。然らばこれ等の勞働者は一日どれだけの賃銀を得てをるかと云ふに、日本內地人は平均二圓九十七錢であり、朝鮮人は一圓七十六錢、支那人は一圓六十三錢といふことになつてをる。勿論これは平均賃銀であつて實際賃銀ではないのですが、その一ケ月の平均收入において日本內地人は二十二圓九十二錢、支那人二十四圓八十九錢、朝鮮人十一圓五十七錢と云ふ數字を示してをるのです。これは朝鮮人は金さへあれば勞働に出ないと云ふ惡い習慣があつて一ケ月平均の勞働日數が極端に少いから、かうした現象を呈することとなるのです。それともう一つは資本家が、朝鮮勞働者は權利のみはよく主張するが、義務の觀念において支那人勞働者の如く從順であつてくれないから、勢ひ支那人を雇傭することとなるのだ、と、云ふのです。その證據には勞働賃銀は一ばん廉くして、一ケ月の收入においては第一位にをるのでも分るし、また支那人は半農半勞働者まで合せて二萬八千四百三十人であるのに、失業者は僅々二百人足らずであり、日本內地人は三千百人の失業者を數へ、朝鮮人においては實に九萬七千人の

失業者を數へられるのです。二千四十三萬の人口においてタッタそれくらゐなら比率において我内地の比ではないのだが、しかし朝鮮勞働者が一ケ月の勞働日數の平均が七日以下であるといふ事實は朝鮮當局者及び識者の最も研究を必要とするところであることを重ね重ね言つておく次第であります。今では工場の數も四千そこそこで工場勞働者も十萬人を數ふるのみであるが、おひおひ内地のそれの如く激增してくる場合に、朝鮮人勞働者の現在の如き勤勉程度で工場が、そして工業が有つて行かれるかと云ふ根本的の問題も起つてくるのです。

×

工場勞働者の問題は、教育問題に甚大な關係を有ちますから、聊か教育問題に觸れて見ませう。彼の二千餘萬の人口を擁しながら、内地の小學校と見るべき普通學校は僅々一千七百十校で、生徒數は四十八萬餘人、それに就學率は十九パーセント九と云ふ數字を現はしてをるのです。我内地人の在鮮人口は五十二萬七千九百四人であるが、就學率は九十九パーセントであるのに比してあまりにみじめであります。それから内地の中學と見るべき高等普通學校が二十四校で一萬一千九百四十九人の生徒を有し、高女と見るべき女子高等普通學校が十六校、七千八百九十一人の生徒を有するにすぎないのです。官立專門學校が五校あつて朝鮮人は僅々三百五十七名在學してを

るに過ぎないのは、そこに重大な何等かの原因が伏在してをるのです。私は大體において、今度その依つて來れる理由をつきとめることだけはできましたが、こゝには書くのを差控へませう。それから私立專門學校は八校あるが、朝鮮人の學生は一千七十七人で、京城大學豫科は百五十二人、大學に百九十人の朝鮮人學生があるのみです。このことにつきては政治的、社會的立場から別に論じたいと思ひます。

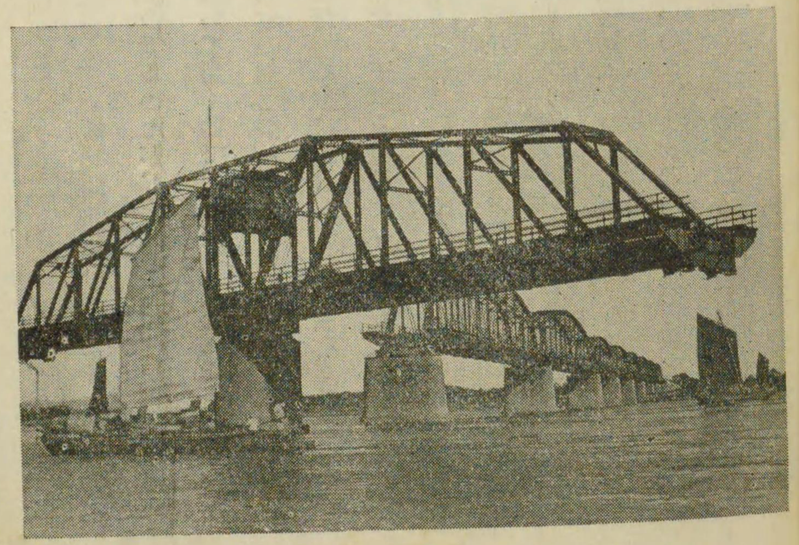
次ぎに、思想的、政治的犯罪についても一言したいと思ひます。昭和二年は一般犯罪者一萬三千七百六十二人のうちに思想犯は八百十四人でありましたが、昭和六年は一千五百九十三人に增加してゐます。此點において驚くべき增加とか、總督政治が何等かの影響を與へたとか、さう云ふ特殊的な現れは見えて居ませんが、しかしいくらかづつでも年々犯行數が遞加して行きつつあるのは、痛心の至りです。

それから、朝鮮での全役人、即ち内地人鮮人も引つくるめた俸給額が四千四十二萬圓に達してをるのも、あまりに多すぎるの感がありますが、それよりは朝鮮人官吏の俸給額がその二十一パーセントを占むるにすぎないことは、一考を要すべきことかと思はれます。行く行くは此點をうまく調和して行つたら、政治、思想的立場にも相當にいい現象を招くことができるであらうことを

信ずるものであります。

だが、何と言つても朝鮮の諸方面のこの最近十ケ年における開發は驚くべきものがあります。とにかく明治四十三年は歳入が二千二百三十二萬圓であつたのが、昭和五年においては十倍餘りに飛躍して二億三千九百七十三萬圓となつてゐるのですから、各方面に劃期的の展開振りを示してをることは申すまでもないことと思ひます。それとともに、我内地人によりて工業、農業、鑛業、商事、林業、水産、運輸、瓦斯、電氣會社に投資された商業資本乃至産業資金の公稱總額は昭和四年末で六億一千六百餘萬圓に達し、それに金融資本の公稱資本金四億一千二百七十餘萬圓を合せて十億以上に達するのであります。それに公債募集、借入金、收益の資本化を加算して十九億萬圓を凌ぐものがあるのですが、この資本が朝鮮の産業にもたらした功績は認めなくつてならぬが、それと同時に、施肥でも、耕作法でも在來の傳統を墨守してゐた農民たちは、さうした産業革命に對應することが不可能となつて沒落の運命を辿るものが、隨分多數にのぼつてをるのは事實です。この對策を講ずることは朝鮮のいくたの問題のうちで最も重要性を帶ぶるものと信じてゐます。まだいくらも書きたいことはありますが、今回はこれにて筆を擱きませう。

京城から奉天へ



國境

京城から奉天へ

一わたり朝鮮での目的とした調査は一段落をつげたのであつたが、それでも次ぎから次ぎにいろいろの興趣にそそられて、それからそれへと心が動いて行くのであつたが、それでは切りがないので、二十日夜十時四十分京城發でK、Hその他六、七の知己におくられて奉天へと出發した。實は、もう一つ前の汽車で立つつもりにしておいたのだつたが、I君がぜひ晩飯をくひつつゆつくり話がしたいと云ふので一汽車おくれたわけであつた。丁度その日は夕ぐるるころからKの家といふので御馳走になつたが、この家は木覓山麓に建てられて眺望は絶佳といつてもよいくらるで、家は内地の茶室みたいにあそこの丘に一つ、ここの丘に一つと、とびとびにたつた風情など一寸すてがたいものがある。そして暮れゆく街にポツリポツリ燈の數がふえてゆくとき、私はしつとりとした氣持になつて緣臺のところで、夜の京城を見入るのであつた。

やがてIも汗をふきふきやつてきて、その晩はいろいろまとまりのない漫談に興をやつたのであつたが、七、八日前、私が間島に立つ朝、倭城臺の彼の家で逢つたとき、彼は東京での話だと

乙密臺に立つ

て、私に「どうも犬養内閣が七月には倒れるといふ噂がしきりにあつたが……」と云つたのであつたが、一週間後の今夜再び逢つてその言葉が偶然にも五十日間ばかり早く實現したことに、二人はさびしく笑つたのであつた。それから、こんど西園寺公が後繼内閣の問題で、興津から上京するとき、ずゐぶん悲壯な決意と準備のもとに出發されたことなどを話したりして、私はそこから停車場にかけつけた譯であつた。

京城から平壤までは寢臺に至るまで殆んど滿員の姿であつたが、その夜は雨がひどいのと、あつくるしさとで轉々として深いねむりにまではひることはできなかつたが、明けがた平壤驛につくとその大半は下車してしまつたので、それでホッと

した氣持になつたのであつた。

私は、平壤の聲をきくと急に飛び降りたい氣持になつた。そして十數年前に來たときと、どういふふうに異つてきたかを一ぺん見たくなつてきたのであつた。

そして、そのときM長官の厚いもてなしで、綿繡山から、乙密臺、浮碧樓と景色のいいところを次ぎ次ぎに見物させてもらつて、そのあげくには二隻の屋形船を溶々たる大同江に浮べてたいへんの御馳走にあづかりつつ四千年前の古都の面影をしのんだ夕を思ひだしたりなぞした。

今朝の蜆汁はうまかつた。一體に朝鮮の食堂車は食ひものがうまいと云ふのではないが、いろいろのことが行きとどいて氣持がよい。その日、新義州のあの長い橋を渡るまでは平和で、無事で、內地を旅するのと同じ輕い氣持であつたが、一たび安東に入ると、すべてが非常時のスタイルである。土嚢をつみ重ねてあるところから、鐵條網を張り、鐵兜、銃劍でいかめしく警護をかためての緊張ぶりなど、ここはもう兵匪の國であるとの感じをおこさせるのであつた。

だが、安東に著いてうれしいことは、いろいろの煙草がやすくのめることであつた。バットが四錢、朝日が十二錢、ウエストミンスターが三十錢である。ところが、廉いにはやすいが、朝鮮のバットも朝日もとてもまづい。私は輕い失望をしてそのままポケットにしまつてしまつたので

南滿の奇觀鳳凰山

あつた。

私はこの線路は十七、八年前は、五、六回も往復したことがあるのに、あまりの久方ぶりであるから、半ばは新しく、半ばは舊く、何だか夢の國を旅する氣がするのである。

それに列車のなかの話も、殆んど兵匪にかかはることばかりである。そして支那の奧地にある鮮人の虐殺されるところから、日本人の奧地での農場經營は、當分は生命の危險が伴ふこと、安奉線の沿線から一里も奧にゆけば、どこでも危險狀態にあること、彼等が停車場その他を襲擊するときは大抵午前三時頃であること、それから八月中旬から九月一ぱいの高粱の茂る頃ほひが、彼等が最も活躍する時期であること等々が、隣りの人々によつておもしろく語ら

れてをるのを、私は一語もききもらさじといつしか聽き耳を立ててをるのであつた。

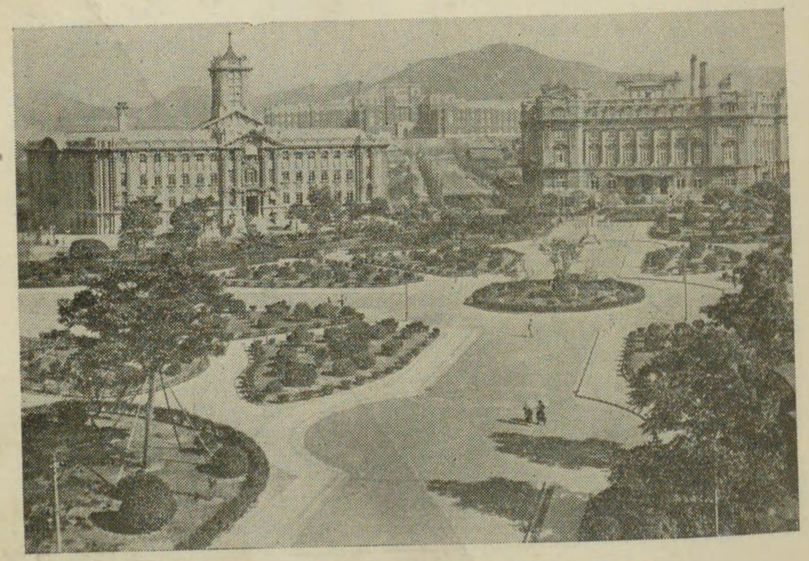
やがて鳳凰城や、鷄冠山をすぎたころ、列車長がきて奉天ヤマトホテルはリットン氏一行が來て滿員だらうと思ふが、豫約してあるかとたづねられたので「否」とこたへると、彼氏は丁寧にホテルまで驛の電話で照會してくれたのであつたが、やつぱり滿員お斷りではあつたが、そのかはり奉天ホテルと云ふのに一部屋とつておいたとの知らせで一先づ安心したのであつた。

だんだん奉天が近まるとともに望洋たる曠野が展開されて來て、氣分までがひろびろとなつて何とも云へぬ豪快さを覺えてくるのであつた。

驛頭にはY、Oその他二三の人々が迎へに來てくれて、宿屋もゆつたりしたところをとつてあつたのに……相かへりみて苦笑しつつ、それでも私は奉天ホテルへと自動車を走らせた。

大連の三日

大連の廣場

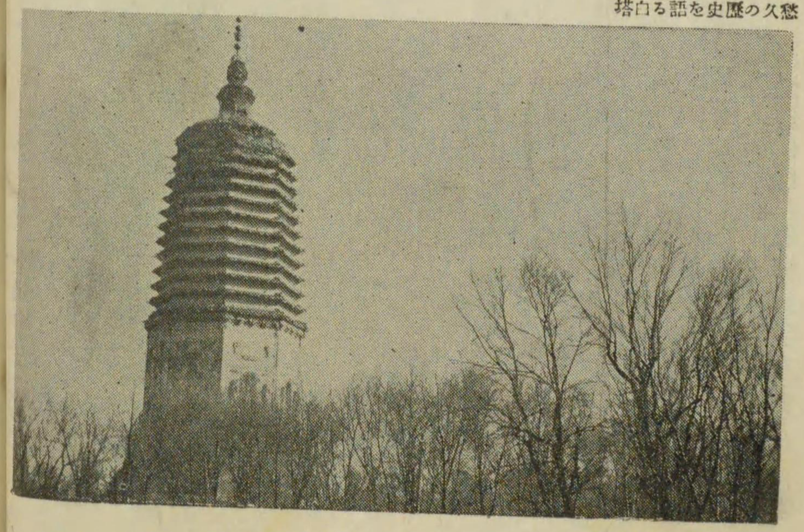


大連の三日

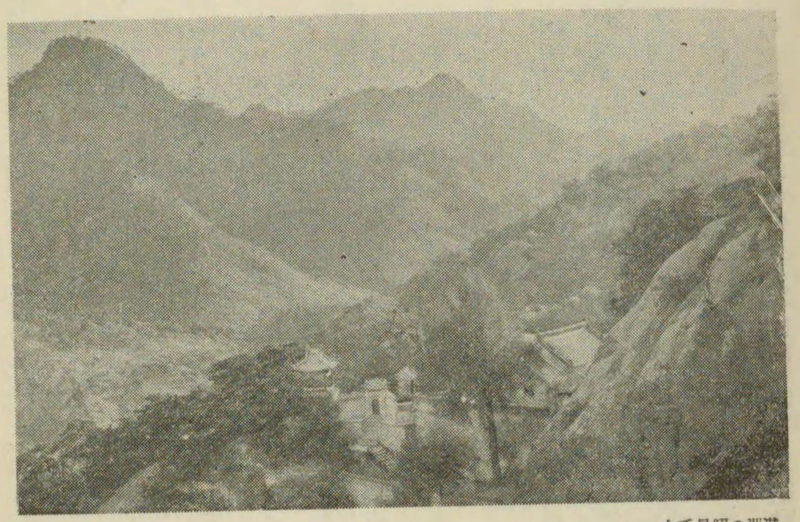
私は、今度こそは滿洲の金剛山である千山の幽境にも一、二日ひたつて見たいと思つたし、かつ遼陽の白塔や、太子河を中心に發達した四千年來の文化のあとも、もう一度見直して見たいと思つたのであつたが、私と風景との緣のないことは金剛山行にたいして幾たびの念願がとどかなかつたやうに、今度の千山行も、心と頭とが通つただけで、足と眼とは永劫にそのあこがれに從はうとはせないのである。

×

私の乘れる奉天からの汽車が、乃木將軍の詩で名高い金州驛に入ると、そこには思ひもうけぬU君とS君



悠久の歷史を語る白塔



滿洲の絕景千山

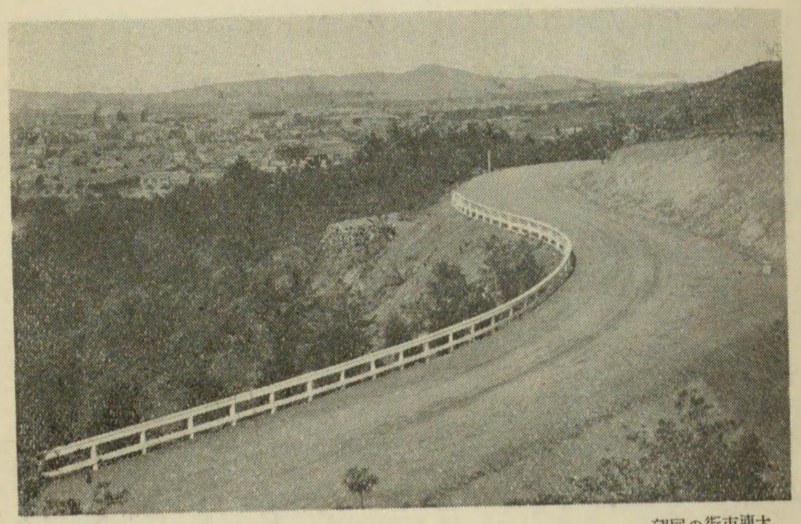
とが迎へにきてをられた。そして金州からは日本人女學生、中學生、サラリーマンなどの威勢のよいのが、ドヤドヤ乘車して來て食堂車は俄かの滿員札である。私はこんどの旅行中で、學生がこのやうに食堂車を利用するのを見たのは初めてである。そして內地の旅をしても、京濱、阪神の汽車に乘つても、さういふ氣輕に食堂に飛込むものはないのであるが、ここは經濟上の程度がよつぽど高いのかとも考へて見たが、しかしそれは壽司とか、親子丼のやうに安直で食べるものがあるためではあつた。かうした時勢の變化に驚かされもするし、また我民族の超飛躍がほほゑましいものでもあつた。

大連驛にはH氏をはじめ、たくさんのゆかし顏々が並んでゐた。どの顏をのぞいて見てもうれしさう

なもののみであり、そして永いあひだ逢ふことのできなかつた久しぶりの目と目のあいさつには潤んで見えるものさへあつた。

私は、久かたぶりに自分がたびたび泊つたことのあるホテルに腰をおちつけたが、さすがになつかしいものであつた。しかし、その當時したしくしてゐた五、六の先輩、友達の殆んどすべてが轉任したか、沒落したかして一人も殘つてゐないたよりなさである。今度逢ひたいと思ふ人々も、新しい關係の人々とか、それでなければ他のところで親しくしてゐた友垣のみである。私は淡いさびしさも味つたが、それでも故郷の中學での同窓生たちが、だんだんこの界隈の中堅となつてくるのを見て、新しい喜ばしさも生れてくるのであつた。

大連の街もグングン伸びてきた。人口も四十萬といふからには、先づ地方としては大都會といつても差支へはあるまい。だが、いまでは政治的にも、軍事的にも我對滿關係の中心ではなくなつてをる。今後滿鐵本社が依然として大連に置かるるか、否かは問題であるが、それに依つて經濟的の重要性の或部分がもぎとられて行くのは自然の數である。それに今後、北滿の諸特産が吉會線、日本海線によることとなつたら、大連の運命はどう變つて行くであらう。さうした經世的の考へかたをまとめることが、大連としてはいちばんの肝心なことではあるまいか。



大連市街の展望

私と大連とはずゐぶん古い馴染だ。だから今度も三日間も滯在してゐたのであるが、別に街の見物にそそらるるやうなものもなかつた。ただ、私はSとUの誘ふままに泥棒市場をのぞくことにした。同行のSがとてもくさいから長くはをられまいと云ふのを二、三十分に亙つて小まめにひやかして見たが、M・C・Cの空罐や、鮭の罐詰の空いたもの、インキ壺の空いたもの等一厘の價値もしないものから飯櫃やシャモジ、毛皮、貴金屬の類に至るまで何でも並べ立ててあるのであつた。

何しろ、さうした店が幾つの通りにもまたがつて數百軒も立ち並んでをるので、異臭がプーンとして初めのほどは、我慢ができないやうにもあつたが、それでも、ものの五、六分も歩いてをると別段のこ

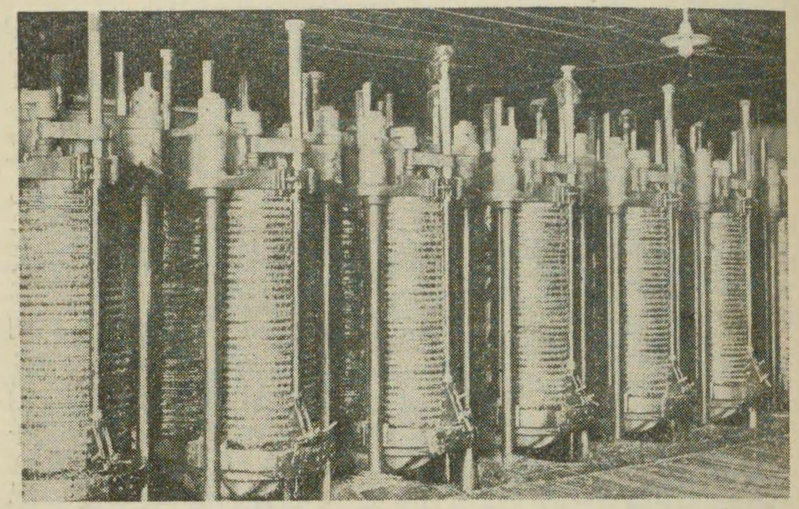
ともなく、いろいろの好奇心が手傳つて、次ぎから次ぎに見て行く興味でとても面白さを加へてくる。

この市場に出る品々は、十中の八、九は大盗小盗の手にかかつたものであるが、それが面白いことには朝がた泥棒に逢つたものが、夕方ここで發見さるることが多いとかで、大連の人々はここのことを「小兒盗(セウトル)市場」とも云つてをるのである。

さうした品々であるから、とても値段はやすい。十圓のものが、僅か一圓か二圓かで買へると云ふ始末である。だが、廉く買つたはいゝが、もしも、それが知人のものであつた場合は顏を赧らめても、どうにも、しやうのないことが到來するのである。

我國の人々は、初めのほどは民族的のかすかなほこりから、そこに出かけるのを潔しとしなかつたが、今

泥棒市場



豆粕をつくる

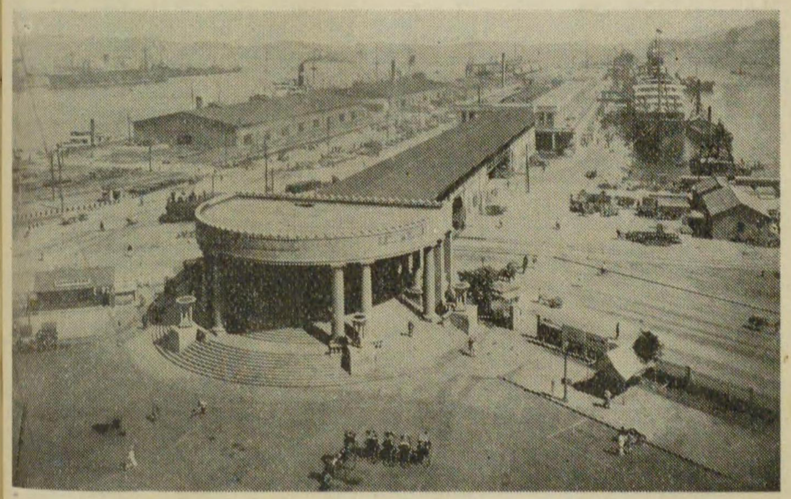
では、どこのどなたさまでも、晝間から人力車や、馬車で堂々とでかける狀態である。それどころか、新婚の夫婦が荷車一臺をもつていつて、世帶道具一切をここの市場で取揃へるところまで發展してきてをるのである。

私はここにおいて人間の氣品、民族的の誇耀といふものが、そんな巷で、泥棒市場で、悲鳴をあげてゐはせないかとふりかへつても見たのであつた。

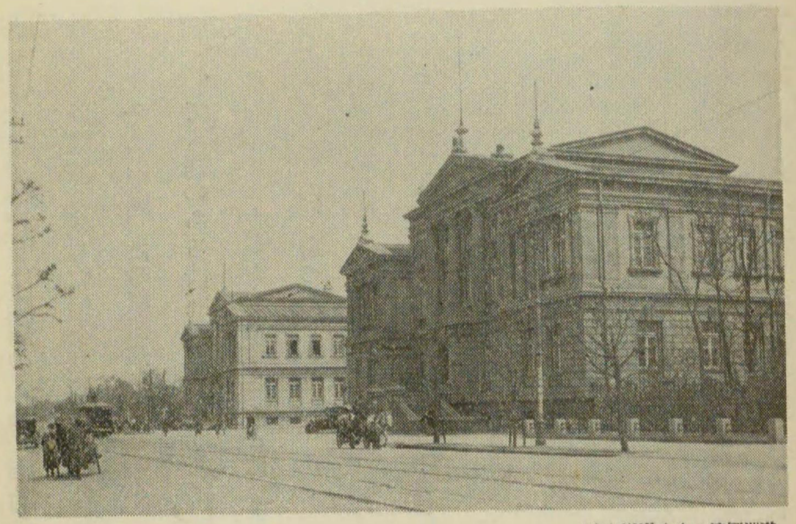
それから三泰油房では褌なしの支那人がたくさんで油粕の製造をやつてをる。そして四十七斤もあるものを四枚も五枚も肩にもつて埠頭へ走る。全く勞働力の濫費だ。これからは苦力の數を埠頭から一人でも少くすることに向つて我等の努力は强められねばならぬ。いつまで經つても大連埠頭に數萬の苦力

がウヨウヨすることは文明と逆行する現象ではなからうかとも思つた。そこから滿蒙資源館、大連埠頭事務所などを一通りは瞥見したが、別にことあたらしく感じたこともない。ただ埠頭事務所樓上から、あの長い防波堤や、一萬五千尺に垂んとする內面岸壁、それに一日十八萬噸を收容する港內の經濟活動の目ざましさを展望したときは、さすがに壯快の氣持は起るのであつたが、その壯快の裏には一千萬留を投じて戰敗の結果人手に渡さなければならなかつた彼等露人たちが、この風景の前に立つて顏をそむける場面のあることをも思はねばならぬのだ。

滿鐵を訪問して內田さんにも逢つた。何だか忙しいときでもあつたか、顏の色がすこし惡くてセカセカしてゐた。いつ逢つても外交官できたへたと云ふ柔かい



關玄の線命生



滿洲經濟の中心滿鐵本社

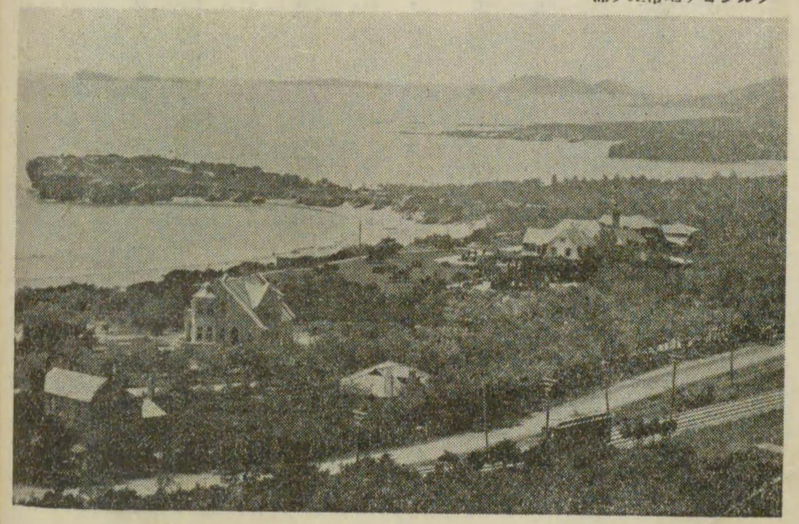
感じはする。今度の滿洲國承認で少々骨つぽいところを見せたやうでもあるが、私は內田さんのしみじみした人生哲學をきいたこともなし、そしてそのなしたあとについて研究しようとしたこともないからこれ以上どうかう批評するの趣味をもたない。一たいに滿鐵總裁には後藤さん以外おもしろい風格の持ち主が行かないのはどうしたものか。それはいつでも政府や、政黨の御勝手元を仰せつかる素町人みたやうなことをさせらるるので、一つの事業の前に自分の生命を打込んだり、風格をにじみ出させようとする人々が、避けて行かないからの故であらう。それから、滿鐵の寶石的存在である橘君にも逢つた。かうした人を生かして行く總裁がをればなあ！ とも思つたりした。しかし東京政府の首腦に官僚の古

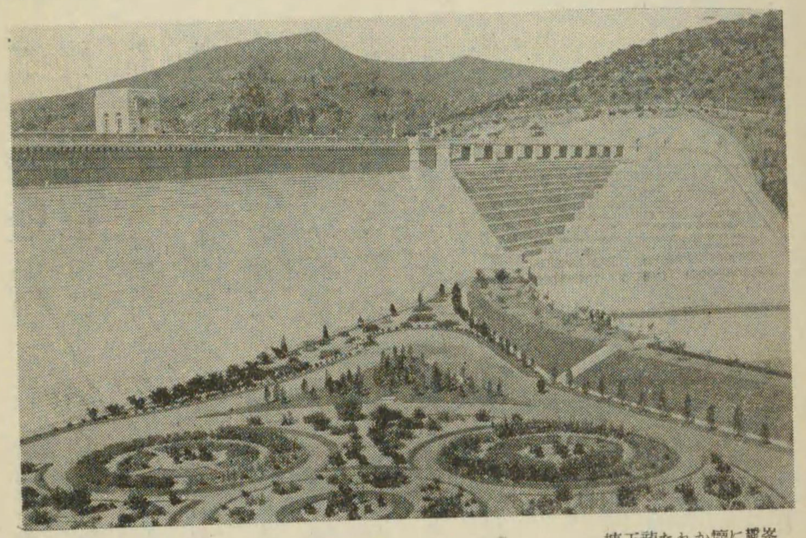
手がをさまる時代では國の人心は躍動せないのである。政黨の總裁も官僚上りは採用せないことにしたら、そこに潑剌たる氣運が動いてもくるだらう。何にしても幅のある情熱の人でなければ降りかかつた新興日本の大厄難を突破することはできまいとも思つたりしたのであつた。

その他縣人會や、いろいろの人々からの招待やらでとても忙しい三日の大連ではあつた。また、H君が久しぶりにゆつくり逢つて談話をかはして見たいが、大連ではとても氣がおちつけまいから旅順までドライヴして見ようぢやないかと誘うてくれる。

Hと、私とはずゐぶん古いなじみだ。彼は遼東の地で一つの新聞社を主宰するまでの成長を示してくれたことについては私として限りなくうれしいので

ブルジョア地帶星ケ浦





塘王龍たれか懷に聳峯

ある。それで旅順行の提議にも喜んで諾つたわけであつたが、われわれの出發の際、私の宿に星ケ浦の農場主千葉さんが見えて、一つ農場を見てくれとのことであつたので、そこにもしばらく立寄つたのであつた。ヤマトホテルから星ケ浦までは坦々たるコンクリー道路で、その町並もまことに堂々たるもので、東京の役所街みたやうな感じさへおこるのであつたが、しかし海岸の形勝の地はのこらず別莊地帶となり、文化的洋風の建築が一ぱい立ちならび、ここにも資本主義のなまあたたかい風が吹き滿ちてゐるのであつた。

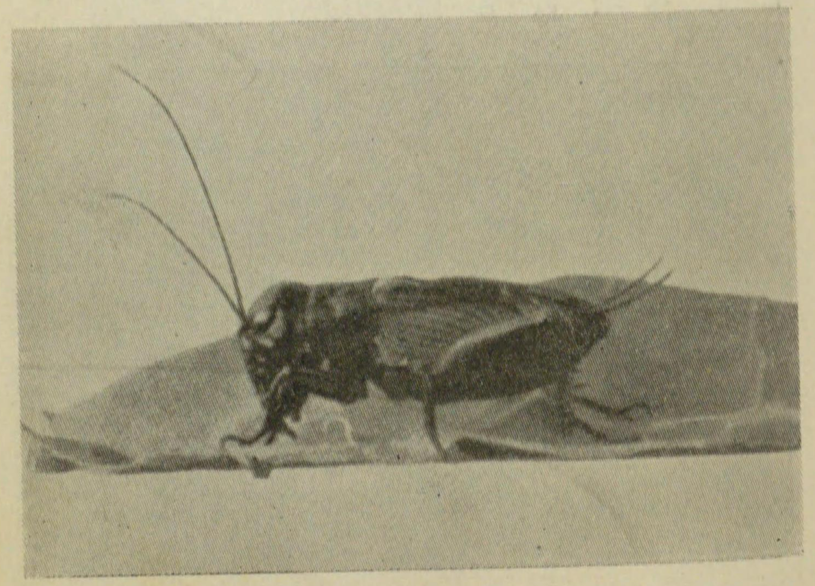
Hは午餐にはまだ早いから龍王塘の水源地に遊びに行つてみようと云ふ。

なるほど大きい立派な池だ。三面は峰巒に圍まれ

て靜寂そのものである。これが大連四十萬市民の命の親となつてをるのであるが、それは天然の池でなくして雨水だけを溜めた大きな湖なのだ。わたし等は、S技師の好意で舟をこのもの靜かな山中の湖に泛べて三、四十分ぐらゐあちらの汀、こちらの岸と漕ぎまはつて涼を趁つたりしてゐたが、海岸のドライヴよりはこの方がズッと爽かな氣持になれてよかつたのであつたが、そしてMさんが鯉でも捕つてたべさしてやるとも云つてをつたのであつたが、それも斷つて豫定のとほり旅順に行つて海岸から舊市街、新市街を一まはり見物してホテルで御馳走になつた。旅順の街も、ホテルも、舊都の跡のごとくとてもさびしくなつてしまつた。

私は旅順の主であつた白仁さんがこのごろどうしてをるかを思つた。そして溫容玉のごとき人格者であつた蠟山君が死んでからもう幾年になるだらうと指ををつて數へて見たりしたのであつた。

こほろぎ



秋聲

こほろぎ

私は、彼等の生活は沙漠のやうな乾からびたものであらうと思つてゐた。

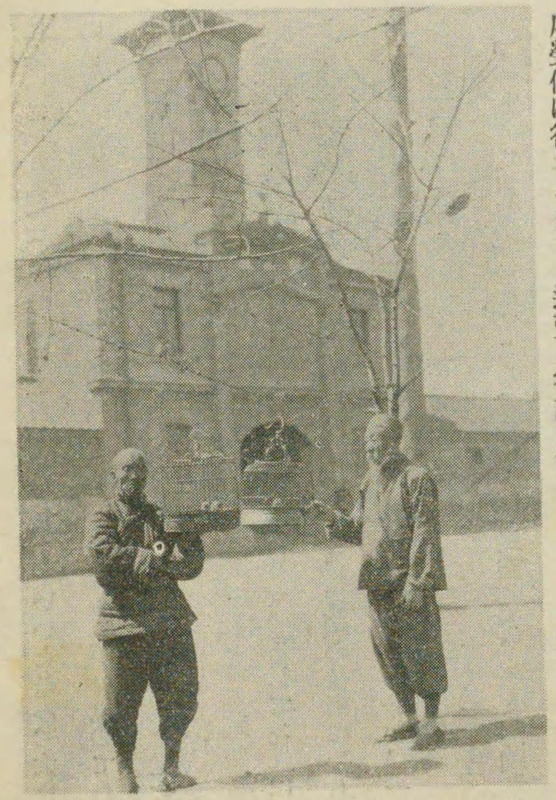
私は、彼等が眞夏の日中をどういふ殺風景な姿をしてをるであらうかを見るために碧山莊におとづれて見た。その日は、九千に近い苦力のなかで、埠頭に出ないで休養してをるものは、その四分の一ぐらゐ殘つてゐたであつたらう。彼等は、水道の栓をぬいて頭からぢやあぢやあやつてをるものもあるし、緣臺のところでうどんを頰張つたり、生の葱を銜へたり、銀蠅がたかつてをる天麩羅や、湯餡をとてもうまさうに食つたりしてをるものなど千態萬樣ではあつたが、しかしそれは私があたまに描いていつたとほりの風景ではあつた。

千姿萬態

ところが、彼等の長屋の軒にはいくたの鳥籠や蟲籠がブラ下つてをる。鳥籠の下では咽ぶやうな胡弓の音さへもきこゆるのであつた。

私が、曾て北京にゐたころ、その城內と城外とを問はず、物うりや、勞働者までが、自分が日雇勞働に行くときも、辻賣り行商にでるときも、鳥籠をたづさへて行くのを、よく見るのであつたことを思ひださせるのであつた。

小鳥に遊ぶ



彼等は、毎日毎日の勞働において、ずゐぶんたへられないやうな激しい力仕事に、五年も、十年も平氣でたへて行く。いかにそれが、民族的に優越せる體格を持つてをるとは云へ、その氣持、その趣味

においてわれわれの思ひ知ることのできない、いいところ、大きいところ、風雅なところ、自然にしたしみ深いところがあるであらうことは、かねがね思つてゐたのではあつた。

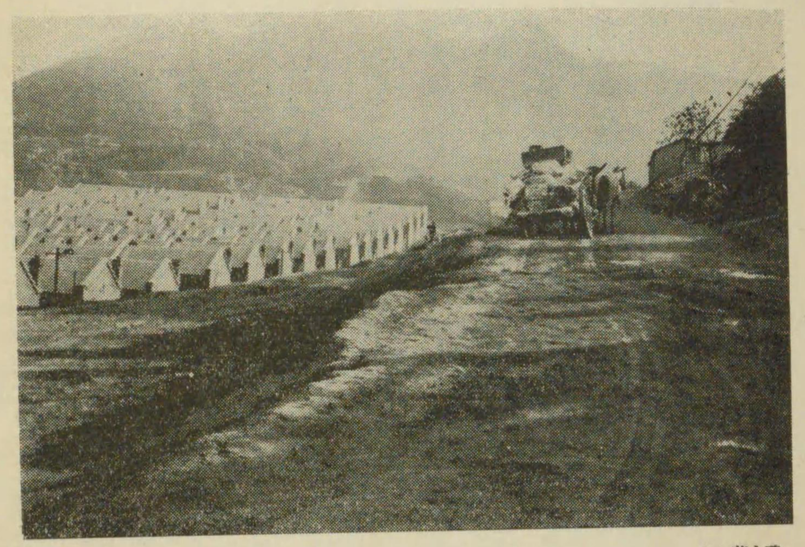
だが、いま、まのあたりにさうしたゆかしい彼等の風懷を見せつけられて、いひやうのない感じがわいてきたのであつた。

彼等は埠頭に鳥籠や、蟲籠をたづさへて行つて、そしてそれに氣を奪はれて努力の上にいくらかの散漫なところが、出でてきはせないかと、埠頭の仕事に長らく携はつてをる人々にきいてはみたが、それは絶對にないさうである。ただ晝飯の三十分か、一時間の休憩時間においてのみ、とても三昧に入るやうな愛玩振りを示すと云ふことである。

さうした閑日月があつてこそ、偉大な、民族的な、超人間的な勞働力を發揮することができるであらうことをも思つて、彼等のゆつたりした人生觀に同情と敬意とをささぐるのであつた。

私は、そのときふと、こほろぎの話をおもひだしたのである。

こほろぎは數十年前までは明、清朝の宮廷でいとも珍重せられ、毎年一、二回づつは紫禁城や、萬壽山あたりで晴れの力競べ、聲競べの決勝戰があつたものらしく、その場で優勝の見込のあるものは一匹で五六千金とか、一萬金とかの高價を呼んだものだが、その風雅の波及したものにや、



碧山莊の夕

上海の一流藝妓のものたちも、鼈甲のとてもきれいな容器に、こほろぎを飼ひ、そのいい音のするものを懷中にしのばせて客席に侍りしものであつたが、さうした藝妓たちは、ときに月前で蟲の聲くらべなぞするのであつた。しかし、さういふ風流も血なまぐさい革命さわぎがつづいたため、だんだん解消されてしまふのであつた。

だが、上海藝妓のさういふ風流は、そのこと自體が客人にたいしての賣りものであると云へば、さうも見られぬこともないであらうが、彼等苦力階級が蟲の音に夏の夜を更かしたり、鳥歌をきいて勞働の苦しみを忘れて自然の美はしさにひたるところに無限の詩趣が漂うてをるのである。

ところが、またそれどころの風流は、風流のう

ちにあらずとするの超風流の存在を一つ語つて見たい。

夏の蟲でも、秋の蟲でもその生命はたいてい一年と思はれてをるが、支那では、聲を愛づる蟲で溫度さへ適當に保つことができれば越年させることができるので、漢土の風流人はあたかも赤ん坊をだいて眠るがごとく、自身の肌身につけて熱氣を頒ち與へるとか、童便をさがしもとめて食料に充てるとかして越年させるのであるが、その根氣のよさ、風雅ぶりの徹底さには、おのづと頭のさがるものがある。

何はともあれ、目に一丁字のない彼等苦力たちの大群も、皆、それが輝かしい齊魯文化の後裔であり、東洋思想を長い間支配したところの孔孟と鄉里を同じくするのである。

彼等はむさくるしい碧山莊の宿舍で蟲の音に夏の夜をふかす。そして月明の夜などは胡弓などをかなでつつ遙か生れ故鄉の山東を渤海の彼方に見下しながら鄉愁の集ひをなすこともたびたびあるとか。

苦力の問題

勞働へ

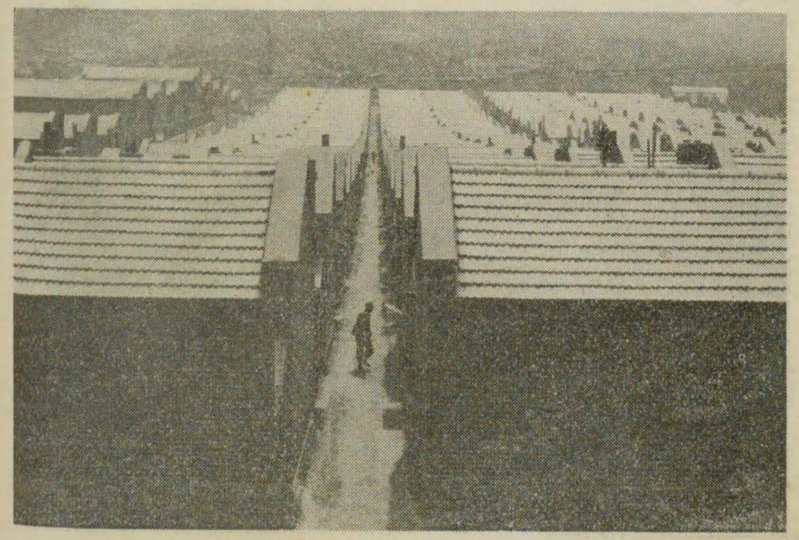
苦力の問題

あんな疎食をしてゐてどうしてあれほど力がつづくものだらう。

かうした感じをもつやうになつたのは、ずゐぶん古いころからのことであるが、今度の旅行では苦力の概念だけは得たいと思つた。なぜならば苦力の問題は、我が滿洲問題と根本的關係をもつが故である。

南滿洲といはず、苦力の大群が、集團的生活を營んでをるのは大連の碧山莊を以て最となすのである。そこには、いつも一萬内外の苦力が寄宿してをるわけであるが、私が訪れたときは、ここも

一萬苦力群の宿泊所



苦力の入所に指紋を採る

世界的不況の飛沫をうけてをるのと、滿洲特産の出廻期でないため八千四、五百人しかゐないと云ふことであつた。八千四、五百人といへば殆んど一箇師團に該當する大集團である。しかも、それが裸の集團、無手の集團であるから、とてもなごやかな一つの奇觀を呈してをるのである。

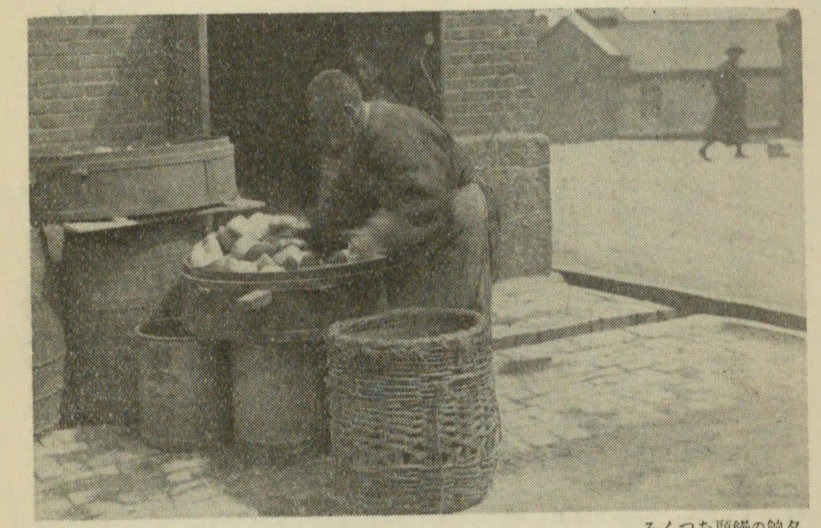
私は、そこの所長さんや、佐賀、鵜木さん達の案内で、碧山莊のあらましを見ることができて、彼等の日常生活や、人生觀のどういふものであるかと云ふことだけは、ほぼ想像がつくやうになつたのであつた。

私は彼等が、埠頭の荷揚人足として、土木工事、豆粕會社の工人として、營々として働くありさまをいくたびも、幾年も見てきてをるのである。そして

一生懸命働いてなほ苦痛をうつたへず、ニコニコして日々の苦しい仕事に當面してをる眞劍の態度を見ると、いつもながら脱帽せずにをられぬ。しかるに彼等にたいして犬か猫かのごとく奴隷視し、そして低級な優越感をほこらんとする人々にたいして憎惡の念と、憤りとをおぼゆるものである。

私は現時の段階において彼等が、優越せる民族によりて支配せられ、驅使せらるるのは、むしろ當然のことであらうと思ふけれども、しかも、彼等の文明、文化は永らく東方の光であり、亞細亞の先驅をなしてゐたのであつた。彼等は一食一錢か二錢かの孛々(ポーポー)や、饅頭、糍飯(ツーファン)、油條(ユテウ)でもつて命をつないで行く、それをたのしさうに頰張つて平和の日のすぎゆくを無上の喜びとしてをるのである。彼等の一日の勞働賃銀は平均して一日六、七十錢ぐらゐに當るのであるが、これを以て一家眷族を養つて行けるかどうか。

彼等の一食は前に云つたやうな一錢か二錢の主食に、もやし、葱、白菜、大根、蒟蒻、韮等をおかずとして用ゐてゐる。ことに、もやしを豆粕の油でいためつけて食ふのが普通であるが、かの葱やにんにくを街の眞中で生のままかじつてをるのは誰でも知つてをる通りである。それがためロのなかがくさいとか、放尿がたまらぬとか云はれてをるが、口中の黴菌をころし、あたまの



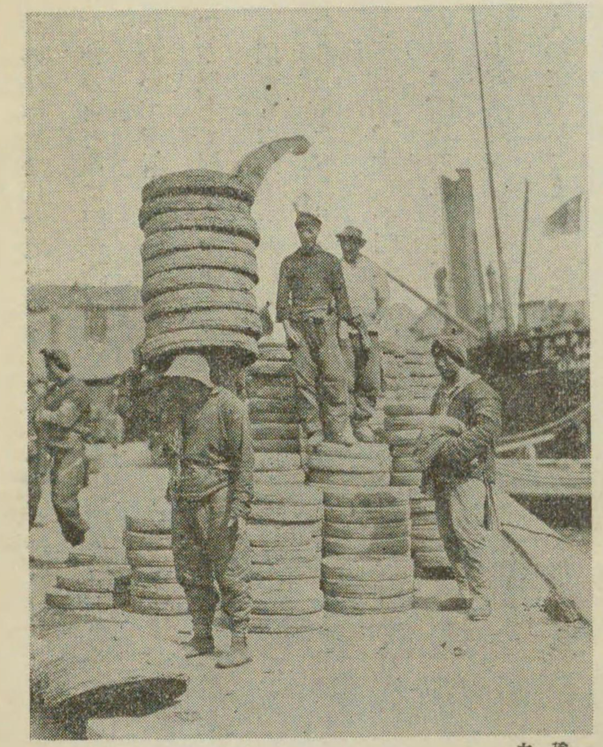
夕餉の饅頭をつくるく

疲れを醫し、肺を強くするにそれは非常に必要であるとも云はれてをる。要は彼等の愛好する菜食が、非常に滋養分の多いものを選び、消化の容易なものを選ぶがために先天的に體力が強いうへに、ますます強靱となるわけである。菜食が經濟的であることは勿論であるが、一面には菜食を常用することによつて動物慾が制理されて、兇暴性、鬪爭性を減殺するといふから彼等には一擧兩得の食ひ物ともいひ得る。菜食主義は我國にも、歐米にも近ごろ流行となつてをるが、その效果として心臟の强大、血液の淸淨等々を擧げられてをる。だが、我が邦では「肉の一片にありつかねば力がでるものか」と、いふふうに思はれてをる。なるほど醬油の汁に僅かばかりの菜片をなげこんだものとか、梅干、澤庵の類ではさうか

も知れないが、廉價の油をいつも使用する習慣がついたならば、獸肉や魚肉を用ゐると大差のない腹應へのあるものにならう。昔の聖は「菜食で通せるものでなくてはどうしても高僧の境地はうかがへない」としてあつたほど野望の解消にきき目はあるとされてをる。が、しかし高僧では豆粕の四十七斤もあるのを四、五枚づつ舁いで年百年中荒仕事もできまいから。

山東苦力は全く力が強い。

とても日本人勞働者の對抗のできぬ底力がある。彼等は油房會社でも、埠頭でも百六十八斤から二百十五斤の油粕をかつぎ通してをるのだ。ときたまに四十七斤のものを十枚かつぐものもあるさうだ。さうした大力でありながら、勤勉で、勞銀がやすくて、勞働爭議などおこさないと云ふので、大連埠頭では日本勞働者も、朝鮮勞働者も太刀打のできない絶對的の勢力を保持してをるのである。それから山東苦力は腰掛的の勞働者でなくて、十年、二十年の久しい間をも戰ひぬく絶倫の力持ちであり勢力家たちでもあるのだ。先づ碧山莊の昭和六年二月一日現在の一萬三千三百十七名のうち、二十年以上が七十一名、二十年未滿が五百七名で三・八パーセントを占め、十年以上三十年以下のものが二千六百八十五名、五年内外が二千七百四十三名、三年内外が四千四百十二名と云ふ驚くべき數字を示してをる。



苦力

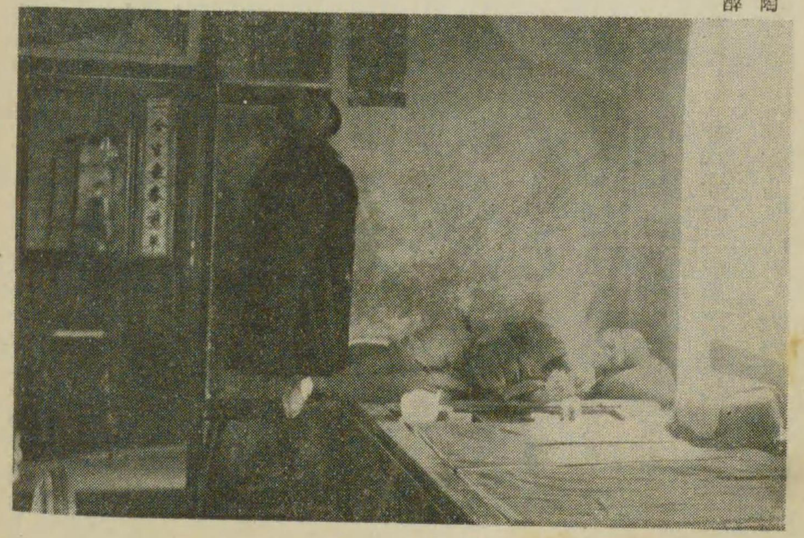
そしてその年齢においても二十五歳から三十歳未滿のものが三千七百二十七名で二八パーセント、三十歳から三十五歳までが二千八百二十六名で二一・二パーセント、二十歳から二十五歳までが一八・七パーセント、三十五歳以上四十歳未滿が一五・八パーセントを占め、五十歳乃至五十五歳が一・六パーセントで、その平均年齢三十歳、最高が六十四歳、最低が十八歳になつてゐる。

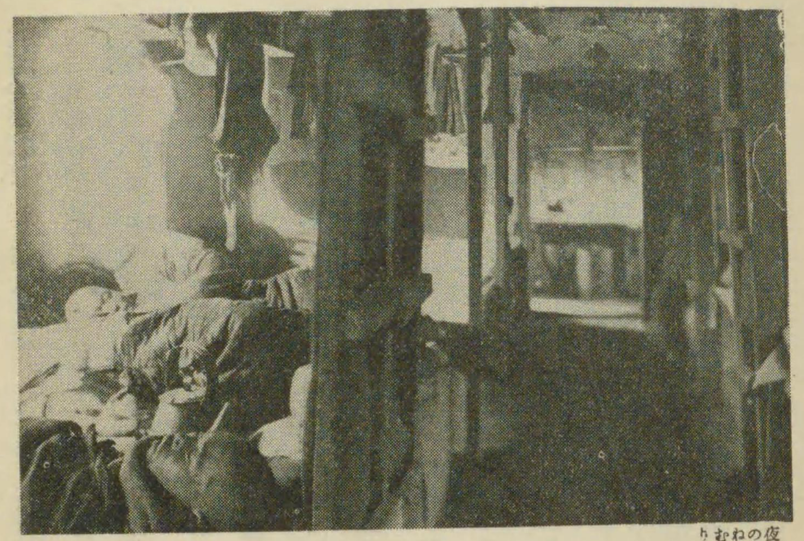
彼等の辛抱强いことは世界第一であるのである。その辛抱のいい根本はやつぱり體質にあるのであらうが、孔孟の後裔とも見るべき山東人がどう云ふ狀況のもとに、毎年さうたくさん渤海を渡つて滿洲へ押寄せてくるのであらう。

山東省は農耕地において全支那の八分の二の地積を占めてをると稱せられ、いくたの農作物におい

ての先驅をなした地であるけれども、人口があの狹隘なるところに四千萬人近くもあるから、その密度において、耕作地の餘剩において、どうしてももう現在以上に展開することの出來ぬ狀態にあるので、芝罘からは大連めがけて毎年數十萬の苦力が、殺到するわけである。今統計に照せば、大正十三年二十四萬內外、大正十四年三十三萬四千、昭和元年四十五萬、昭和二年には百一萬三千に飛躍し、その後は毎年百萬內外の苦力が芝罘、營口、安東から滿洲國に入つてくることになつてをるが、その十分の九は山東苦力であるから驚かされる。卽ち、我國の人口は毎年百萬人內外づつ增加することになつてをるが、それと略同じ人數が滿洲國に入つてくることになつてゐる。現在の滿洲國の人口三千二三百萬の八割は

陶醉





ちむねの夜

これ等漢族の侵入したものである。つまり山東省の出店みたやうなものだ。我國が數十億の財を糜し、數十萬の人命を捐てての貢獻も、第一に彼等山東から渡來した漢民族のみが、その恩澤を蒙ることになつてをるのだ。この點、我が八千萬民族は愼重に考慮をめぐらすの要があるのである。

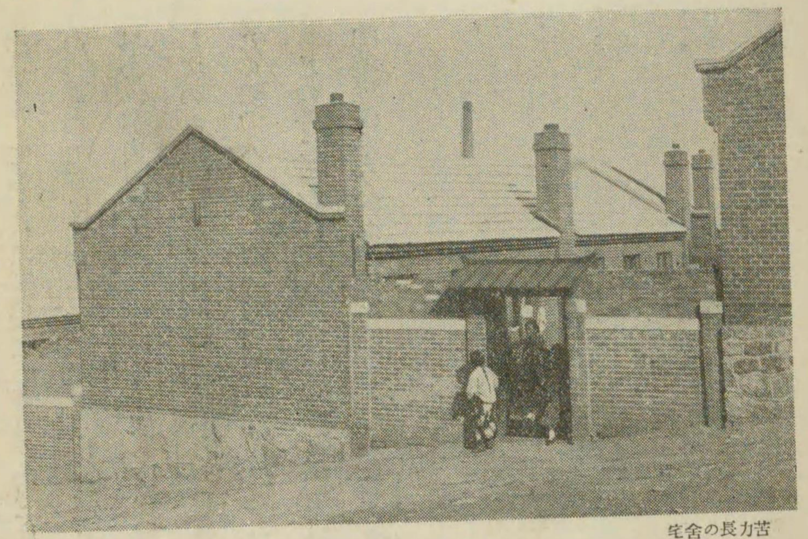
私は、今後も今までよりは、一層たくさん押寄せるであらうところの山東苦力と、我が資本と、朝鮮勞働者との關係對立においてどういふ情勢を齎らすであらうかを我が識者によりて眞率に研究さるることを望んでをるのである。

ただいまでは、朝鮮勞働者の特長とするところは水田耕作者としてのみ彼等山東人に比して優越せる地位を占むるのみである。しかし、水田耕作者とし

ても、だんだん支那人が雨を嫌はなくなり、水に入る傳統を打破するにおいては、鮮人勞働者の特殊的地位も永遠に保持さるるものとは思はれない。支那の農夫や、苦力は蛭に血を吸はるるのが大の恐怖である。だが、日清役當時、大部分の兵士が雨に濡るるを厭うて傘をさして戰時の勤務に服するものが多かつたが、今では雨に濡れつつ平氣で戰爭をするやうになつてをるから、蛭をも恐れないやうになる時代は早晩、到來するものと考へなくてはならぬ。さうした場合鮮人勞働者の稻作勞働にたいしての一手專賣が失はれてしまふことになる。そのうへ、鮮人勞働者は生活費が高く、體力において苦力に及ばぬものがあり、一ケ月の勞働日數も到底苦力に及ぶべくもないから、その對立抗爭にはたいへんに骨の折れることである。この點を政治的に、經濟的に、民族的に、いかに調和して行くべきか、これが滿洲國の今後において一つの大きな問題となつて行くのである。だから、苦力の研究、山東の移民の研究といふものが、非常に重大性を有つやうになつてくるのだ。

×

また、彼等の衞生保健の狀態はどうであらう。一寸考ふれば、彼等はたいへん不攝生であるから、罹病者の數がとても多いだらうと想像されるが、それがまた案外で在宿舍一萬人にたいし一



苦力長の舍宅

日の病人が五・八人と云ふ統計を示してをるのである。これでも彼等の健康といふものが、どれだけ頑强であるかが分明するであらう。そしてその病氣の種類は腫症が二六パーセント、黴毒二〇・七パーセント、感冒が一八・一パーセント等である。このうちで黴毒患者が比較的多いのは、彼等が低級な享樂に滿足する結果であると云はれてをる。彼等は性慾の整理にたいして十錢、二十錢の安價な取引を以てし、そして一人の女を二、三人で共有するものも多いときいた。かうした道德的、倫理的の問題は經濟的にも關係をもつことが多いのであるから、他日ゆつくり別に論ずる機會もあらうと思ふ。

私は、苦力の問題にたいして若干のぶるところがあつた。そして日本の移民の態度、種類と云ふもの